一般財団法人米子市文化財団
埋蔵文化財発掘調査報告書 13

一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

鳥取県西伯郡伯耆町

金廻家ノ上ノ内遺跡・
金廻家ノ上遺跡・
越敷山古墳群（金廻地区）

２０１７．３

一般財団法人　米子市文化財団

一般財団法人米子市文化財団
埋蔵文化財発掘調査報告書 13

一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

鳥取県西伯郡伯耆町

金廻家ノ上ノ内遺跡・金廻家ノ上遺跡・越敷山古墳群（金廻地区）

２０１７．３
一般財団法人　米子市文化財団

例　　言

１．本報告書は、鳥取県が計画する一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴い、平成25・26年度に西伯郡伯耆町金廻地内で実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
２．発掘調査は、鳥取県の委託を受けて、一般財団法人米子市文化財団が実施した。
３．本報告書における方位は真北を示し、表記した座標値は世界測地系の座標値である。またレベルは海抜標高を示す。
４．本報告書第３図の地図は、国土地理院発行の５万分の１地形図「米子」（平成17年１月１日発行）を加筆・修正して使用した。
５．調査の実施に当たって、基準点測量をエースプランに、調査前地形測量と空中写真撮影をフジテクノに、出土鉄製品の保存処理を元興寺文化財研究所にそれぞれ委託した。
６．出土石材の同定は、高橋章司氏の肉眼観察による。
７．本報告書は、佐伯純也が執筆、編集した。
８．発掘調査によって作成された図面、写真類は米子市埋蔵文化財センターに、出土遺物は伯耆町教育委員会によって保管されている。
９．現地調査及び報告書の作成には、多くの方々からご指導、ご支援を頂いた。明記して感謝いたします。（敬称略）
　　井上貴央、高橋章司、山内紀嗣、鳥取県西部土地改良区

凡　　例

１．発掘調査時に使用した遺構名及び遺構番号は、報告書作成時に変更している。
２．遺跡の略称は「TK-コシキ」と記載した。
３．本報告書における遺物・遺構番号は次のように記す。
　Po：土器・土製品・陶器　　S：石器　　F：鉄製品
４．本文中、挿図中及び写真図版の遺構・遺物番号は一致する。
５．遺物実測図のうち、須恵器は断面黒塗り、それ以外は断面白抜きで表示した。
６．遺物実測図の縮尺は、土器・陶器が１分の１、４分の１。石器が１分の１、３分の１。鉄製品が２分の１、４分の１である。

金廻家ノ上ノ内・家ノ上遺跡・越敷山古墳群　新旧遺構名対照表

金廻家ノ上ノ内遺跡Ａ区

新遺構名	旧遺構名
124号墳 １主体部	TK-1･SX9
124号墳 ２主体部	TK-1･SX14
125号墳 １主体部	TK-1･SX6
集石 1	TK-1･SX11
集石 2	TK-1･SX3
陥穴 1	TK-1･SK10
陥穴 2	TK-1･SK5
陥穴 3	TK-1･SK1
陥穴 4	TK-1･SK2
陥穴 5	TK-1･SK4
陥穴 6	TK-1･SK7
陥穴 7	TK-1･SK12
陥穴 8	TK-1･SK8
陥穴 9	TK-1･SK15
土坑 1	TK-1･SK13

金廻家ノ上ノ内遺跡Ｂ区

新遺構名	旧遺構名
石棺墓１	T-4･SX1
陥穴 10	TK-5･SK4
陥穴 11	TK-5･SK2
陥穴 12	TK-5･SK1
陥穴 13	TK-5･SK3
陥穴 14	TK-5･SK5
陥穴 15	T-1･SK5
陥穴 16	T-1･SK1
陥穴 17	T-1･SK4
陥穴 18	T-2･SK2
陥穴 19	T-2･SK3

金廻家ノ上ノ内遺跡Ｃ区

新遺構名	旧遺構名
73号墳 １主体部	〃
73号墳 ２主体部	〃
74号墳 １主体部	〃
石棺墓２	TK-2･SX11
土坑 2	TK-2･SK6
陥穴 20	TK-2･SK12
陥穴 21	TK-2･SK14
陥穴 22	TK-2･SK10
陥穴 23	TK-2･SK9
陥穴 24	TK-2･SK13
陥穴 25	TK-2･SK8
陥穴 26	TK-2･SK7

金廻家ノ上遺跡

新遺構名	旧遺構名
石蓋土 壙墓 1	TK-3･SX3
土器集中１	TK-3･SX4
陥穴 27	TK-3･SK1
陥穴 28	TK-3･SK2

目　　次

例言、凡例、新旧遺構名対照表
目次
図版目次
写真図版目次

第１章　調査の経緯と経過
　第１節　発掘調査に至る経緯 ……1
　第２節　発掘調査の経過 ……2
　第３節　整理作業の経過 ……2
　第４節　調査体制 ……4

第２章　遺跡の位置と環境
　第１節　地理的環境 ……5
　第２節　歴史的環境 ……5

第３章　金廻家ノ上ノ内遺跡Ａ区の調査
　第１節　調査区の概要と層位 ……9
　第２節　古墳の調査……13
　第３節　古墳以外の調査……25
　第４節　遺構に伴わない遺物……29

第４章　金廻家ノ上ノ内遺跡Ｂ区の調査
　第１節　調査区の概要と層位……30
　第２節　古墳の調査……32
　第３節　古墳以外の調査……35
　第４節　遺構に伴わない遺物……39

第５章　金廻家ノ上ノ内遺跡Ｃ区の調査
　第１節　調査区の概要と層位……40
　第２節　古墳の調査……43
　第３節　古墳以外の調査……55

第６章　金廻家ノ上遺跡の調査
　第１節　調査区の概要と層位……58
　第２節　古墳の調査……60

第３節　古墳以外の調査……61
第４節　遺構に伴わない遺物……62

第７章　総括
第１節　越敷山古墳群（金廻地区）の調査成果……63
第２節　金廻家ノ上ノ内遺跡・金廻家ノ上遺跡の調査成果……65

観察表
写真図版
報告書抄録・要約・奥付

図 版 目 次

第１図　遺跡位置図 ……1
第２図　調査地位置図 ……2
第３図　調査区割図 ……3
第４図　周辺遺跡分布図 ……7
第５図　金廻家ノ上ノ内遺跡Ａ区
調査前測量図……10
第６図　金廻家ノ上ノ内遺跡Ａ区
調査区断面図……11
第７図　金廻家ノ上ノ内遺跡Ａ区　遺構図…12
第８図　越敷山124号墳　全体図 ……14
第９図　越敷山124号墳　墳丘断面図 ……15
第10図　越敷山124号墳　１主体部遺構図①
……16
第11図　越敷山124号墳　１主体部遺構図②
……17
第12図　越敷山124号墳　２主体部遺構図①
……18
第13図　越敷山124号墳　２主体部遺構図②
……19
第14図　越敷山124号墳　２主体部遺構図③
……20
第15図　越敷山124号墳　周溝内出土土器図
……21
第16図　越敷山125号墳　全体図 ……23
第17図　越敷山125号墳　１主体部、
集石１遺構図……24
第18図　陥穴１・２遺構図……25
第19図　陥穴３～５遺構図……26
第20図　陥穴６・７、集石２遺構図……28
第21図　陥穴８・９、土坑１遺構図・包含層
出土遺物図……29
第22図　金廻家ノ上ノ内遺跡Ｂ区　遺構図…31
第23図　T-2断面図 ……32
第24図　T-4遺構図 ……33
第25図　石棺墓１遺構図①……34
第26図　石棺墓１遺構図②……35
第27図　陥穴10～15　平・断面図……37
第28図　陥穴16～19　平・断面図……38
第29図　Ｂ区・トレンチ出土遺物図……39
第30図　金廻家ノ上ノ内遺跡Ｃ区
調査前測量図……41
第31図　金廻家ノ上ノ内遺跡Ｃ区　遺構図…42
第32図　越敷山73号墳　平・断面図……44
第33図　越敷山73号墳１主体部　遺構図①…45
第34図　越敷山73号墳１主体部　遺構図②…46
第35図　越敷山73号墳２主体部　遺構図①…47
第36図　越敷山73号墳２主体部　遺構図②…48
第37図　越敷山73号墳２主体部　遺物図……49
第38図　越敷山73号墳、石棺墓２
遺構・遺物図……50
第39図　越敷山74号墳　平面図……51
第40図　越敷山74号墳　断面図……52
第41図　越敷山74号墳１主体部　遺構図①…53
第42図　越敷山74号墳１主体部　遺構図②…54
第43図　越敷山74号墳　出土遺物図……55
第44図　陥穴20～25　遺構図……56
第45図　陥穴26・土坑２　遺構図……57
第46図　金廻家ノ上遺跡第１遺構面
平・断面図……58
第47図　石蓋土壙墓１　遺構・遺物図……59
第48図　陥穴27・28　遺構図……60
第49図　金廻家ノ上遺跡第２遺構面
遺構・遺物図……61
第50図　金廻家ノ上遺跡第３遺構面
遺構・遺物図……62

写真図版目次

写真図版１
１．調査地遠景（北より）
２．Ａ区調査前（北より）
写真図版２
１．77号墳墳丘検出（東より）
２．77号墳墳丘除去後（東より）
３．123号墳周溝検出（南より）
写真図版３
１．123号墳周溝断面（西より）
２．123号墳周溝完掘（南より）
３．123号墳周溝完掘（西より）
写真図版４
１．124号墳周溝検出（南より）
２．124号墳周溝断面（東より）
３．124号墳周溝完掘（南より）
写真図版５
１．124号墳周溝完掘（西より）
２．124号墳周溝内Po.1・2出土状況（南より）
３．124号墳周溝内Po.1出土状況（南より）
写真図版６
１．124号墳１主体部検出（南東より）
２．124号墳１主体部蓋石検出（南より）
３．124号墳１主体部蓋石検出（南より）
写真図版７
１．124号墳１主体部断面（北より）
２．124号墳１主体部完掘（南より）
３．124号墳１主体部完掘（南より）
写真図版８
１．124号墳１主体部石棺掘形（南より）
２．124号墳２主体部蓋石検出（南より）
３．124号墳２主体部上層断面（東より）
写真図版９
１．124号墳２主体部上面の蓋石（南より）
２．124号墳２主体部下面の蓋石（南より）
３．124号墳２主体部蓋石除去後（南より）
写真図版10
１．124号墳２主体部棺内断面（北より）
２．124号墳２主体部完掘（南より）
３．124号墳２主体部完掘（南より）
写真図版11
１．124号墳２主体部石棺掘形（南より）
２．125号墳周溝検出（南より）
３．125号墳１主体部、集石１検出（南より）
写真図版12
１．125号墳１主体部、集石１検出（北西より）
２．125号墳１主体部下面の蓋石（南より）
３．125号墳１主体部掘形検出（南より）
写真図版13
１．125号墳１主体部断面（北より）
２．125号墳１主体部完掘（南より）
３．125号墳完掘（南より）
写真図版14
１．125号墳完掘（西より）
２．陥穴１検出（南より）
３．陥穴１断面（北西より）
写真図版15
１．陥穴１完掘（東より）
２．陥穴２検出（北より）
３．陥穴２断面（南より）
写真図版16
１．陥穴２完掘（東より）
２．陥穴３検出（北より）
３．陥穴３断面（西より）
写真図版17
１．陥穴３完掘（北西より）
２．陥穴４検出（西より）
３．陥穴４断面（西より）
写真図版18
１．陥穴４完掘（西より）
２．陥穴５検出（西より）

３．陥穴５断面（東より）
写真図版19
１．陥穴５完掘（西より）
２．陥穴６・集石２検出（北より）
３．陥穴６断面（西より）
写真図版20
１．陥穴６完掘（西より）
２．陥穴７検出（西より）
３．陥穴７断面（東より）
写真図版21
１．陥穴７完掘（南より）
２．陥穴８断面（東より）
３．陥穴８完掘（北より）
写真図版22
１．陥穴９検出（西より）
２．陥穴９完掘（北より）
３．土坑１完掘（北より）
写真図版23
１．石棺墓１検出（西より）
２．石棺墓１検出（北より）
３．石棺墓１断面（北より）
写真図版24
１．石棺墓１完掘（北より）
２．石棺墓１完掘（北より）
３．石棺墓１掘形（北より）
写真図版25
１．溝１検出（北より）
２．溝１完掘（北東より）
３．陥穴10完掘（東より）
写真図版26
１．陥穴11完掘（北より）
２．陥穴12完掘（東より）
３．陥穴13完掘（東より）
写真図版27
１．陥穴14完掘（西より）
２．Ｂ区調査完了後（西より）
３．陥穴15断面（南より）
写真図版28
１．陥穴16完掘（北より）
２．陥穴17断面（南西より）
３．陥穴17完掘（南西より）
写真図版29
１．陥穴18断面（東より）
２．陥穴18完掘（西より）
３．陥穴19・20完掘（南より）
写真図版30
１．陥穴19完掘（西より）
２．陥穴20完掘（西より）
３．T-3完掘（西より）
写真図版31
１．73号墳墳丘断面（北東より）
２．73号墳周溝完掘（東より）
３．73号墳土器出土状況（北西より）
写真図版32
１．73号墳主体部検出（西より）
写真図版33
１．73号墳１主体部検出（北より）
２．73号墳１主体部蓋石（東より）
３．73号墳１主体部断面（南東より）
写真図版34
１．73号墳１主体部完掘（南西より）
写真図版35
１．73号墳１主体部完掘（東より）
２．73号墳１主体部石枕（北西より）
３．73号墳１主体部石棺掘形（南西より）
写真図版36
１．73号墳２主体部蓋石検出（北東より）
２．73号墳２主体部蓋石除去後（南西より）
３．73号墳２主体部断面（北東より）
写真図版37
１．73号墳２主体部人骨出土状況（西より）
２．73号墳２主体部人骨出土状況（北西より）
３．73号墳２主体部人骨出土状況（南東より）
写真図版38
１．73号墳２主体部石枕（西より）
２．73号墳２主体部完掘（西より）

３．73号墳２主体部石棺掘形埋土（西より）
写真図版39
１．73号墳２主体部鉄鉾出土状況（北より）
２．73号墳２主体部石棺掘形（西より）
３．73号墳墳丘盛土除去後（北東より）
写真図版40
１．74号墳調査前（南東より）
２．74号墳周溝検出（南より）
３．74号墳周溝断面（東より）
写真図版41
１．74号墳周溝完掘（東より）
２．74号墳周溝完掘（南より）
３．74号墳１主体部検出（南西より）
写真図版42
１．74号墳１主体部検出（南西より）
２．74号墳１主体部検出（南西より）
３．74号墳１主体部蓋石除去後（南西より）
写真図版43
１．74号墳１主体部完掘（南より）
２．74号墳１主体部完掘（北東より）
３．74号墳１主体部完掘（北西より）
写真図版44
１．74号墳１主体部掘形検出（南東より）
２．74号墳１主体部掘形完掘（南西より）
３．74号墳盛土除去後（南より）
写真図版45
１．石棺墓２断面（南より）
２．石棺墓２完掘（南東より）
３．石棺墓２西小口部（南東より）
写真図版46
１．石棺墓２東小口部（南より）
２．石棺墓２西小口部掘形（南より）
３．石棺墓２完掘（北東より）
写真図版47
１．土坑２断面（南東より）
２．陥穴20断面（南より）
３．陥穴20完掘（西より）
写真図版48
１．陥穴21検出（東より）
２．陥穴21断面（東より）
３．陥穴21完掘（南より）
写真図版49
１．陥穴22断面（西より）
２．陥穴22完掘（北より）
３．陥穴23断面（西より）
写真図版50
１．陥穴23完掘（西より）
２．陥穴24完掘（北東より）
３．陥穴25断面（北より）
写真図版51
１．陥穴25完掘（北より）
２．陥穴26断面（東より）
３．陥穴26完掘（北より）
写真図版52
１．金廻家ノ上遺跡調査前（東より）
２．石蓋土壙墓１検出（西より）
３．石蓋土壙墓１検出（南より）
写真図版53
１．石蓋土壙墓１断面（南東より）
２．石蓋土壙墓１完掘（北東より）
３．石蓋土壙墓１完掘（北西より）
写真図版54
１．土器集中１検出（西より）
２．第２遺構面完掘（西より）
３．陥穴27検出（西より）
写真図版55
１．陥穴27断面（北より）
２．陥穴27完掘（南より）
３．陥穴28断面（東より）
写真図版56
１．陥穴28完掘（西より）
２．第３遺構面検出（西より）
３．調査区断面（西より）
写真図版57
１．124号墳周溝内出土土器（Po. 1）
２．124号墳周溝内出土土器（Po. 2）

３．同、底部穿孔

写真図版58

１．金廻家ノ上ノ内遺跡Ａ・Ｂ区、トレンチ出土土器

２．金廻家ノ上ノ内遺跡Ｂ区出土鉄鍋（F. 1）

写真図版59

１．73号墳北側出土土器（Po. 11）

２．同、底部穿孔

３．石棺墓２出土土器（Po. 14）

４．73号墳２主体部出土鉄鉾（F. 2）

写真図版60

１．金廻家ノ上ノ内遺跡Ｃ区包含層出土土器

写真図版61

１．石蓋土壙墓１出土須恵器（Po. 21）

２．石蓋土壙墓１須恵器枕（Po. 22）

３．石蓋土壙墓１須恵器枕（Po. 23）

４．土器集中１出土土器（Po. 24）

５．包含層出土土器（Po. 25、Po. 26、Po. 27）

６．包含層出土石斧（S. 1）

７．包含層出土凹石（S. 2）

８．包含層出土石鏃（S. 3）

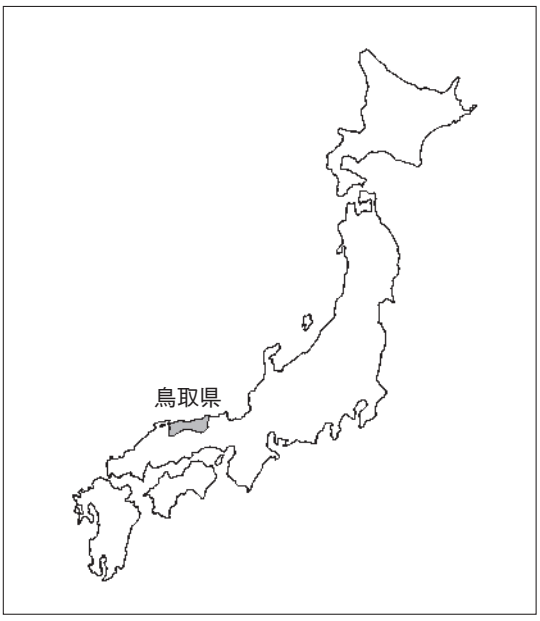
第１章　調査の経緯と経過

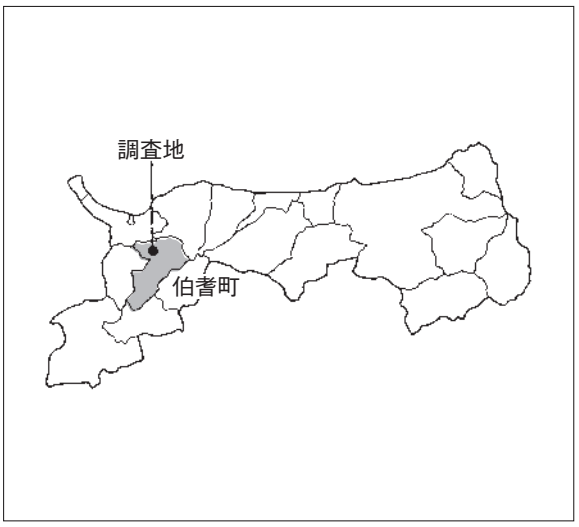
第１節　発掘調査に至る経緯

本発掘調査は、西伯郡伯耆町金廻において計画された一般国道181号（岸本バイパス）の道路改良工事予定地内に所在する埋蔵文化財について実施したものである。国道181号（岸本バイパス）は、米子市五千石から伯耆町吉定を結ぶ全長６㎞の高規格道路であり、道路区間内では、米子市・西山ノ後遺跡や伯耆町・長者屋敷遺跡の調査などが実施され、既に米子市五千石～伯耆町坂長区間の一部は供用されている。

今回、発掘調査を実施した越敷山古墳群（金廻地区）、金廻家ノ上遺跡、金廻家ノ上ノ内遺跡は、平成23・24年度に鳥取県教育文化財団が調査を行った地点に隣接している。この地点では、平成23年度に伯耆町教育委員会による試掘調査が実施され、土坑内から完形の弥生土器が出土したことから、事業主体者である鳥取県と鳥取県教育委員会、伯耆町教育委員会による事前協議が重ねられ、この工事予定区間における発掘調査日程の調整を行ったが、平成25年度以降は鳥取県教育文化財団の調査が県東部の鳥取西道路に傾注することと、平成25年度内の伯耆町教育委員会の事業量が多く、年度内の調査実施が困難な状況であったことから、米子市文化財団埋蔵文化財調査室が本調査を実施することとなった。

発掘調査については、平成25年４月１日に鳥取県西部総合事務所と契約を締結し、平成25年５月２日から現地調査に着手、平成26年９月９日に全ての調査を完了した。





第１図　遺跡位置図

第２節　発掘調査の経過

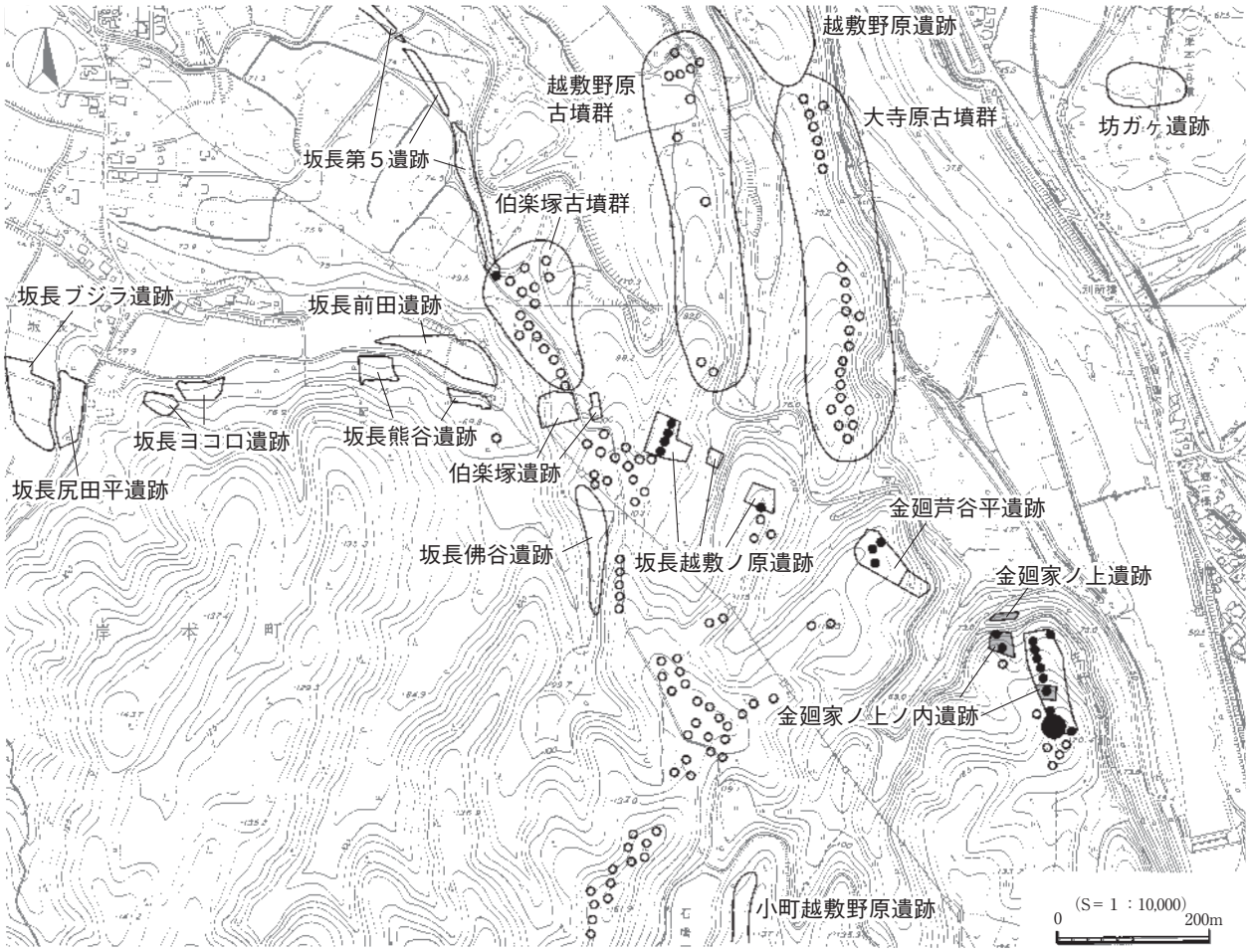
発掘調査は工事対象区間の4,168㎡を対象とし、平成25年５月２日から平成26年９月９日までの期間で現地調査を行った。

現地調査は、平成23・24年度に鳥取県教育文化財団が調査を行った越敷山124・125号墳の所在する金廻家ノ上ノ内遺跡の残地部分（Ａ区）1,071㎡から着手し、引き続いて、越敷山73・74号墳の所在する金廻家ノ上ノ内遺跡（Ｂ・Ｃ区）2,294㎡の調査を完了させた。翌年の平成26年度には、佐野川用水下段の斜面部に位置する金廻家ノ上遺跡の803㎡を調査した。

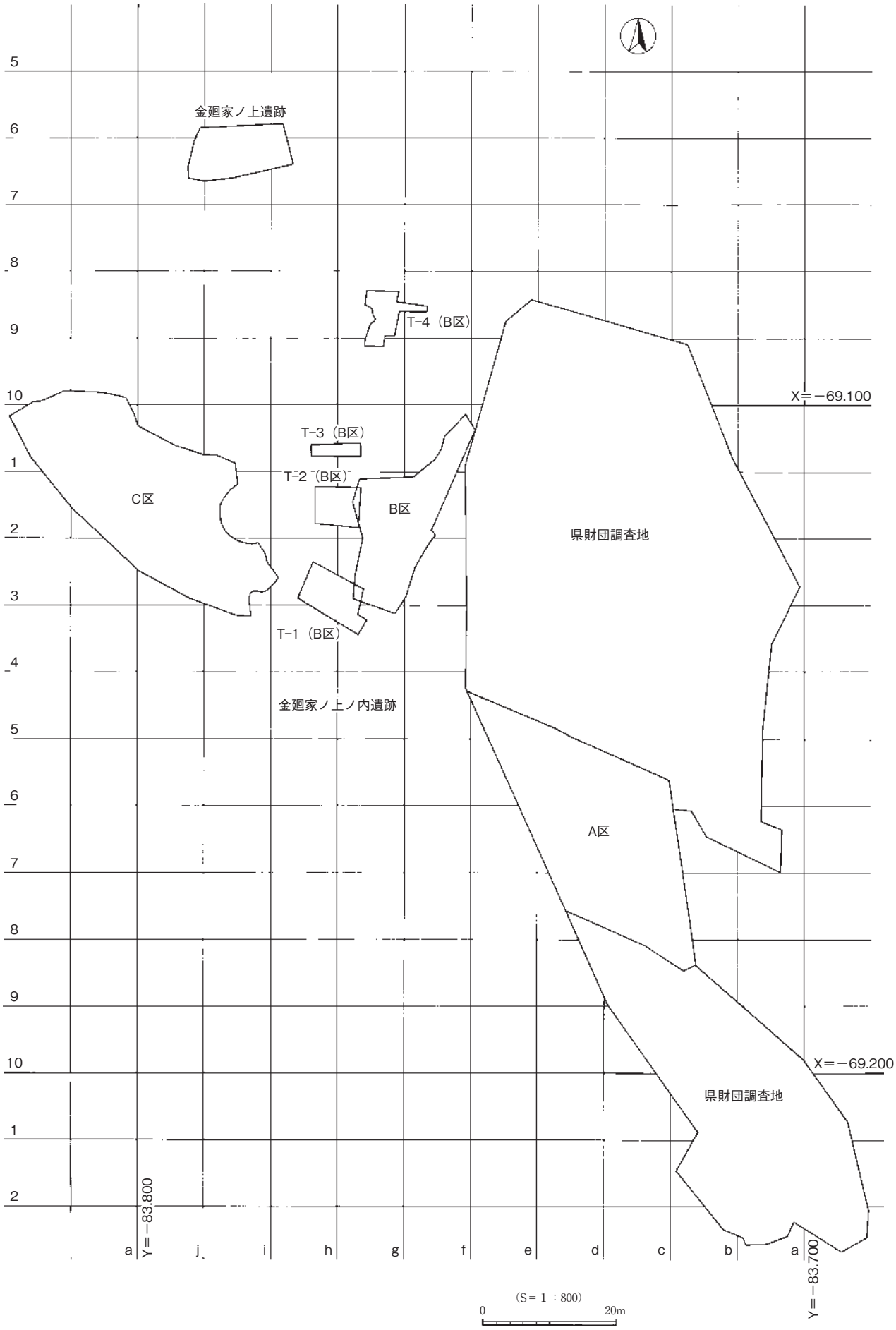
現地調査では、急傾斜地が多く重機の使用が困難であったため、安全性の確保出来る平坦地部分のみ重機を使用し、排土の搬出作業を行った。それ以外の作業は全て人力により、表土掘削、遺構検出を行った。業務委託に関しては、測量基準点の設置、調査前の地形測量、出土鉄製品の保存処理業務を専門業者に委託した。

第３節　整理作業の経過

出土遺物の整理作業は、平成25・26年度には、一部の出土遺物の洗浄と注記作業を行った。平成28年度には、残りの出土遺物の洗浄、注記、接合作業を行い、遺物の実測、トレース、写真撮影を実施し、年度末までに報告書を刊行した。



第２図　調査地位置図


金廻家ノ上遺跡
T-4（B区）
T-3（B区）
T-2（B区）
T-1（B区）
C区
B区
県財団調査地
金廻家ノ上ノ内遺跡
A区
県財団調査地
X=−69.100
X=−69.200
Y=−83.800
Y=−83.700
5
6
7
8
9
10
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
1
2
a
j
i
h
g
f
e
d
c
b
a
(S=1：800)
0
20m

第３図　調査区割図

第４節　調査体制

平成25年度（2013年度）

事業主体　一般財団法人　米子市文化財団

理　事　長　杉原弘一郎

常 務 理 事　中村智至（一般財団法人米子市文化財団事務局長）

埋蔵文化財調査室

室　　長　岡　雄一（米子市教育委員会文化課長）

事務長兼調査員　小原貴樹

次長兼統括調査員　平木裕子

非常勤職員　田中昌子

事業担当　　主任調査員　佐伯純也

調　査　員　影山和雅

平成26年度（2014年度）

事業主体　一般財団法人　米子市文化財団

理　事　長　杉原弘一郎

常 務 理 事　中村智至（一般財団法人米子市文化財団事務局長）

埋蔵文化財調査室

室　　長　岡　雄一（米子市教育委員会文化課長）

事務長兼調査員　小原貴樹

次長兼統括調査員　平木裕子

非常勤職員　田中昌子

事業担当　　主任調査員　佐伯純也

平成28年度（2016年度）

事業主体　一般財団法人　米子市文化財団

理　事　長　杉原弘一郎

常 務 理 事　先灘達也（一般財団法人米子市文化財団事務局長）

埋蔵文化財調査室

室長兼調査員　小原貴樹

次長兼統括調査員　平木裕子

非常勤職員　田中昌子

事業担当　　統括調査員　佐伯純也

調査協力・管理・指導・助言　米子市教育委員会・伯耆町教育委員会・鳥取県教育委員会

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

金廻家ノ上ノ内遺跡・金廻家ノ上遺跡・越敷山古墳群（金廻地区）は、鳥取県西伯郡伯耆町坂金廻に所在する集落遺跡・古墳群である。遺跡の立地は、越敷山から北へ長く派生する丘陵上から谷部に位置しており、現況は森林となっている。

遺跡周辺の地形および地質は、日野川を挟んで大きく様相を変える。日野川の右岸地域は、主に第四紀更新世に形成された大山の火山噴出物からなる緩やかな台地で構成されているが、本遺跡の位置する日野川左岸の地域は、標高270mの高塚山と標高226mの越敷山を中心とした南北８㎞、東西３㎞にわたる起伏に富んだ丘陵地帯と、長者原台地と呼ばれる平坦な沖積台地によって構成されている。

前記の丘陵地帯は、第三紀鮮新世の粗面玄武岩を基盤とし、部分的に大山上中部火山灰に覆われている。一方、洪積台地は、南側では安山岩質の砂礫層を、北側では火山砕屑物を主体とする古期扇状地堆積物を基盤としており、上部はやはり大山上中部火山灰に覆われている。また、この他に日野川付近には、低位段丘や扇状地などの地形も見られる。なお、日野川は中世までは岸本集落の北から東北方向に流れて佐陀川に合流していたが、天文19（1550）年と元禄15（1702）年の洪水により、現在のような西寄りの流路に変化している。

第２節　歴史的環境

旧石器時代

鳥取県の西部に位置する大山の西麓地方では、旧石器時代の遺跡は検出例が少ない。今回調査した越敷山の周辺では、長者原台地の東端に位置している諏訪西山ノ後遺跡（24）から、硅岩製のナイフ形石器がローム層中から出土した事例がある。また、坂長村上遺跡でも黒曜石製のナイフ形石器が１点出土しているが、ブロックを伴うようなまとまった遺跡の検出例が無く、旧石器時代の様相は不明な点が多い。

縄紋時代

縄紋時代には、草創期のものと見られる尖頭器が坂長村上遺跡からまとまって見つかっているほか、貝田原遺跡（61）や奈喜良遺跡（20）などでも単独で出土しており、この頃から広範囲に遺跡が広がっているが、草創期の土器を伴う集落遺跡の事例はいまだ確認されていない。

続く縄紋時代の早期から、押型紋土器の出土が鳥取県西部の各所で見られ、集落遺跡としてまとまりのある上福万遺跡（73）をはじめとして、林ヶ原遺跡（69）、長山馬籠遺跡などで土器が出土している。ここで出土している押型紋土器は、黄島式、高山寺式まであり、上福万遺跡ではこれに後続すると見られる沈線紋土器も出土している。早期の終末には表裏縄紋で胎土に繊維を混入した菱根式土器があり、突帯を持つ福呂式土器へと続くが、本遺跡の周辺ではこの段階の様相は明確ではない。

縄紋時代前期には、西川津式土器、北白川下層式土器が広範囲に認められ、目久美遺跡（８）など

の遺跡が集中する中海沿岸の地域で集落が活発化し、周辺にも影響を及ぼしていたようである。

伯耆町内では、長山馬籠遺跡（71）から西川津式土器が出土しており、縄紋時代前期の様相が窺える。中期には、鳥取県西部地方全体で集落活動が低下したものと考えられ、特に中期中頃から後半期の遺跡の検出数が激減するが、この原因はよくわかっていない。

縄紋時代の後期後半以降には、目久美遺跡などの中海周辺の遺跡で土器の出土が見られるようになり、再び集落活動が活況を呈するようになる。

縄紋時代晩期には、米子市古市の河原田遺跡（12）や井出胯遺跡（81）などでまとまった資料が得られているが、特に内陸部の河川周辺域での活動が活発になっている。

弥生時代

弥生時代前期には、目久美遺跡をはじめ、米子市近郊の低湿地とそれに面する微高地上に集落が形成されているものと見られ、縄紋時代晩期から継続する遺跡も多い。これらの遺跡は初期の農耕集落と推測されるが、明確な建物跡などが見つかる事例は少なく、弥生時代前期の集落像を描くことは難しい。南部町の清水谷遺跡（17）や諸木遺跡（29）では前期の環濠が見つかっているが、これらの環濠でも建物などは見つかっていない。

伯耆町内における弥生時代の集落遺跡は、久古第３遺跡において前期の土器の出土が知られているが、この段階の遺構は確認されていない。中期には、下山南通遺跡（70）において中期中葉から後葉の竪穴建物、掘立柱建物、貯蔵穴が見つかっている。また、長山馬籠遺跡でも大型の掘立柱建物のほか、中期後葉段階の良好な土器資料が得られている。後期には、代遺跡において竪穴建物が見つかっているほか、父原地区では四隅突出型墳丘墓が確認されており、伯耆町内の各所に遺跡が分布している。

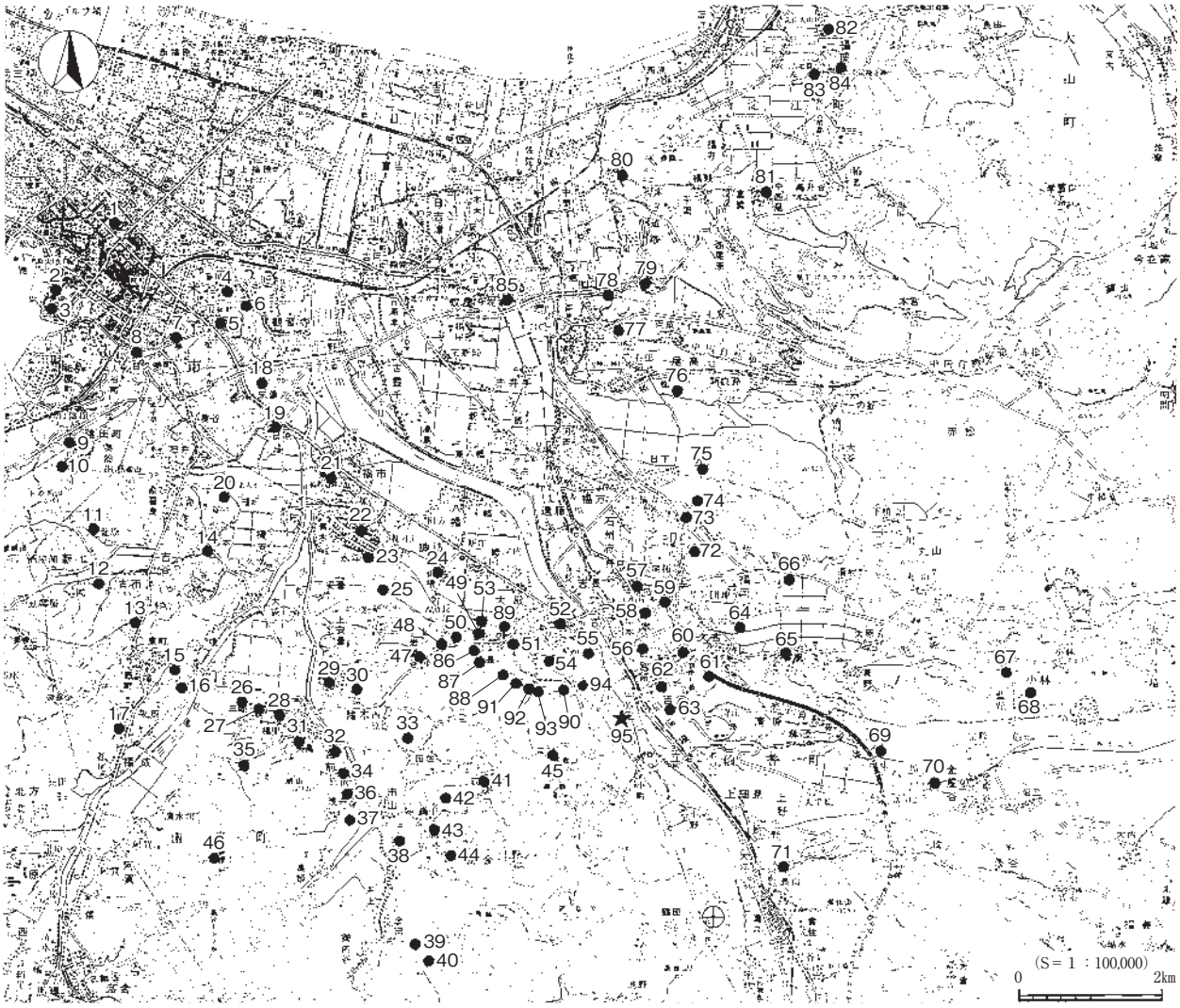
古墳時代

伯耆町周辺における古墳時代の様相は、付近に古墳時代前期の首長墓として三角縁神獣鏡が出土した南部町の普段寺古墳群（35）があり、画紋帯神獣鏡が出土した浅井11号墳（36）など、鏡を副葬する首長墓の系譜が辿れる。特に、中期には全長108mの前方後円墳である三崎殿山古墳（26）が造られており、鳥取県西部地方における最大首長の墓と目されている。

越敷山周辺では、明確な前期古墳は見られないが、中期に至ってようやく越敷山古墳群が群集墳を形成し始める。これらの群集墳を造った人々の集落は確認されていないが、越敷山から見える範囲に点在しているものと考えられる。越敷山古墳群は、調査された事例が少ないため、不明な部分が多いが、直径10～20mクラスの円墳が主体的であり、規模や副葬品の上で突出した古墳は少ない。これまでに調査された中で最大規模の越敷山51号墳でも、直径25mの円墳であり、中心部の埋葬主体は箱式石棺を用いており、副葬品も鉄器と玉類・竪櫛が出土したのみで、鏡を持たないなどの特徴がある。

後期には、初期の横穴式石室が細見神社で見られるが、数は少なく、石州府古墳群（72）のような横穴式石室を主体とする大規模な群集墳を形成する動きは見られない。越敷山古墳群でも80号墳で横穴式石室が確認されているが、石室の規模が小さく終末期に近い段階のものと考えられている。

終末期には、鳥取県西部地方では横穴墓が一般化し、各地で盛んに造られているが、伯耆町内では検出例が少ないことから、横穴墓があまり積極的に導入されていなかった地域と見られる。



第４図　周辺遺跡分布図

1　錦町第１遺跡
2　久米第１遺跡
3　米子城跡
4　長砂第１・２遺跡
5　長砂第３遺跡
6　水道山古墳
7　池ノ内遺跡
8　目久美遺跡
9　陰田遺跡群
10　奥陰田遺跡群
11　新山遺跡群
12　古市遺跡群
13　吉谷遺跡群
14　橋本遺跡群
15　福成石佛前遺跡
16　福成早里遺跡
17　清水谷遺跡
18　東宗像古墳群
19　日原古墳群
20　奈喜良遺跡
21　福市遺跡
22　青木遺跡
23　樋ノ口第４遺跡
24　諏訪西山ノ後遺跡
25　別所新田遺跡
26　三崎殿山古墳
27　天萬土居前遺跡
28　宮尾遺跡
29　諸木遺跡
30　後谿山古墳
31　天万遺跡
32　宮前３号墳
33　田住古墳群
34　宮前遺跡
35　普段寺１号墳
36　浅井11号墳
37　浅井土井敷遺跡
38　天王原遺跡
39　金田瓦窯
40　両部太郎窯
41　荻名遺跡群
42　田住松尾平遺跡
43　朝金古墳群
44　朝金小チャ遺跡
45　越敷山遺跡群
46　手間要害跡
47　荒神上遺跡
48　長者屋敷遺跡
49　坂長下屋敷遺跡
50　坂長村上遺跡
51　坂中廃寺跡
52　大寺廃寺跡
53　長者原古墳群
54　坂中第５遺跡
55　岸本大成遺跡
56　岸本古墳群
57　岸本遺跡
58　岸本要害跡
59　岸本下の原遺跡
60　久古第３遺跡
61　貝田原遺跡
62　口別所古墳群
63　吉定１号墳
64　久古北田山遺跡
65　番原遺跡群
66　須村遺跡
67　真野ブヤ遺跡
68　藍野遺跡
69　林ヶ原遺跡
70　下山南通遺跡
71　長山馬籠遺跡
72　石州府古墳群
73　上福万遺跡
74　日下寺山遺跡
75　日下古墳群
76　尾高浅山遺跡
77　尾高城跡
78　尾高御建山遺跡
79　泉中峰・前田遺跡
80　小波原畑遺跡
81　井出挟遺跡
82　晩田遺跡
83　向山古墳群
84　上淀廃寺跡
85　今在家下井上遺跡
86　坂長第７遺跡
87　坂長第８遺跡
88　坂長下門前遺跡
89　大殿狐谷遺跡
90　坂長前田遺跡
91　坂長武寿羅遺跡
92　坂長ブジラ遺跡
93　坂長尻田平遺跡
94　坂長伯楽塚遺跡
95　金廻家ノ上ノ内遺跡
　　金廻家ノ上遺跡

古　代

古代の坂長地区には会見郡の郡衙が置かれていたと推測されており、近くには駅家も設置されていた。これまでの調査で、会見郡衙跡とみられる大型の掘立柱建物が長者屋敷遺跡（48）において確認されており、周辺の遺跡からも会見郡衙関連の建物と見られる遺構がたくさん見つかっている。こうしたことから、長者原台地とその周辺に会見郡の郡衙が位置していたことは間違いないと考えられる。

白鳳期には、大殿地区に大寺廃寺（52）が建立される。この寺は、東向きの法起寺式伽藍配置で、瓦積基壇の金堂と舎利孔を持つ塔心礎が確認されている。また、大寺廃寺の瓦は４タイプの八葉複弁蓮華紋軒丸瓦と２タイプの均整唐草紋軒平瓦、重弧紋軒平瓦で構成されている。また、福寿寺の境内に保管されている石製の鴟尾は、大山山麓に産出する安山岩を加工したもので、大寺廃寺の金堂の屋根に置かれていたとされる。また、平安期には長者原台地上に坂中廃寺（51）が建立されるが、正確な位置など詳細はよくわかっていない。

中　世

平安時代の終わりから鎌倉時代の初めには、長者原台地一帯において紀成盛が活躍していた。紀成盛は、承安元（1171）年に焼失した大山寺の本堂を再建し、本尊の仏像とそれを納める鉄製の厨子を奉納した人物であり、これについては、鉄製厨子の由来を記した鍛造の鉄板３枚が現存しており、当時の様子が分かる。

南北朝時代には、大寺地区に安国寺という六十もの僧坊を持つ三千石を領する大寺院が所在したと伝わるが、永禄８（1565）年に杉原盛重により焼き討ちにされたという。また、伯耆町内では三部地区で野上城跡の調査が行われているほか、代遺跡において中世の城郭遺構が調査されている。

近　世

中世末期の西伯耆地方は、尼子氏と毛利氏の覇権争いの場となり、しばしば合戦が行われていたが、永禄９（1566）年には月山富田城が開城し、山陰地方の多くが毛利氏の支配下となった。天正19（1591）年からは吉川広家が隠岐国と出雲・伯耆三郡の領主となり、この地を統治していた。関ヶ原戦後の慶長５（1600）年には、中村一忠が伯耆国の領主となり、米子に城を構えたが、慶長15（1610）年に断絶となり、続く加藤貞泰、池田光政（1617～）の統治を経て、寛永９（1632）年に池田光仲の治世となると、池田家家老の荒尾氏による自分手政治が行われ、明治２（1878）年まで存続した。

坂長地区では、佐野川用水の開削事業が開始された。この工事は元和元（1615）年から中断を経ながら約250年間継続し、文久元（1861）年にようやく開通した。この佐野川用水の完成により、長者原台地上において水田耕作が可能となり、現在の田園風景が広がる景観の礎となった。

近現代

アジア・太平洋戦争の敗色が濃くなった昭和20年５月から、鳥取県内の各所において市民を動員した「チ号演習」が始まった。この「チ号演習」とは、連合軍の上陸を想定して行われた陣地構築作戦の名称であり、いわゆる「本土決戦」に備えたものであった。この越敷山一帯でも塹壕の掘削が各所で行われており、主に日野郡の義勇隊が動員されて作業が進められたという。

第３章　金廻家ノ上ノ内遺跡Ａ区の調査

第１節　調査区の概要と層位

金廻家ノ上ノ内遺跡Ａ区は、越敷山から北へ伸びる、やや傾斜のきつい舌状に伸びる丘陵の途中、標高97mから109m付近に位置している。平成23・24年度に隣接地で実施された鳥取県教育文化財団の調査では、古墳10基、弥生時代後期の竪穴建物２棟、古墳時代中期以前の掘立柱建物１棟、縄紋時代のものと見られる陥穴18基が確認されており、縄紋時代から弥生時代、古墳時代の複合遺跡であることが判明している。

今回の調査地は、県財団が発掘調査を行っている時点で用地未買収だった残地部分（Ａ区）と、北西側の丘陵斜面部（Ｂ区）、さらに西の谷部に設定したトレンチ４本と、西側の丘陵先端部（Ｃ区）である。遺跡地図には、Ａ区は越敷山124号墳と125号墳が、Ｃ区では越敷山73号墳と74号墳がそれぞれ登録されていた。

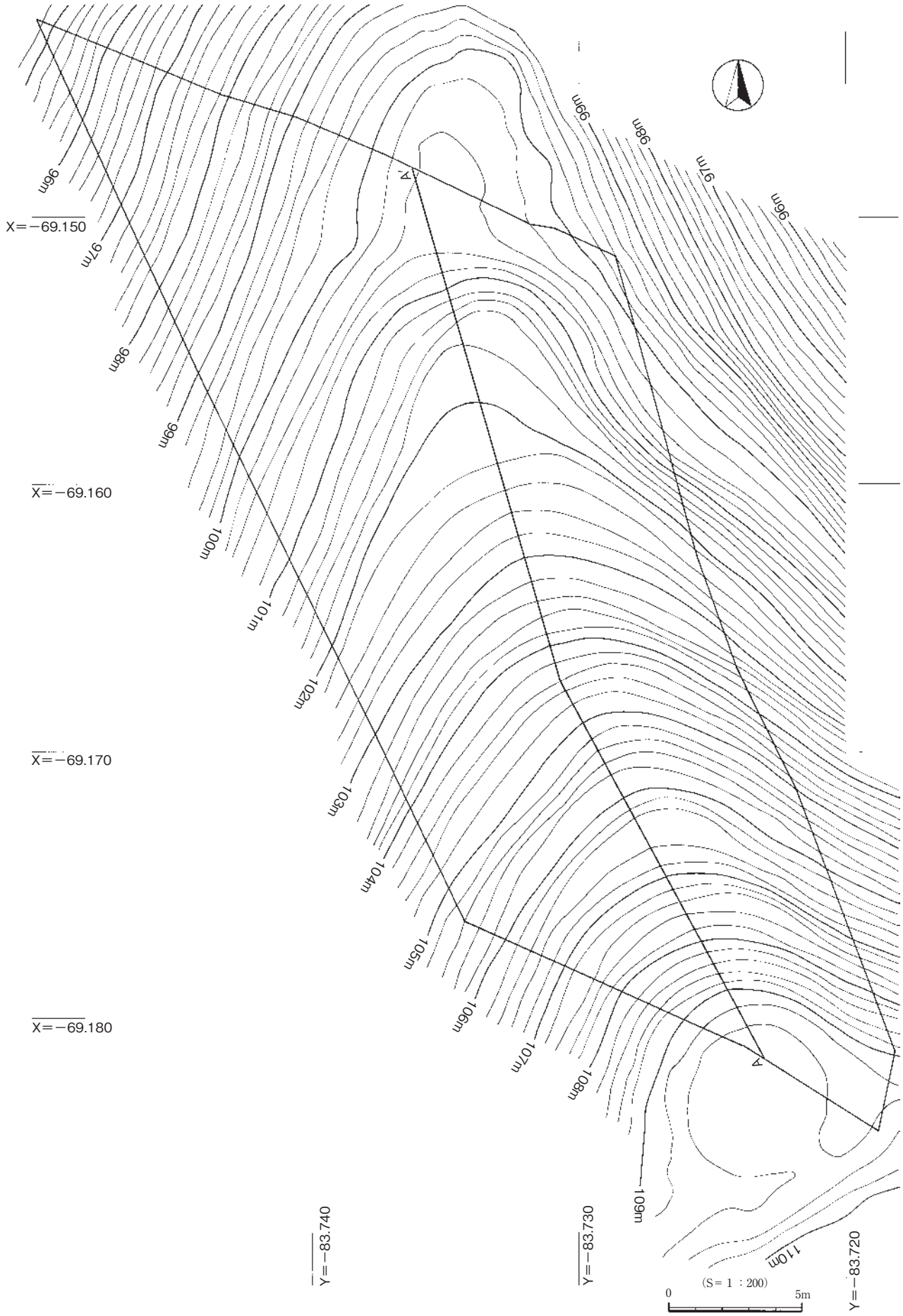
Ａ区の地形は、舌状に伸びる丘陵の先端部に位置しており、事前の測量調査では、北側の標高102m付近に古墳状の隆起があり、ここが越敷山124号墳と推測された。さらに丘陵の南側、標高106m地点にも狭い平坦地があることから、この地点が越敷山125号墳と推測された。

調査地内の層位は、Ａ区では表土に淡褐色の砂質土が10～30㎝の厚さで調査区の全面にわたって堆積しており、この表土層を除去すると、すぐに地山である、やや赤みの強い黄褐色のローム層となる。

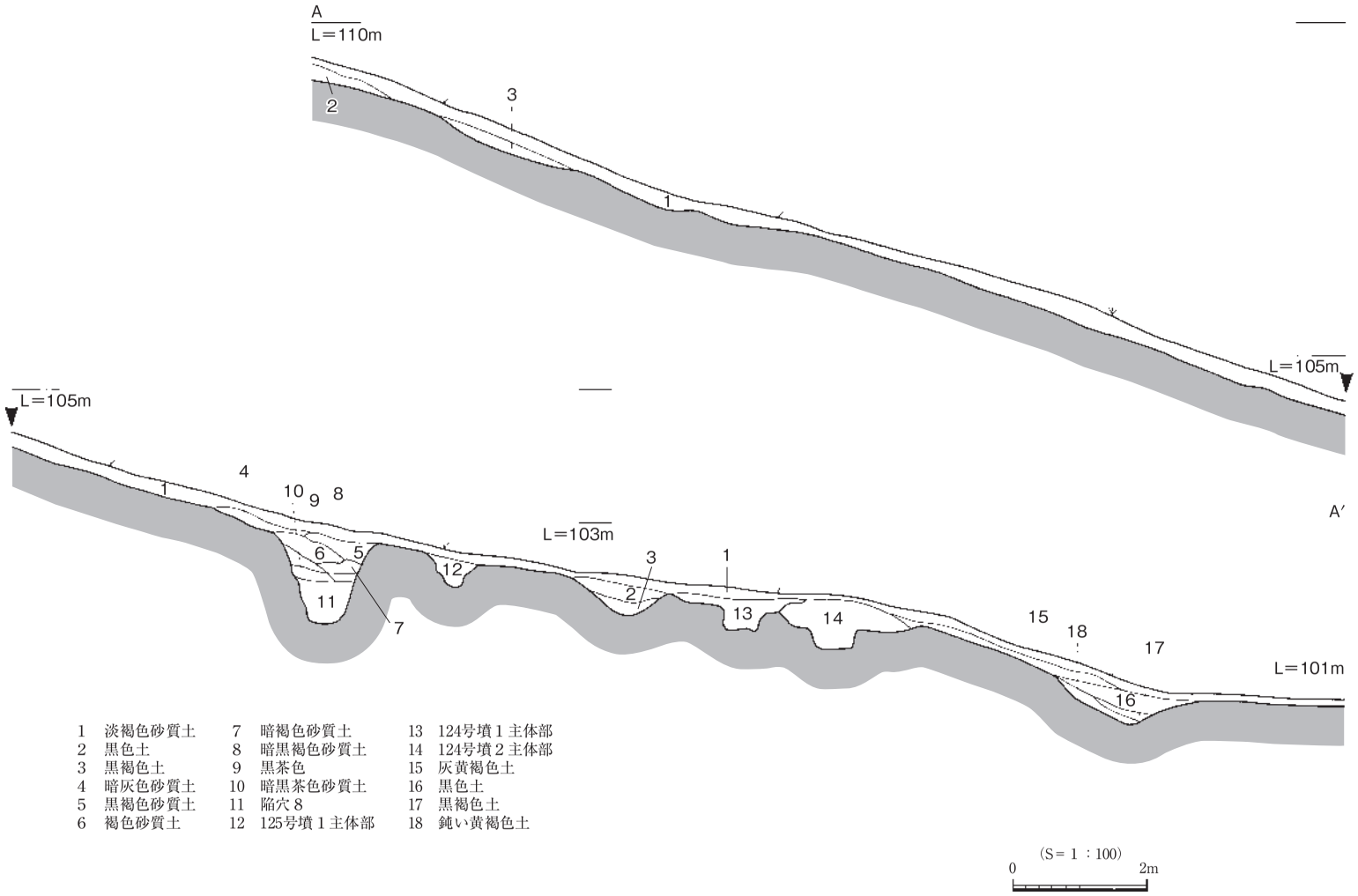
縄紋時代の陥穴は、地山面では遺構内にクロボクに類似した黒色砂質土が堆積していることが多いため検出は簡単であるが、ロームと類似した土で埋め戻された遺構では、やや検出が難しくなる。今回の調査でも、古墳の周溝部、埋葬施設とも、ロームと異なる土が堆積していたことから遺構の検出は容易であったが、古墳の周溝内に陥穴の切り合いが見られた地点では、遺構の検出に失敗しており、周溝の形を飛ばしてしまったものもある。

Ａ区で検出した遺構は、古墳２基と古墳の周溝、陥穴９基、性格不明の土坑１基である。このうち、越敷山125号墳は調査の結果、当初想定していた地点には存在しないことが明らかとなったが、越敷山124号墳のすぐ南側に周溝を持つ古墳が新たに確認できたことから、改めて、こちらの古墳を越敷山125号墳として調査した。また、調査区南側に隣接する越敷山77号墳と北側に隣接する越敷山123号墳は、どちらも県財団の調査で墳丘と埋葬施設が調査されていたが、今回の調査で区域内に伸びる周溝の残存部分を調査した。

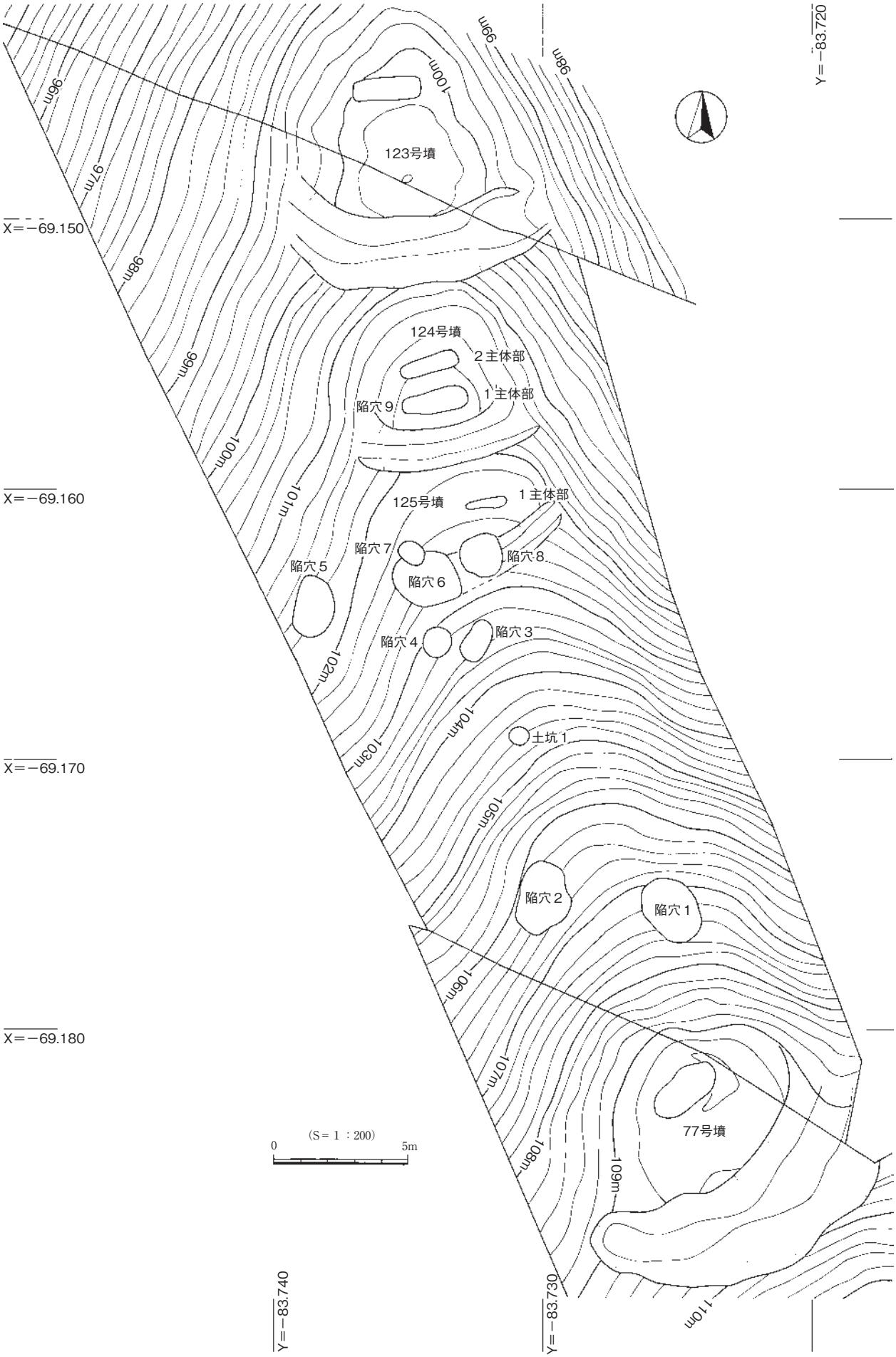
陥穴については、一辺が２mを超える大型の土坑を４基確認した。この４基は大型獣の捕獲を目的としたものと考えられるが、いずれも底面に小穴が掘られていないという共通点が見られることから、時期的に近接する可能性がある。特に、陥穴１と２、陥穴５と６は、両者が２m程の間隔を置いて掘られている点は注目される。また、小規模な土坑についても同様に小穴を持たないものがあることから、Ａ区で検出された陥穴には小穴を持たないという特徴があることが判明した。



第５図　金廻家ノ上ノ内遺跡Ａ区　調査前測量図



第６図　金廻家ノ上ノ内遺跡Ａ区　調査区断面図



第７図　金廻家ノ上ノ内遺跡Ａ区　遺構図

第２節　古墳の調査

越敷山77号墳（第７図）

越敷山77号墳は、鳥取県教育文化財団の調査で墳丘と周溝の大半が調査され、埋葬施設も確認されているが、北側の墳丘と東側の周溝は一部が未調査であった。

墳丘・周溝　墳丘は、北側の一部を残すのみで、盛土も厚さ20㎝程度しか残っていなかったが、残存状況は北側に向かって長さ３m、幅１m程の範囲が丸く残っていたことから、円墳であったと考えられる。周溝は、東側の一部が「U」字形に残るのみで、北側はすぐ斜面となるが、概ね県財団の調査と同じ規模の周溝が伸びていたことを確認した。

出土遺物　墳丘、周溝内からの遺物の出土は見られなかった。

越敷山123号墳（第８・９図）

越敷山123号墳は、鳥取県教育文化財団の調査で墳丘の大半が調査されており、石棺内から鉄剣、鉄鎌、鉄斧が出土していたが、南側の墳丘の一部と周溝は未調査であった。

墳丘・周溝　墳丘は、尾根の周囲を削り出し、さらに南側に円弧状の周溝を掘削している。このことから、この古墳は直径８m程の円墳と考えられる。周溝の長さは、約10m、上面の幅2.5m、周溝底の幅50㎝、深さ50㎝の規模を確認した。

出土遺物　この古墳に伴う遺物の出土は、見られなかった。

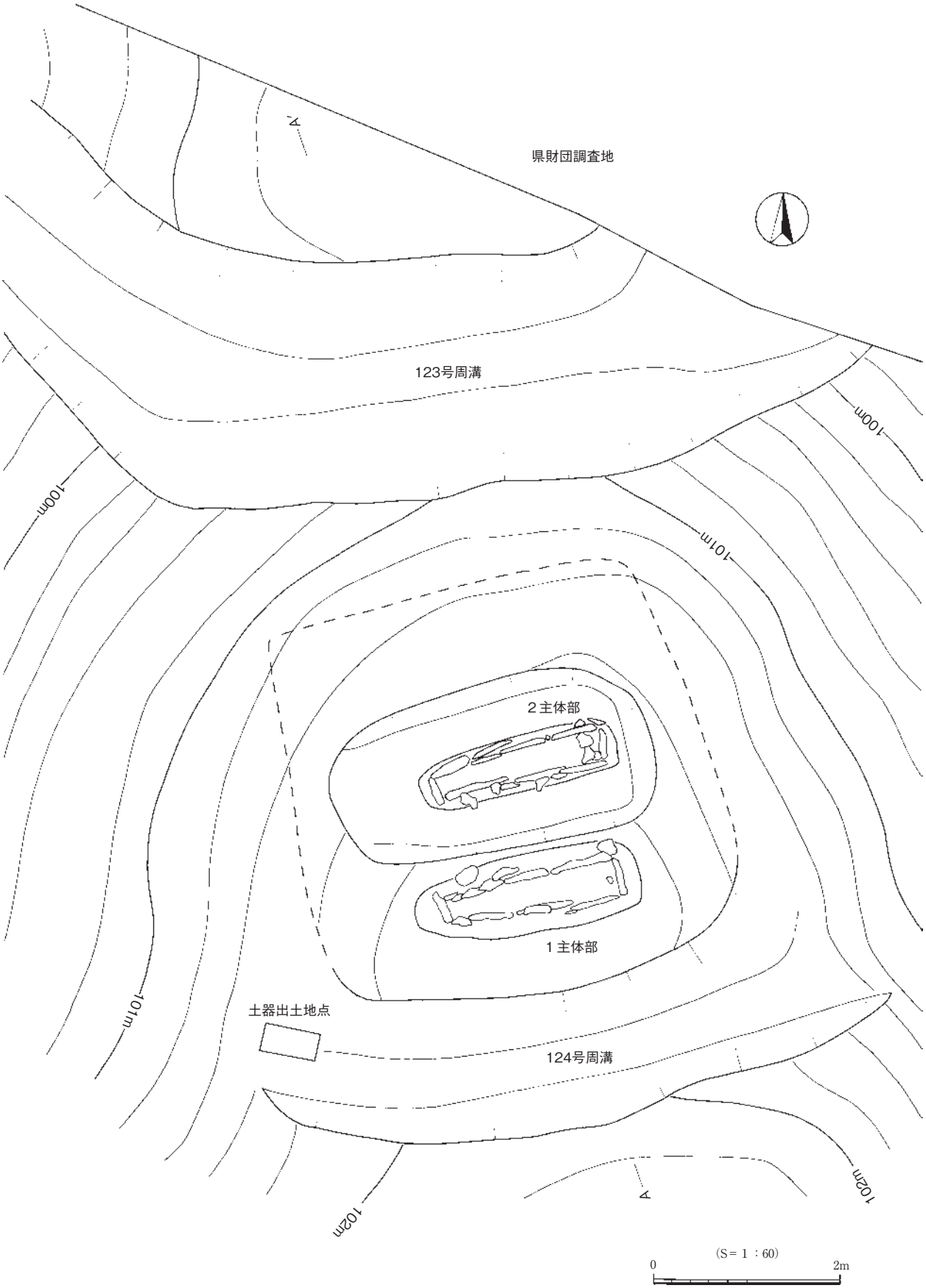
越敷山124号墳（第８～15図）

越敷山124号墳は、123号墳のすぐ南の尾根上に隣接している。両古墳の墳丘の比高差は、1.4mである。

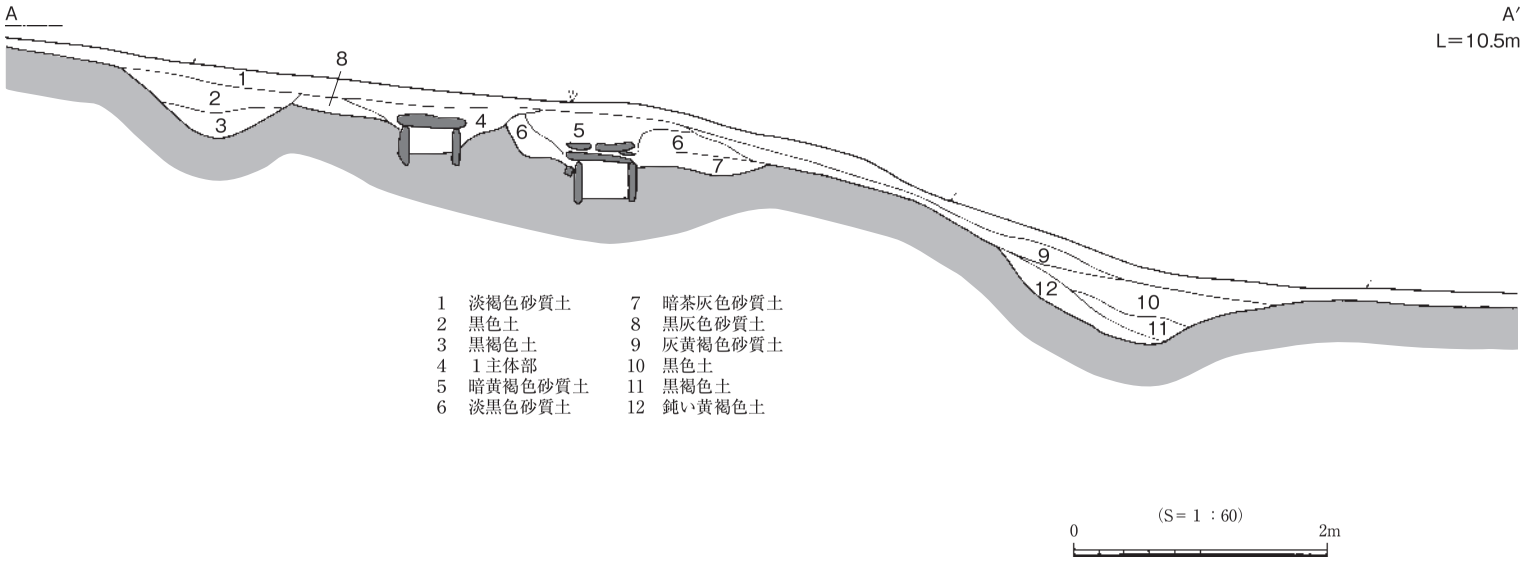
墳丘・周溝　この古墳の墳丘は、大半の盛土が流失しているものと考えられるが、南側の丘陵部に、東西方向に長さ７m、幅1.5m、深さ50㎝の緩い円弧状の周溝を掘削して区画を形成している。北側の周溝は、123号墳の周溝と共用しており、南北の周溝底面の間隔が６mであることから、一辺６mの方墳と推測される。出土遺物は、古墳の南西部の周溝内から、供献用の土器と見られる土師器壺とミニチュア土器が出土した。

埋葬施設　埋葬施設は、墳丘の南側に石棺を埋葬施設とする１主体部と、その北側に同じく石棺墓の２主体部が存在する。２主体部の掘形が１主体部に切られていることから、２主体部の埋葬終了後に１主体部が構築されたと考えられる。

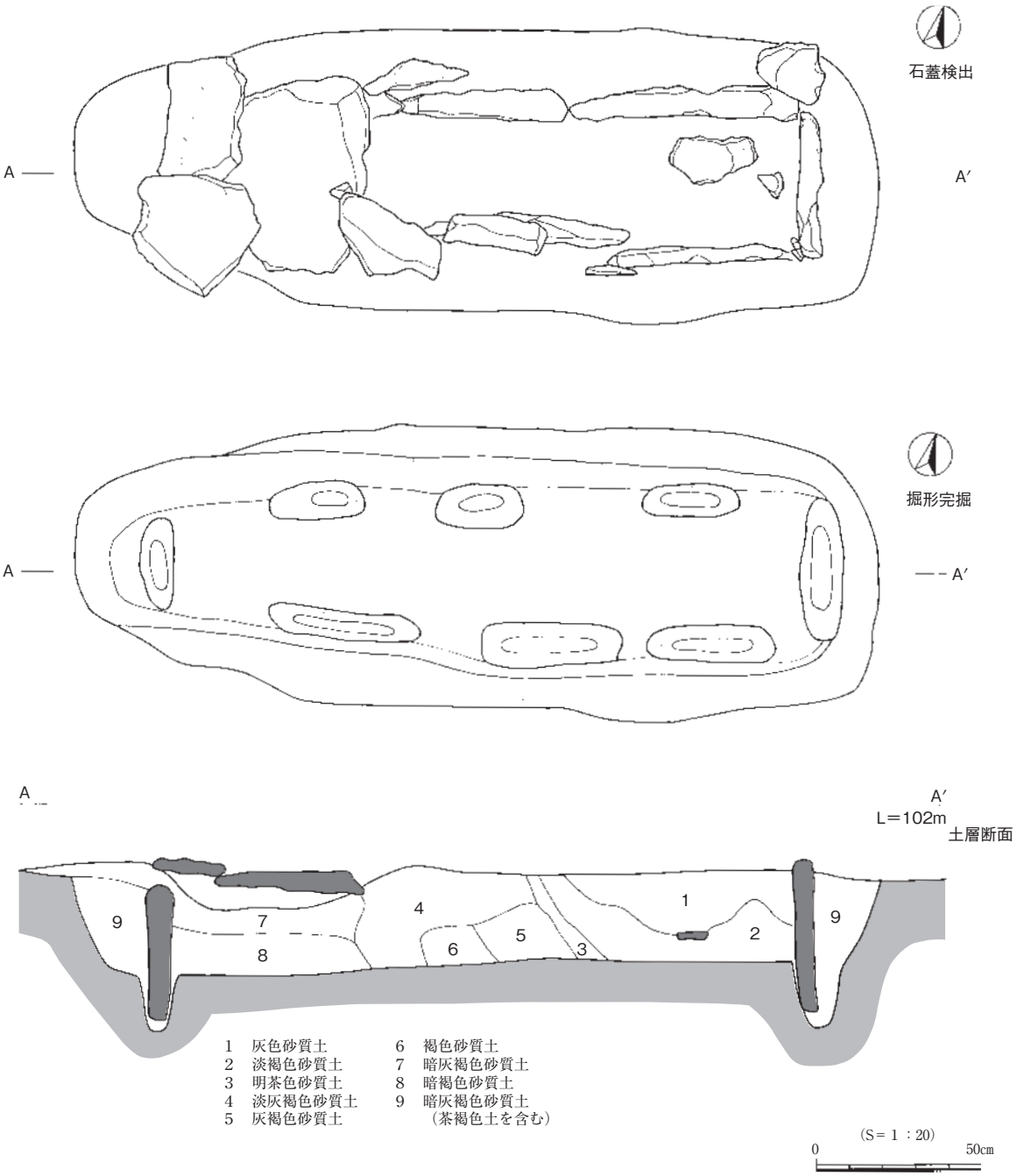
１主体部　組み合わせ式の箱式石棺墓である。主体部を検出した段階で大半の蓋石が外されていたこ



第８図　越敷山124号墳　全体図



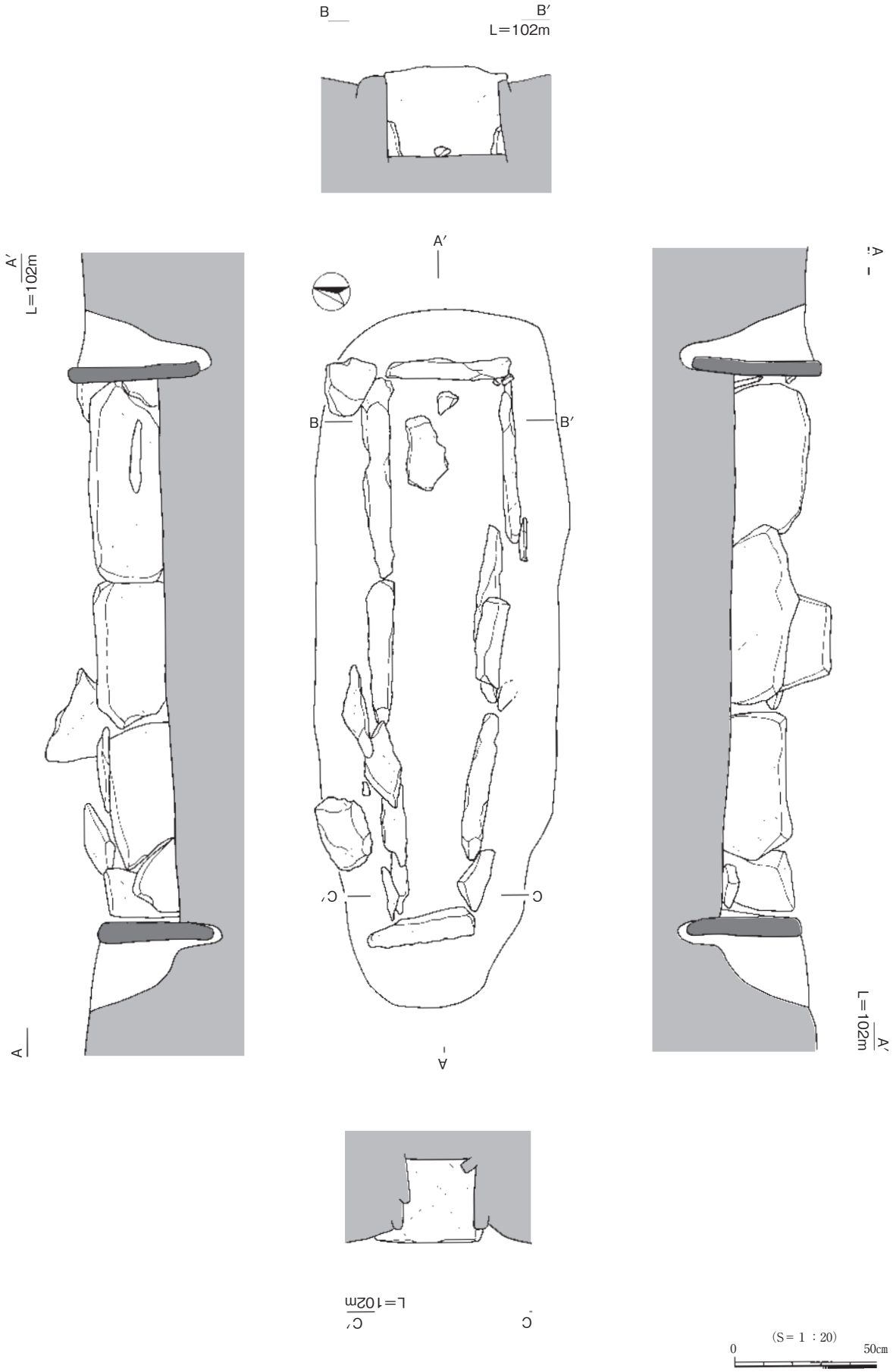
第９図　越敷山124号墳　墳丘断面図



第10図　越敷山124号墳　１主体部遺構図①

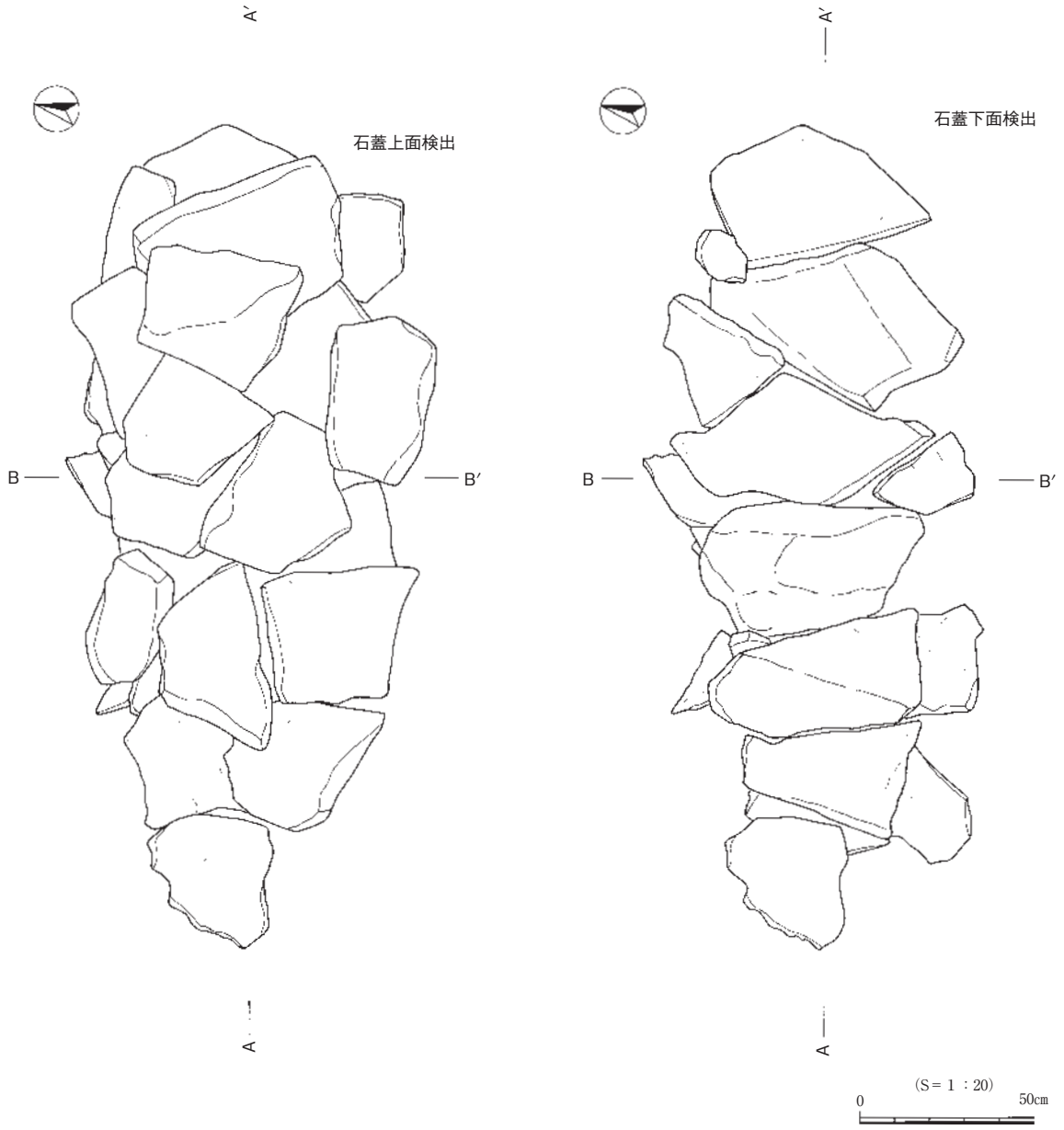
とから、既に盗掘を受けていると考えられる。この１主体部は、墳頂部の南寄りに位置しており、先行する２主体部とほぼ平行して石棺が配置されている。墳丘の盛土が流出しているため、明確な墓壙は認められず、墳丘の上面に石棺の掘形が直接掘り込まれている。石棺の掘形は、西に向かって細くなっており、小口板や長側板の部分は棺床から20cmほど深く掘り込まれている。石棺の規模は、内法が長辺190cm、短辺25～40cm、深さ30cmを測る。主軸は、E－８°－Nで東西方向を向き、尾根に対して直交する。棺内の埋土は、西側の蓋石が残っていた部分は水平方向に堆積しているが、蓋石が無くなっている部分は攪乱を受けていると考えられる。棺床はフラットで、東側に石枕と見られる長方形の石材が１個置かれているが、副葬品などは認められなかった。

２主体部　墳丘のほぼ中央に位置する、組み合わせ式の箱式石棺墓である。蓋石は、一辺が20～80cm

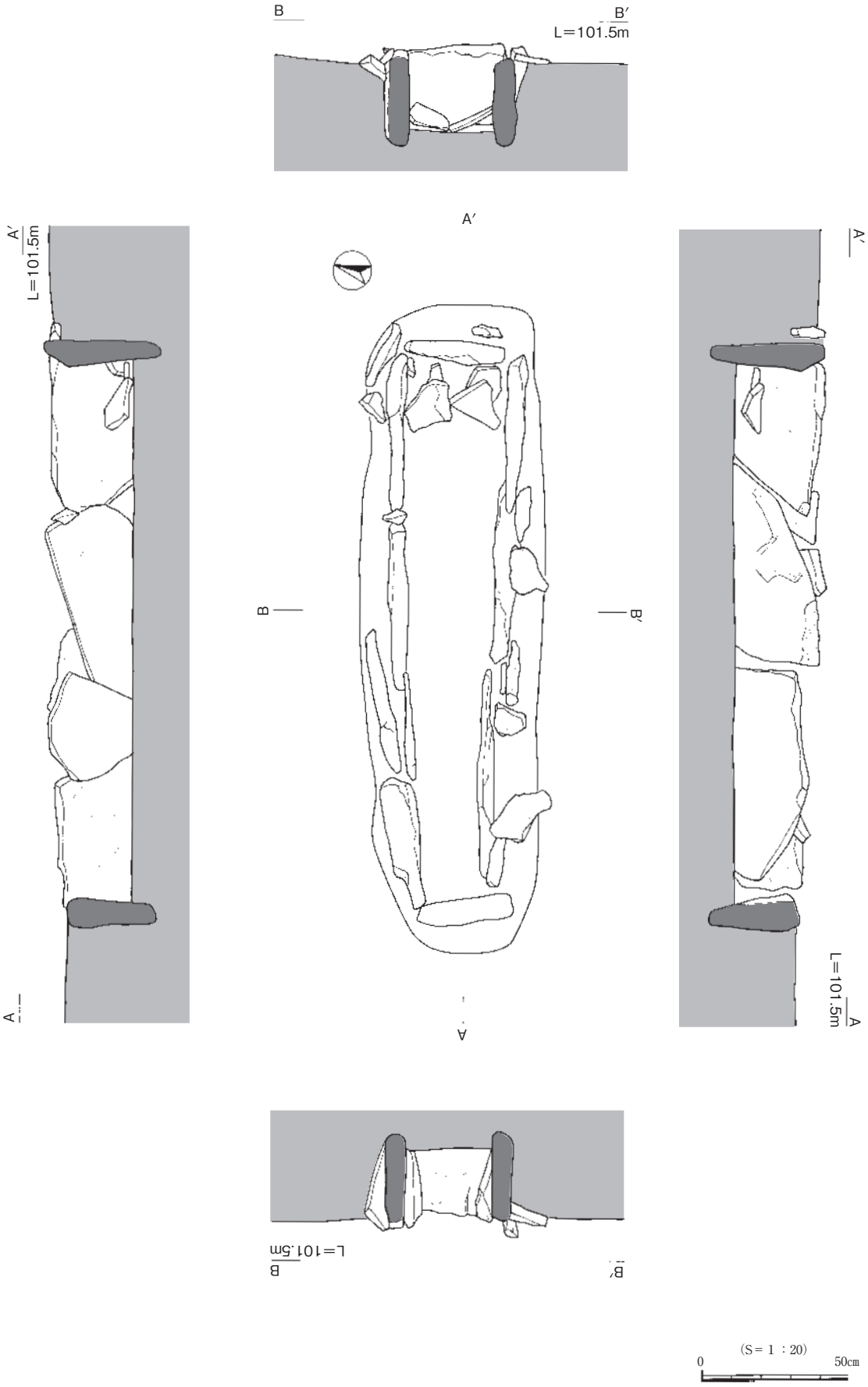


第11図　越敷山124号墳　1主体部遺構図②

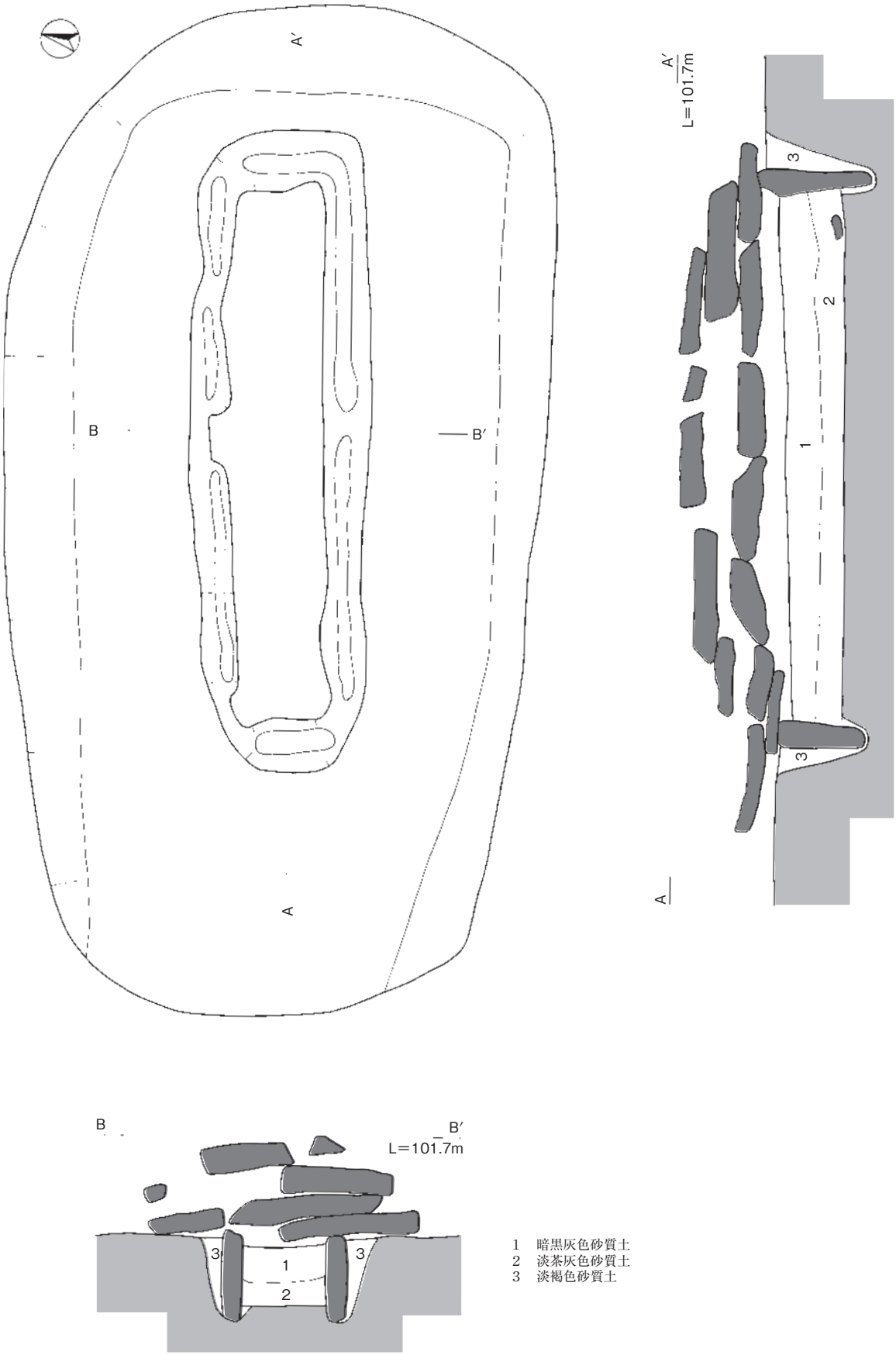
程度の多角形の平石を何枚も積み重ねて閉塞されており、前後二回に分けて蓋がなされていると考えられる。墓壙の掘形は、二段墓壙状となり、一段目が長辺340cm、短辺185cm、深さ40cmを測る。墓壙の埋土には、掘り直したような乱れがあることから、追葬などで石棺の蓋が開けられている可能性がある。石棺の掘形は、一段目の墓壙のやや東寄りに「ロ」字形に石材を固定する溝を巡らせている。石棺の規模は、内法で長辺183cm、短辺30cm、深さ30cmを測る。主軸の方向はE－16°－Nと東西方向を向き、丘陵の尾根に対して直交する。棺内の埋土は、上層に暗黒灰色砂質土、下層に淡茶灰色砂質土が水平方向に堆積しているが、蓋石との間には少し隙間が残る。雨水の影響などで蓋石の隙間から土砂が流入したものと考えられる。棺床はフラットで東側に三角形の石材を置き、枕としている。棺内からの副葬品の出土は見られなかった。



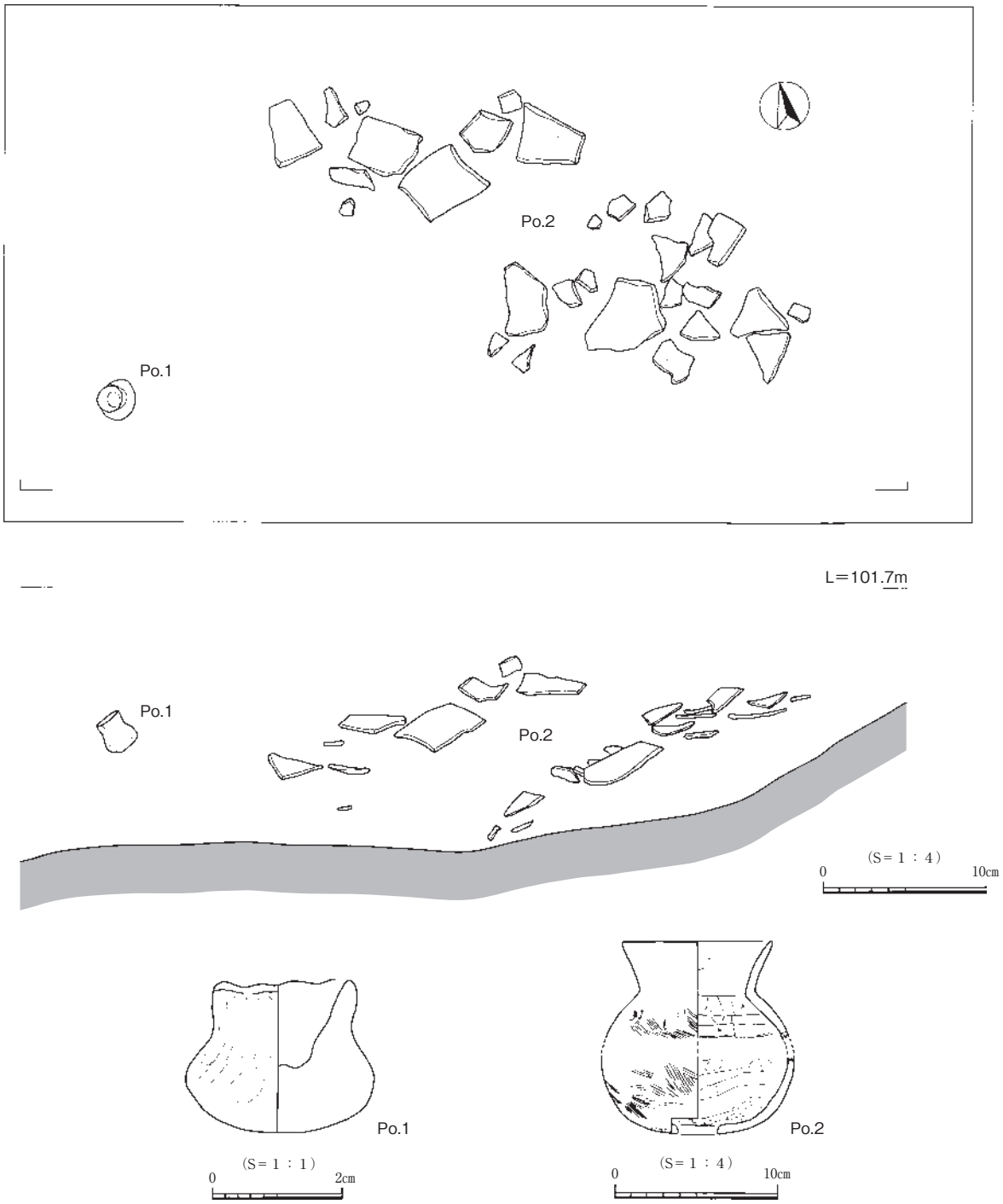
第12図　越敷山124号墳　２主体部遺構図①



第13図　越敷山124号墳　２主体部遺構図②



第14図　越敷山124号墳　２主体部遺構図③



第15図　越敷山124号墳　周溝内出土土器図

出土遺物　この古墳から出土した遺物は、周溝内の南西部からバラバラに破損した土師器の壺が１点と、てづくね整形された完形品のミニチュア壺が１点出土したのみである。Po. 1は、手づくねで整形されたミニチュアの土器で壺を模していると考えられる。Po. 2の土師器の壺は、直径９㎝前後、高さ12㎝の長頸壺で、胎土は緻密で色調は橙褐色を呈する。壺の底部には、直径２㎝程の穴があることから、焼成後に穿孔されたものと考えられる。この古墳の時期は、周溝内から出土した土師器壺（Po. 2）から、古墳時代中期のものと考えられる。

越敷山125号墳（第16・17図）

越敷山125号墳は、124号墳のすぐ南の尾根上に隣接している。現状での両古墳の比高差は、0.8m程あるが、自然地形と同様の傾斜のため、表土掘削前に行った測量調査でも古墳の存在を示す兆候は全く認められなかった。このため新規発見の古墳となるが、この古墳の15mほど南に上った所に登録されていた越敷山125号墳が、調査の結果存在しないことが判明したため、こちらの古墳を越敷山125号墳として調査した。

墳丘・周溝　この古墳は、北側の周溝を124号墳と共用しており、南側の周溝は、丘陵の尾根部を「U」字形に掘り込んで造られている。周溝の規模は、長さ６m、幅1.2m、深さ40cm程度と推測されるが、周溝の調査をする前に陥穴を先に掘ってしまったため、周溝の形が不明瞭になっている。陥穴は３基が切り合っており、そのうちの陥穴６には、埋土の上層に最大で一辺40cm程の石を複数置いた集石２が見られるが、この集石に伴う掘形の確認ができなかったため、周溝内埋葬の遺構かどうかは判断できなかった。

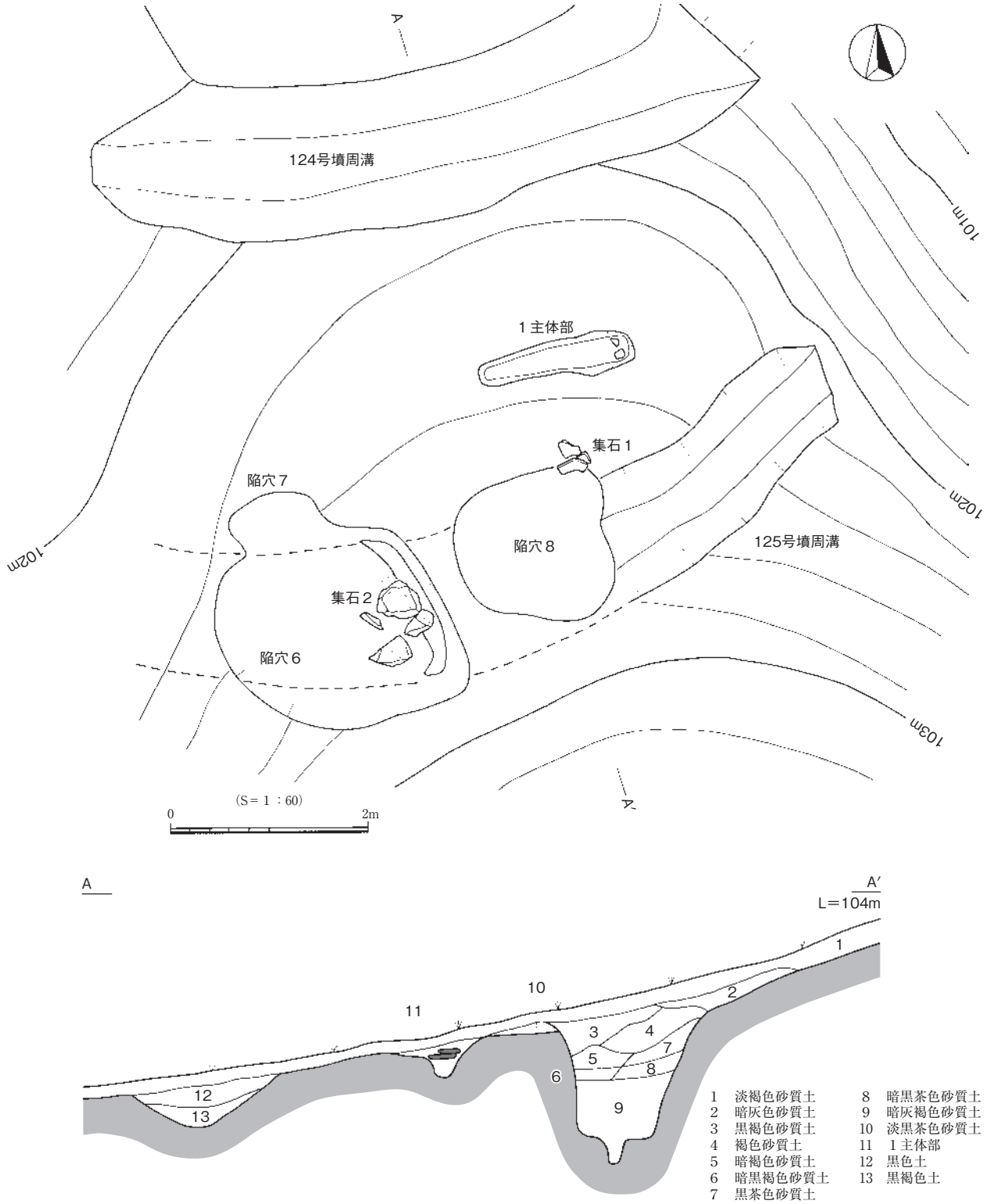
125号墳の墳丘については、古墳の盛土が斜面に沿ってほとんどが流出しているため、元の古墳の形を明瞭にすることができないが、南北の周溝の間隔と南側に掘られた周溝の規模から、南北４m、東西６m程の長方形墳と推測される。

埋葬施設　墳丘上で検出した埋葬施設は、墳丘の中央やや東寄りに１主体部とした石蓋土壙墓が１基あり、更に墳丘南側の周溝沿いに石材の集石１が見られるほか、陥穴６の上層埋土から性格不明の集石２を検出している。

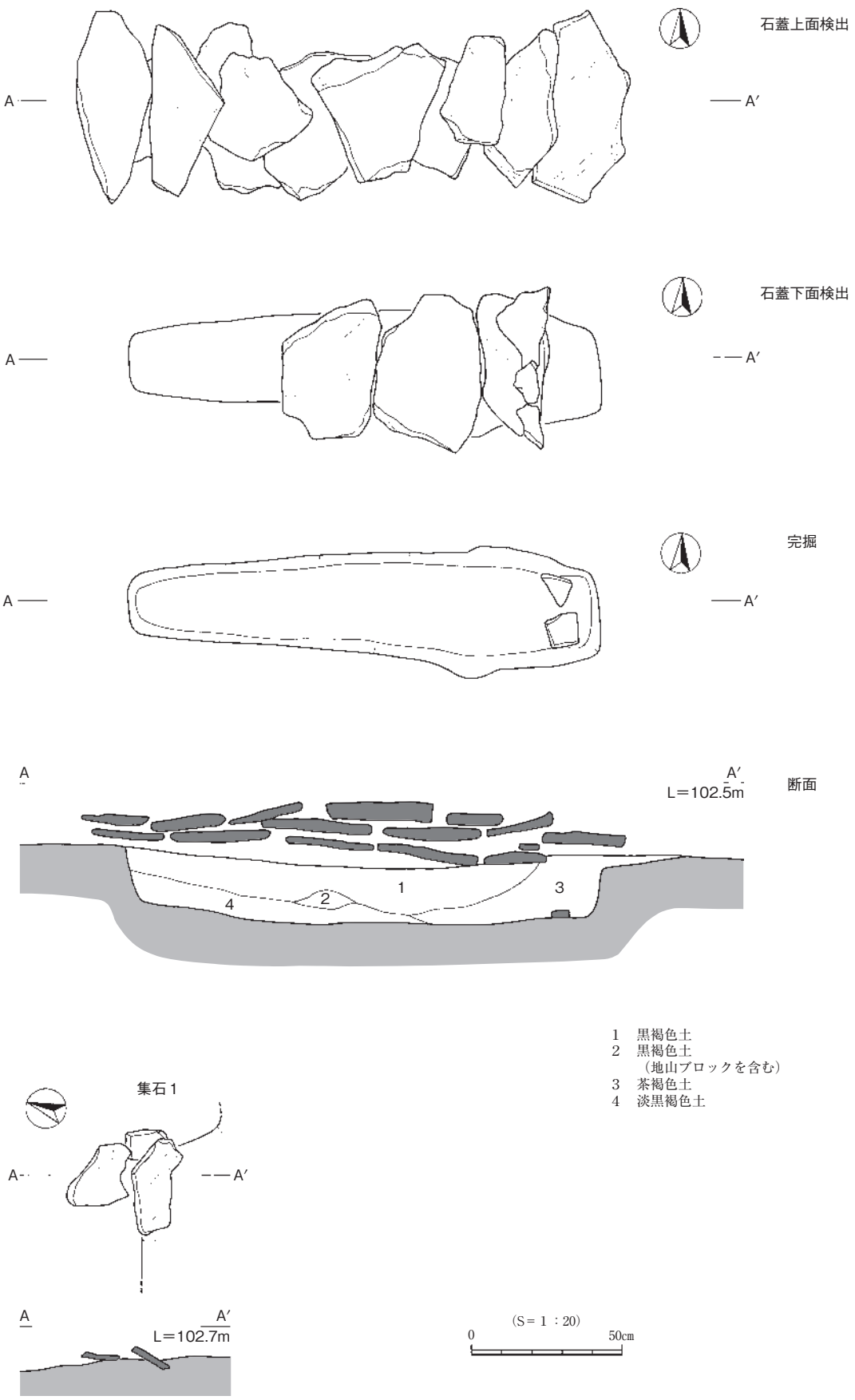
１主体部　ここで検出した埋葬施設は、石蓋を持つ土壙墓である。墳丘のほぼ中央部に位置しており、表土を除去すると、すぐに積み重ねられた蓋石が現れた。蓋石は、長さ20～120cmの多角形の平石、10個以上を前後二回に分けて閉塞しているが、石棺材との隙間を詰めるような粘土は用いられていなかった。墓壙内の埋土は３層に分かれており、ほとんど締まりのない砂質土が堆積していたことから、雨水の影響などで蓋石の隙間から土砂が流入して堆積したものと考えられる。墓壙の掘形は、長辺155cm、短辺20～40cm、深さは30cmである。墓壙の主軸は、W－３°－Nを向く。棺床はフラットで、東側に三角形と四角形の石を置いて枕としているが、墓壙内には副葬品は見られなかった。枕石の存在と、墓壙の掘形が東に向かって広くなっていることから、この主体部の頭位方向は東枕であったと考えられる。

集石１　125号墳の南側の周溝に接して造られた遺構で、陥穴８を切っている。長さ20～35cm程度の平石を二つ並べた集石で、底面に枕石のように四角い石が置かれているため、一見すると石棺墓の石材が北側に倒れこんだ状況にも見えるが、古墳周溝との位置が近すぎることと、側石を埋め込む掘形が見られなかったことから、埋葬施設の可能性は低いと考えられる。

出土遺物　この古墳に伴う遺物は、出土しなかった。



第16図　越敷山125号墳　全体図



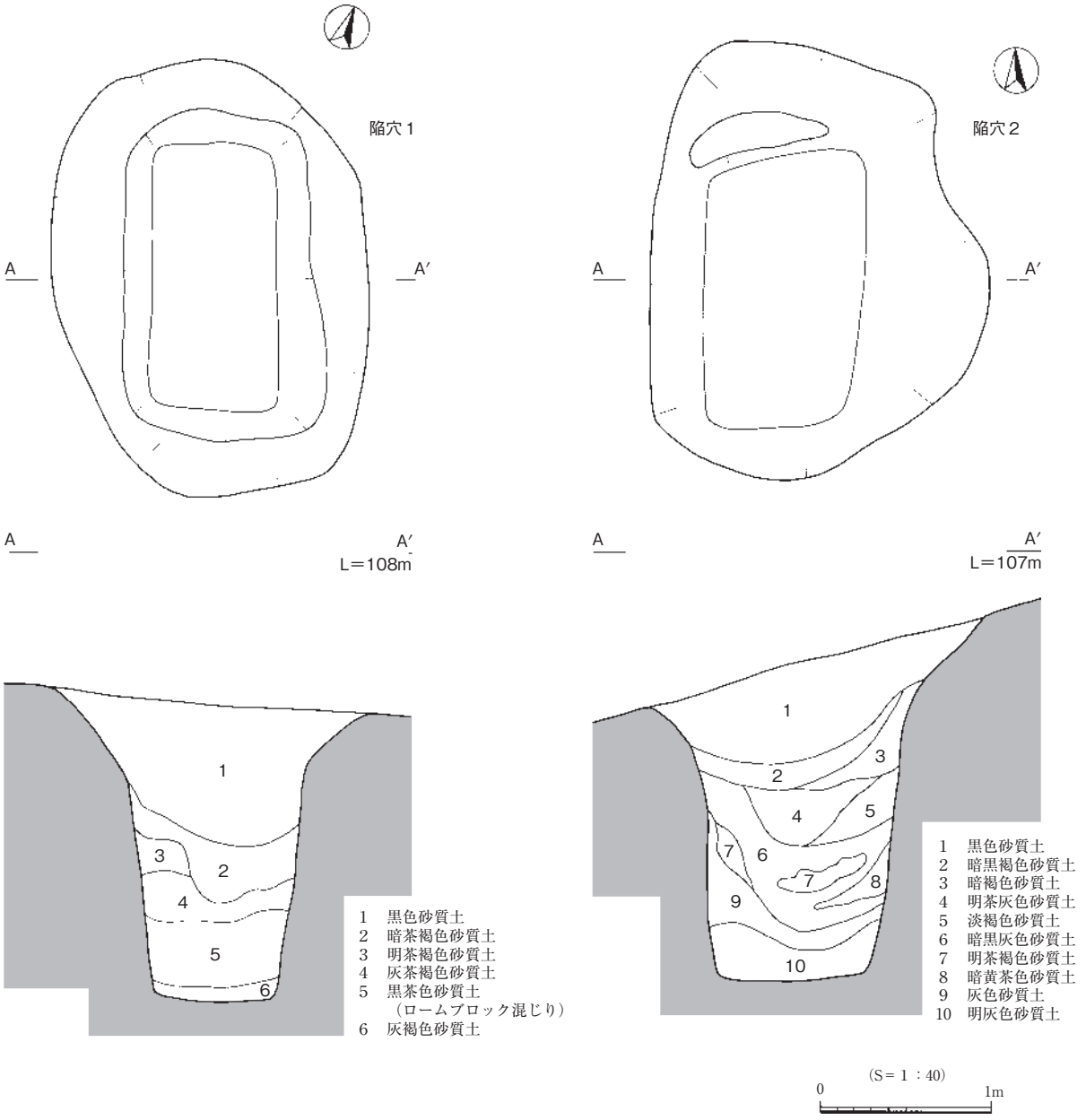
第17図　越敷山125号墳　１主体部、集石１遺構図

第３節　古墳以外の調査

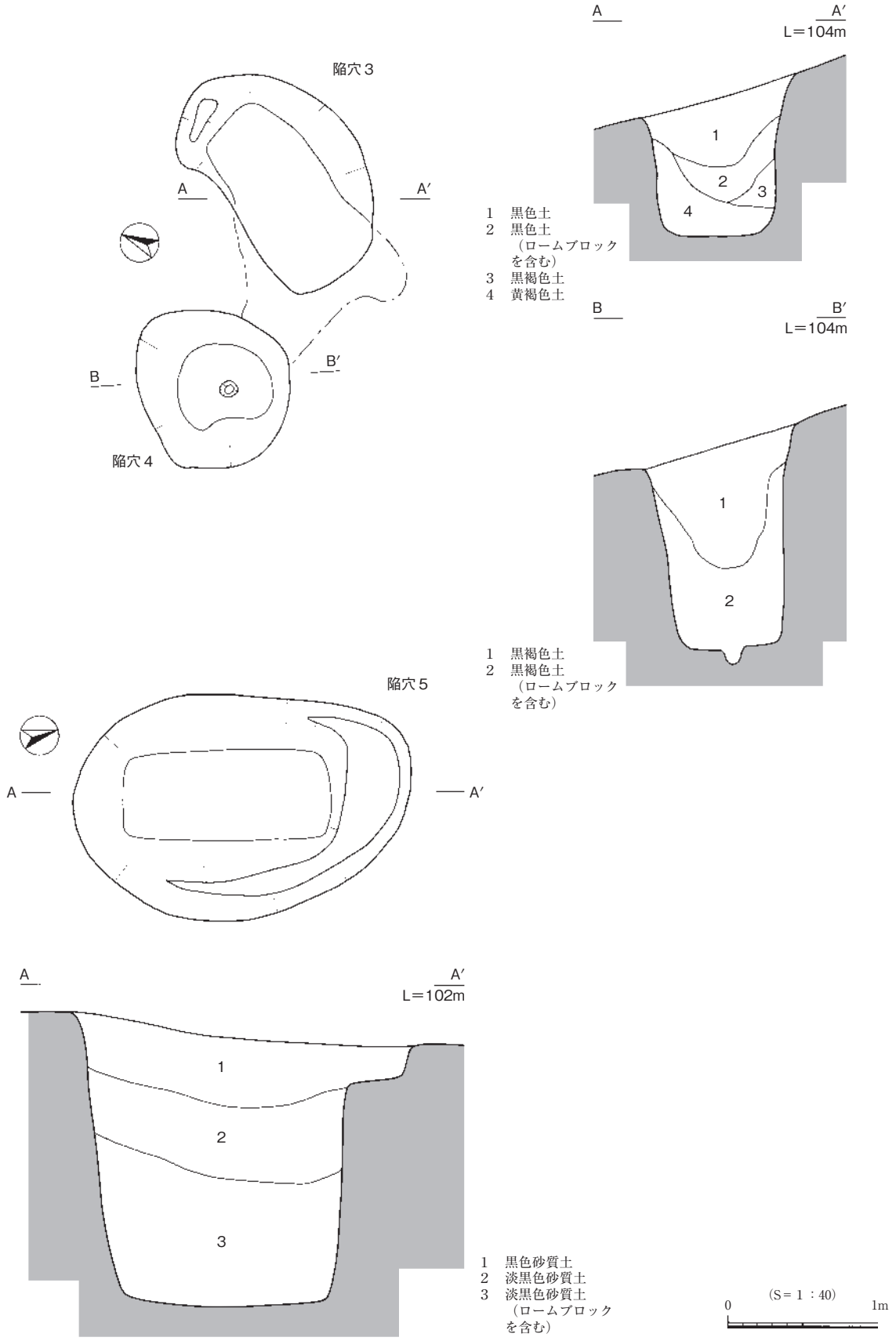
古墳以外の調査では、陥穴と見られる土坑を９基と性格不明の円形土坑１基を検出した。いずれの遺構も遺物が出土していないため時期を特定することができないが、土坑の配列や埋土の状況などに規則性が見出せず、急峻な尾根上に位置していることから、縄紋時代を中心とする時期に掘削された狩猟用の陥穴と推測される。

陥穴１（第18図）

Ａ区の標高107m付近の尾根上に位置する、底面が長方形を呈する土坑である。遺構の検出面は楕円形を呈しており、底面は隅丸の方形を呈している。土坑の規模は、検出した面で長さ2.6m、幅1.9mを測る。深さは1.7mもあり、この種の土坑としては大型の部類に属する。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。



第18図　陥穴１・２遺構図



第19図　陥穴３～５遺構図

陥穴２（第18図）

Ａ区の標高106m付近に位置する、底面が長方形を呈する土坑である。検出面は楕円形を呈しており、規模は長さ2.5m、幅２mと大型である。底面は長さ1.6m、幅１mあり、深さも2.1mと傑出した規模を誇る。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

陥穴３（第19図）

検出面が楕円形を呈する土坑である。検出面は、長径1.6m、短径１mを測り、深さは１m程度である。土坑底面の西壁面が隣接する陥穴４とトンネル状に接続しており、アナグマなどの生痕が重複している可能性がある。しかし、底面が平らに整形されていることから、陥穴と推測した。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

陥穴４（第19図）

陥穴３の西に隣接する円形の土坑であり、前述したように陥穴３と壁面がトンネル状に繋がっている。土坑の規模は検出面で0.6m程度あり、深さは1.5mを測る。底面には直径10cmほどの小穴が掘られている。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

陥穴５（第19図）

125号墳の西、標高102m付近に位置する大型の土坑である。検出面は、長径2.2m、短径1.5mの長楕円形で、上面から20cmほど掘り下げたところから長方形の土坑となる。底面は長さ1.4m、幅0.6m、深さ1.8mを測る。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

陥穴６・集石２（第20図）

125号墳の南側周溝内に位置する円形の土坑である。古墳の周溝を検出する前に掘削してしまったため、古墳周溝との関係が不明瞭になっているが、直径２m程の円形土坑と推測される。土坑の上層に石が置かれていることから、周溝内埋葬の可能性があるが、断定はできなかった。土坑の底面は直径80cm程の円形で、底面には小穴は見られない。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

陥穴７（第20図）

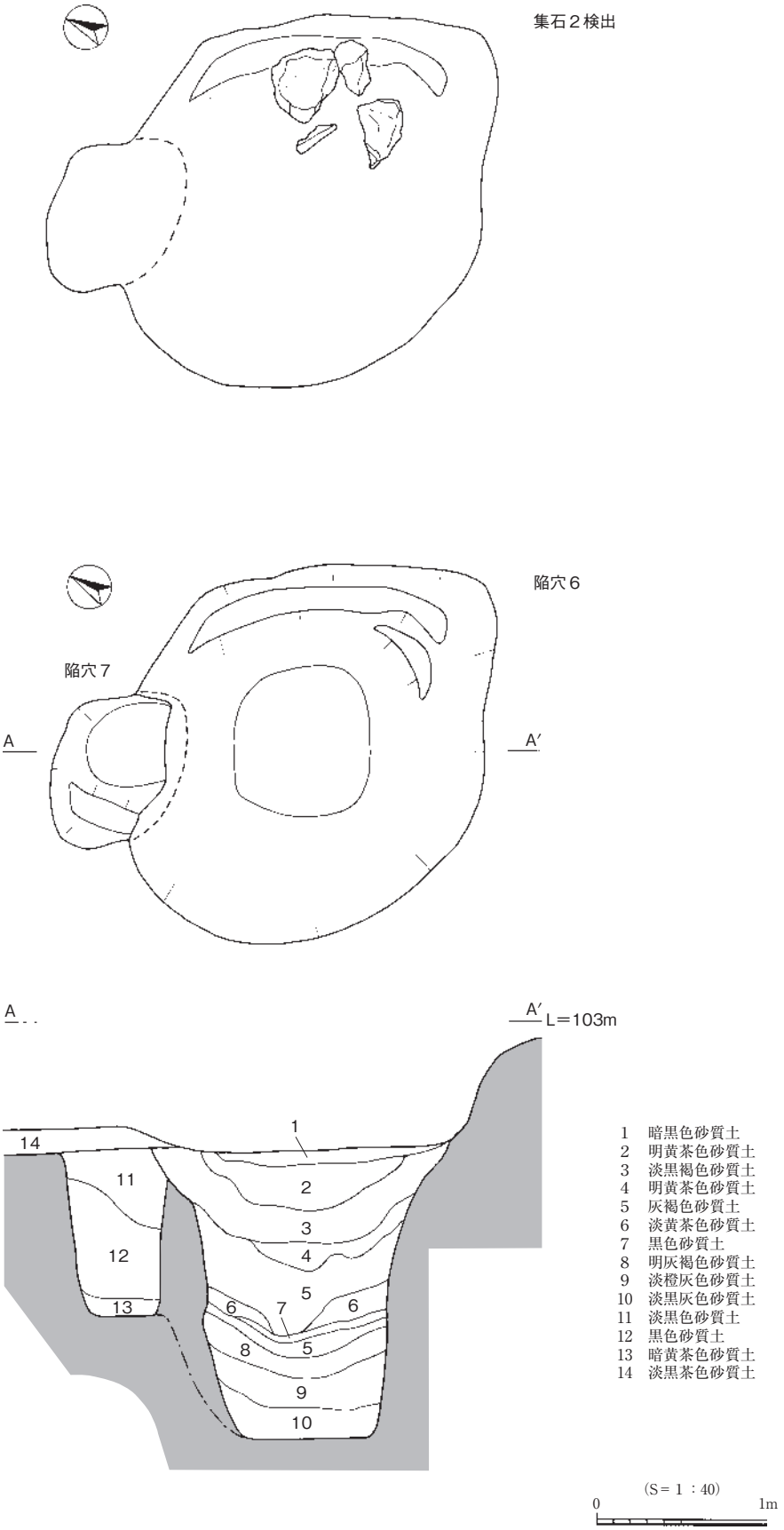
125号墳の周溝に切られている、直径0.6m程度の円形土坑と推測される。深さは１mで、底面に小穴は見られない。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

陥穴８（第21図）

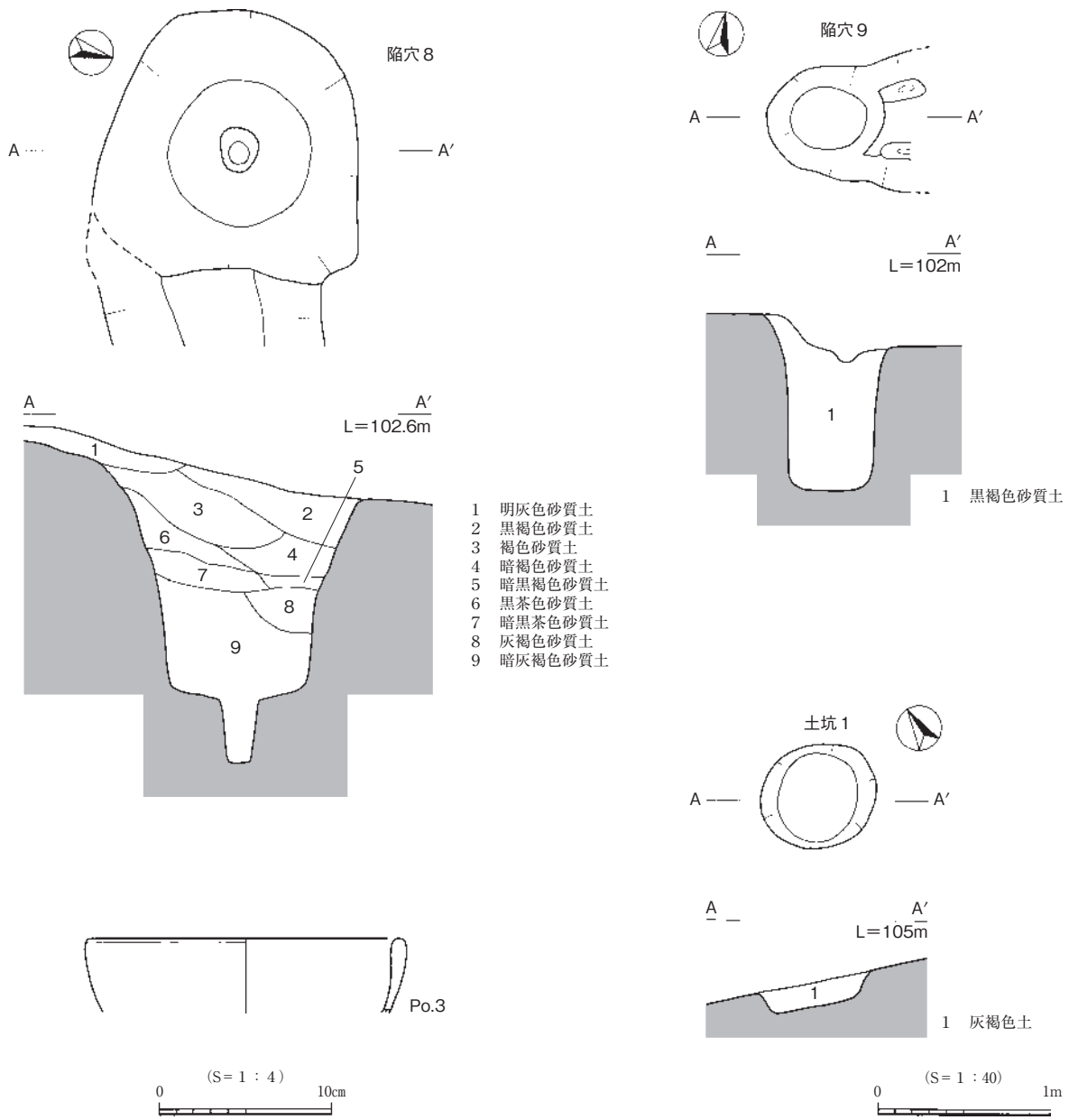
125号墳の南側周溝内に位置する円形の土坑である。古墳の周溝を検出する前に掘削してしまったため、検出面の規模が不明だが、直径１m程の円形土坑であったと考えられる。底面の中央に、直径25cm、深さ40cmほどの小穴がある。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

陥穴９（第21図）

124号墳の中央部に位置する土坑で、１主体部の掘形に切られている。直径0.7mの円形土坑と推測



第20図　陥穴６・７、集石２遺構図



第21図　陥穴８・９、土坑１遺構図・包含層出土遺物図

される。深さは約１mで、底面に小穴は見られない。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

土坑１（第21図）

Ａ区の標高105m付近の尾根筋上に位置する、性格不明の円形土坑である。直径60cm、深さ15cmを測り、土坑内には灰褐色土が堆積していた。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

第４節　遺構に伴わない遺物（第21図）

遺構に伴わない遺物は、縄紋土器の浅鉢の口縁部片（Po. 3）が、表土の掘削中に１点出土している。土器の表面はやや風化しているが、外面はケズリ後にナデ調整されている。

第４章　金廻家ノ上ノ内遺跡Ｂ区の調査

第１節　調査区の概要と層位

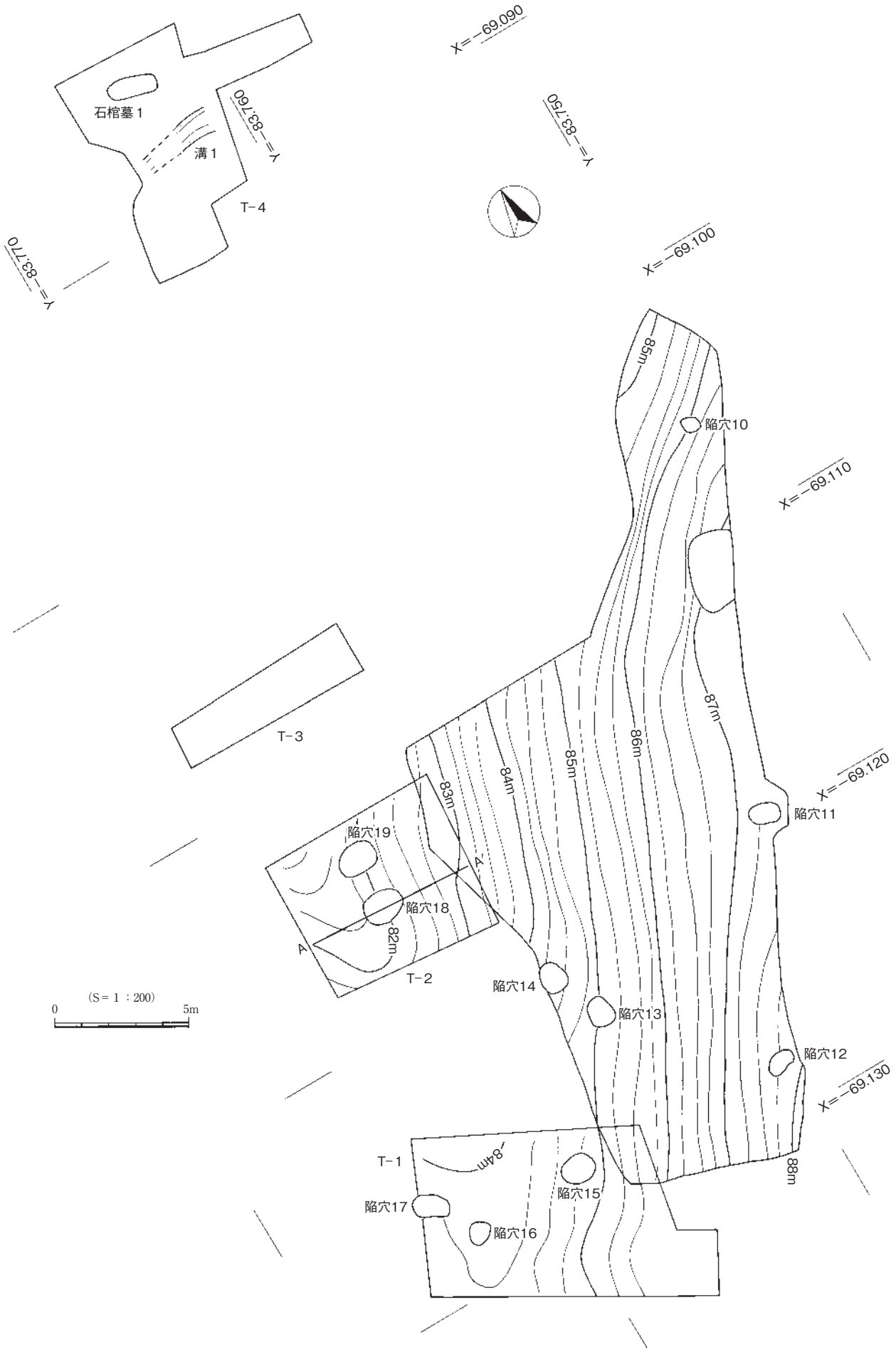
金廻家ノ上ノ内遺跡のＢ区は、鳥取県教育文化財団が調査を行った斜面の標高88mより下位の地点である。発掘調査前の協議段階では、調査範囲に含めていなかったが、工事用車両の上り口の地山が露出した地点に、石棺材らしきものが露出していたことから、この範囲も広げて調査を行ったところ、石棺が確認されたため、更に上位の斜面部についても全面表土を除去し、谷部はトレンチを３本追加して調査を行い、陥穴が確認されたトレンチでは更に拡張して調査を行った。

調査区内の層位は、丘陵の斜面部では表土から地山まで30～60㎝程度の堆積があり、概ね表土と黒褐色の砂質土に分かれている。一方、谷部に設定したトレンチ（Ｔ１～３）の調査では、表土から地山まで1.5～３m程度の深さがあり、上層の表土から下層にかけて黒褐色系の砂質土が堆積しており、肉眼でも３～４層に分層することが可能であった。遺物は、縄紋時代晩期から古墳時代中期の土器片などが、クロボクに近い黒色土から出土しているが、ほとんどが細片であるため、丘陵上から転落してきた遺物が再堆積したものと考えられる。また、一点だけ出土した鋳鉄製の鍋は、Ｂ区の表土から出土した。

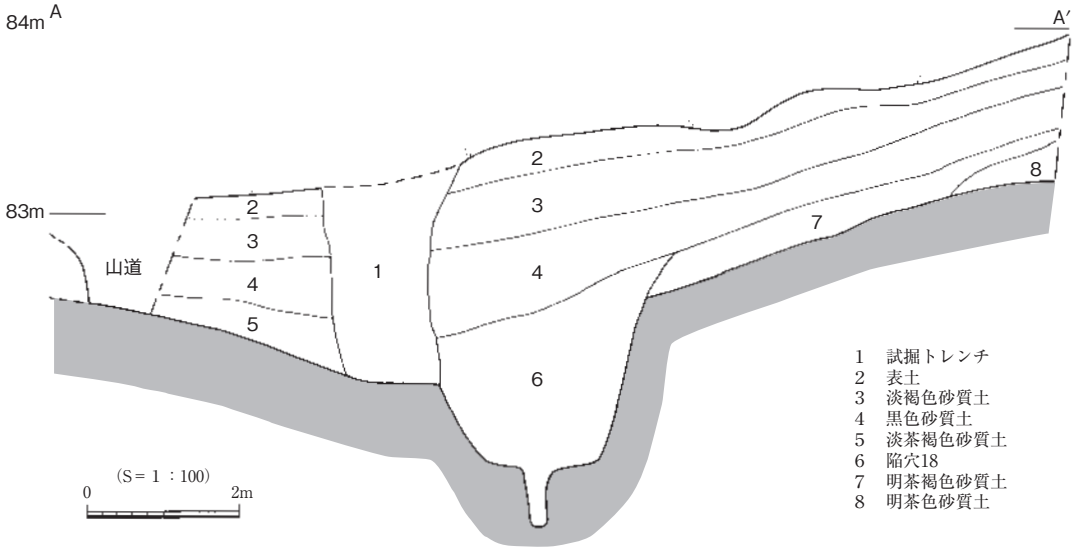
Ｂ区で検出した遺構は、石棺墓１基と溝状の遺構１条、陥穴と見られる円形の土坑10基である。

石棺墓１は、工事用車両の搬入路上にあり、蓋石などは調査前に失われていたため、保存状態が良くなかったが、石棺の床面から石枕を検出したことから、棺内はそれほど荒らされていなかったと推測される。

陥穴については、Ｂ区では10基を検出したが、遺構内からは時期を特定できる遺物は出土しなかった。ただし、遺構内にクロボクに類似した土が堆積している土坑があったことから、この丘陵上にクロボクが堆積していた時期に埋没したものと考えられる。また、Ａ区で検出したような一辺が２mを超えるような大型の土坑は確認されなかったが、円形ないし楕円形を呈するものが多かったことから、Ａ区の尾根部に掘削された陥穴とは、時期的に相違するものと考えられる。



第22図　金廻家ノ上ノ内遺跡Ｂ区　遺構図



第23図　T−2断面図

第２節　古墳の調査

石棺墓１（第25・26図）

石棺墓１は、県財団が調査を行っていた場所への、工事用車両の進入路上に位置している。調査前の現地視察の際に、工事用車両の進入路が大量に降った雨水の影響で、土砂が流出して石棺の石材らしき平石が露出しているのを確認したことから、当初の調査範囲を拡張してトレンチ調査を行い、埋葬施設の存在を確認した。石棺の立地は、丘陵斜面の標高77m付近の緩斜面に位置している。石棺墓１の周囲には、溝１以外の遺構は見られず、丘陵側の斜面にもテラス状に掘り込んだような痕跡は見られなかった。

石棺は、調査前の段階で蓋石が除去されており、両辺の長側板が、南側に向かって倒れ込んだような状況で検出した。棺内には、東側に枕石と見られる平石が２個置かれており、検出時はその上にも小口板がかぶさったような状態であった。石棺の規模は、長さ1.8m、幅50cm程度と推測される。棺床は、西に向かって傾いており、この傾斜が、石棺の上を通過した重機などの重みで沈み込んだものか、石棺が造られた当初から傾斜していたのかはわからなかった。石棺の主軸は、W－30°－Nであり、枕石の存在から東頭位で埋葬されたと考えられる。

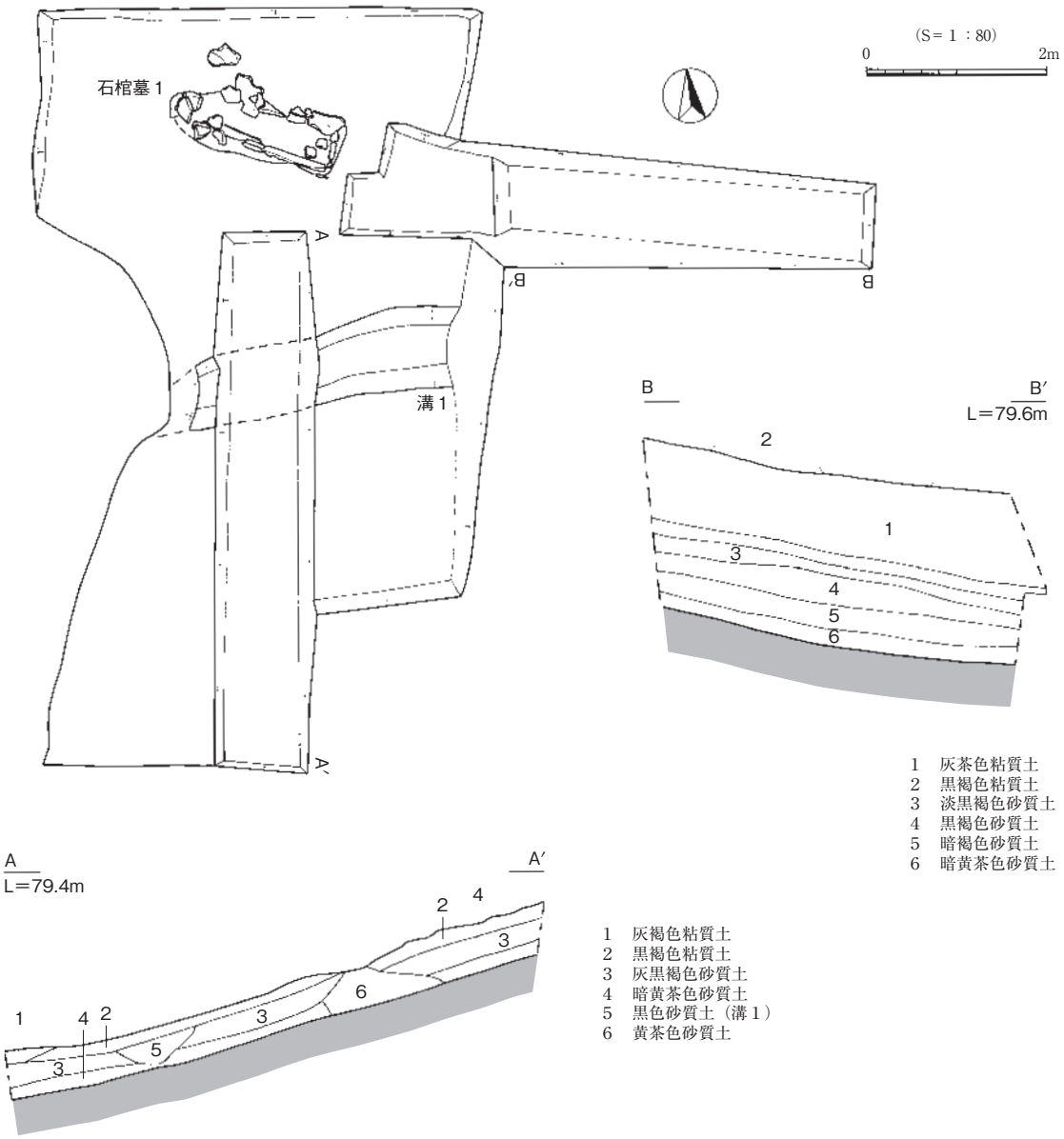
石棺の掘形は、西側が流失しているため正確ではないが、概ね長さ２m程度、幅50～70cm程度の長方形と推測される。

出土遺物　この石棺に伴う遺物は、出土しなかった。

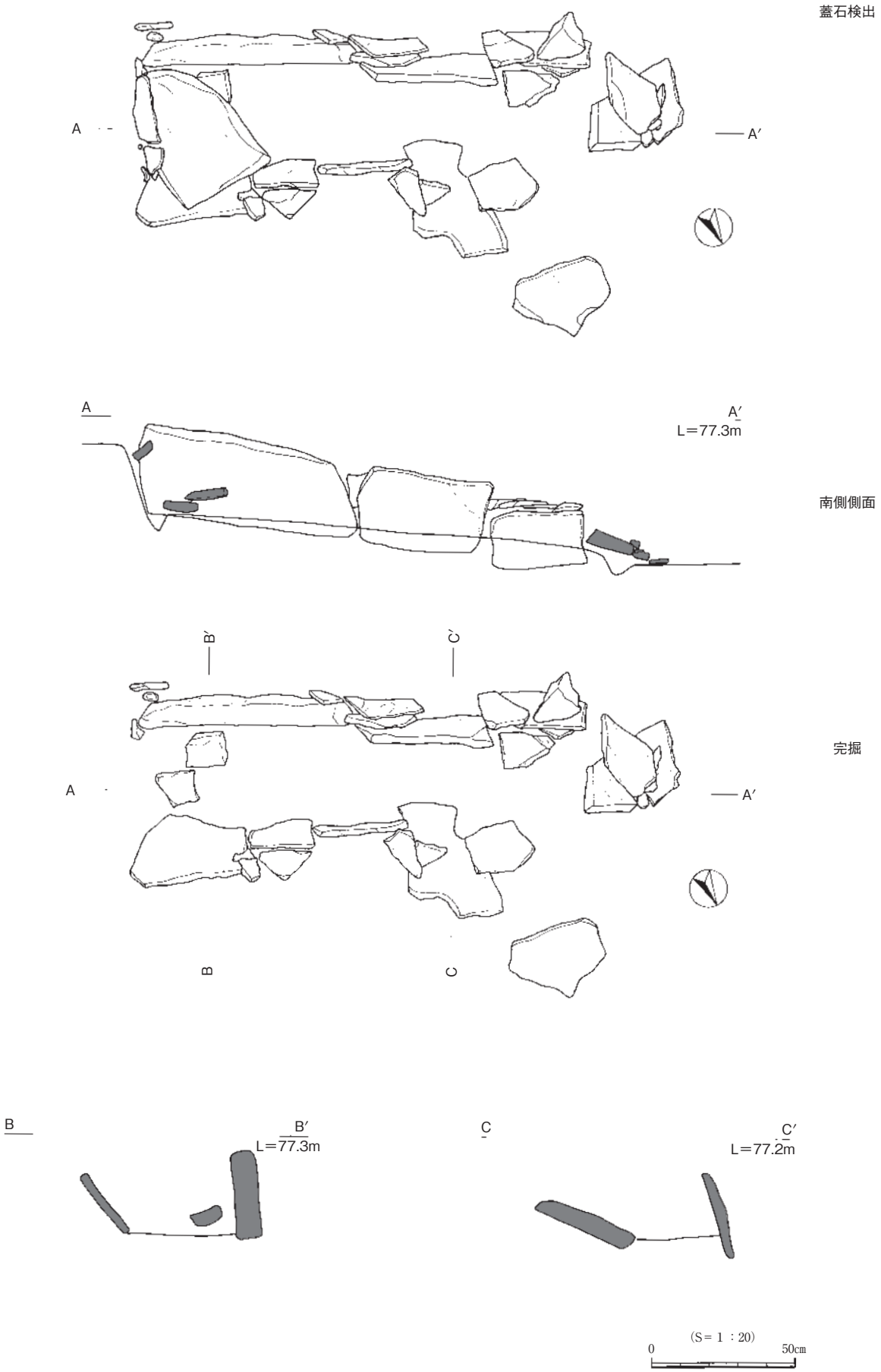
溝　1（第24図）

石棺墓１の南側で検出した溝状の遺構である。検出した長さ３m、幅８㎝、深さ30㎝あり、溝の断面形は「U」字形を呈する。埋土は、ほぼ黒色の砂質土１層のみである。石棺墓１の東側へ溝が回り込まないことから、石棺墓１の周溝ではないと判断した。

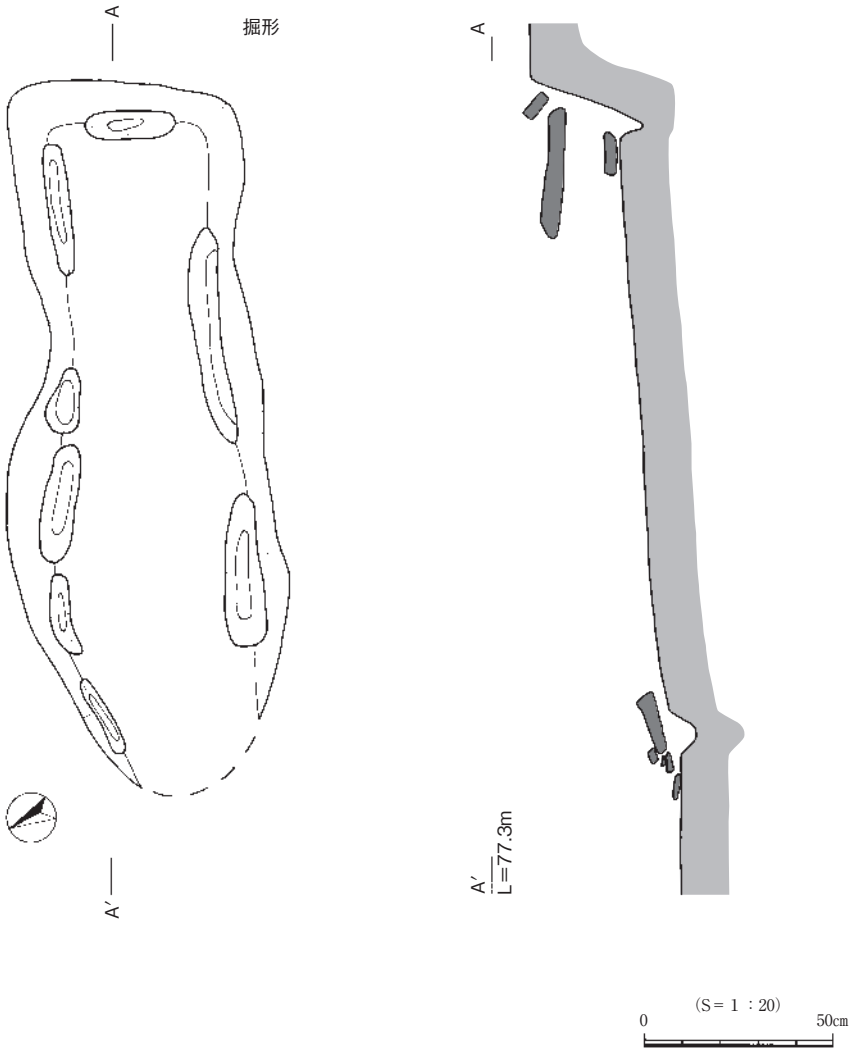
出土遺物　この遺構内から、遺物は出土しなかった。



第24図　T−4遺構図



第25図　石棺墓１遺構図①



第26図　石棺墓１遺構図②

第３節　古墳以外の調査（第27・28図）

陥穴10

Ｂ区の北側、標高86m付近で検出した隅丸方形の土坑である。検出面の長辺が70cm、短辺が50cmで、深さは１mを測る。土坑の埋土にクロボクに類似する黒色土が堆積していたため、検出は容易であった。また、Ｂ区で見つかった土坑は、同様の黒色系の砂質土が堆積している点に特徴が見られる。土坑の底面は、長辺50cm、短辺38cmと、検出面よりも更に狭くなっており、部分的にすり鉢状を呈している。底面の中央には、杭を立てるためと見られる、直径20cm、深さ70cmの小穴が掘られている。

陥穴11

Ｂ区の東端、標高87m付近で検出した長方形の土坑である。土坑の規模は、長辺１m、短辺70cmを測るが、深さは20cm程度しか残っていない。土坑の中央には、直径25cm、深さ50cmの小穴が掘られている。遺構の上部が大きく削平されているが、クロボクに類似した黒色土が堆積していることと、形態的な特徴から陥穴と推測される。

陥穴12

Ｂ区の東端、標高88m付近で検出した楕円形の土坑である。検出した規模は、長径90㎝、短径60㎝で、深さは1.2m程である。土坑の埋土は、黒色土が主体である。土坑の中央には、直径20㎝、深さ40㎝の小穴が掘られている。

陥穴13

Ｂ区の西端、標高85m付近で検出した楕円形の土坑である。長径１m、短径80㎝で、深さは１mである。土坑の埋土は、黒色土が主体である。土坑の中央には、直径20㎝、深さ45㎝の小穴が掘られている。

陥穴14

Ｂ区の西端、標高84.5m付近で検出した不整形土坑である。長辺1.2m、短辺１mを測り、深さは1.1mを測る。土坑の断面形は、緩やかな逆台形状を呈している。土坑の埋土は、黒色の砂質土のみである。土坑の底面は水平に整えられているが、この遺構のみ、Ｂ区のその他の土坑で見られたような小穴は見られなかった。

陥穴15

トレンチ１の拡張部分、標高85m付近で検出した、やや大型の楕円形土坑である。土坑の規模は、長径1.3m、短径1.1m、深さ1.6mを測る。土坑の埋土は黒色の砂質土のみで、土坑の底面中央には直径20㎝、深さ60㎝の小穴が掘られている。

陥穴16

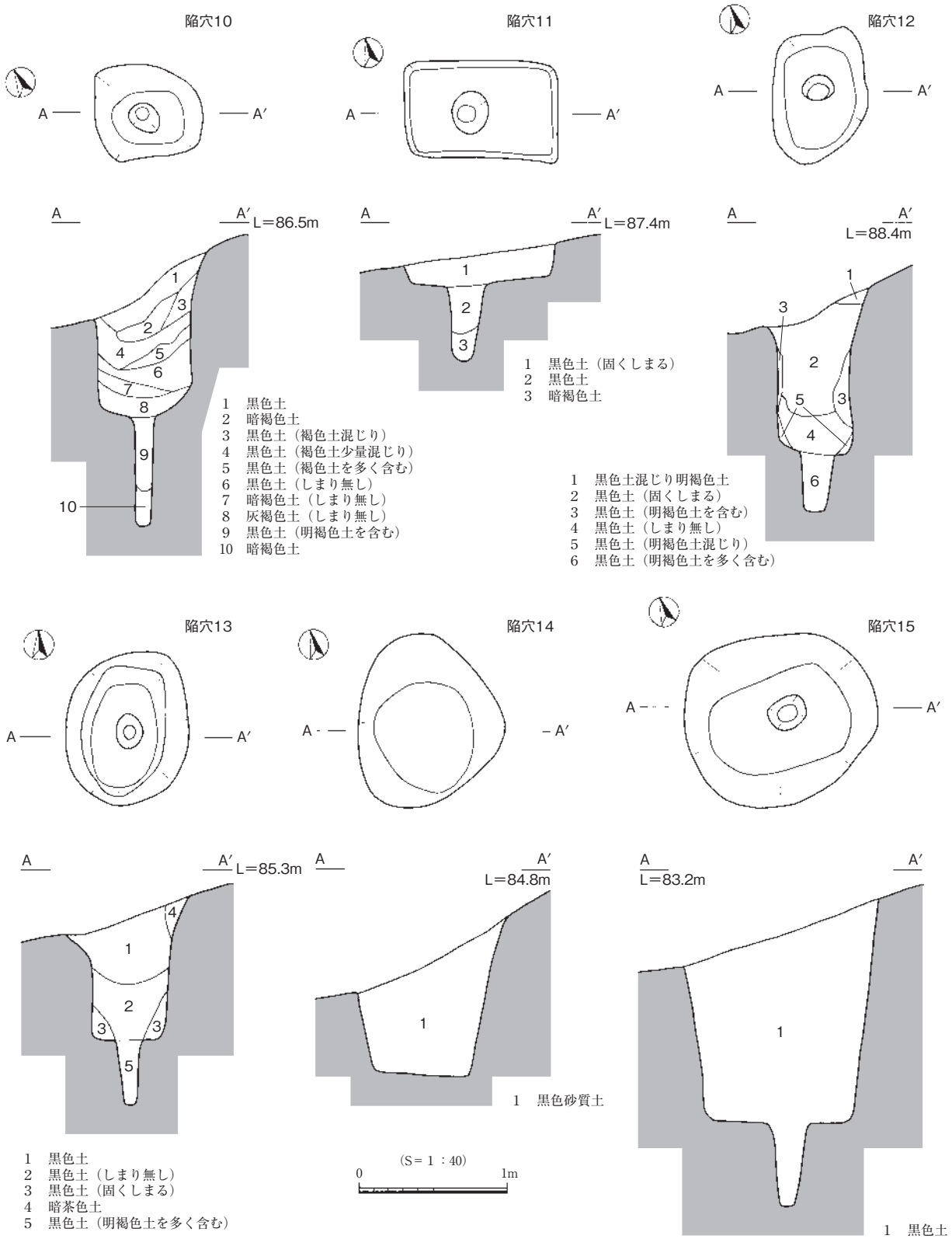
トレンチ１の標高84m付近で検出した楕円形の土坑である。土坑の規模は、長径１m、短径80㎝、深さは1.2mを測る。土坑の埋土は黒色の砂質土のみで、土坑の中央には直径10㎝、深さ20㎝の小穴が掘られている。

陥穴17

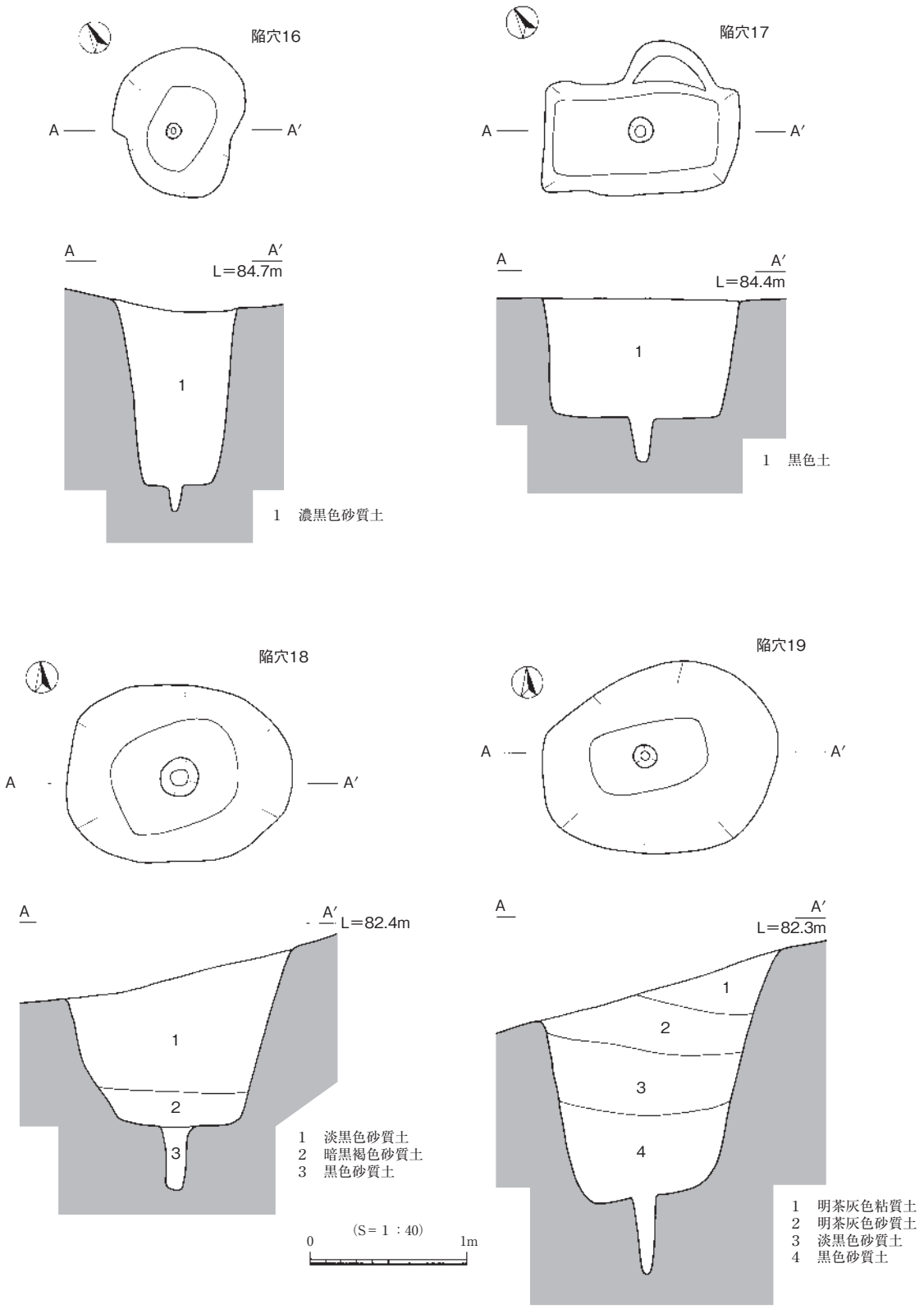
トレンチ１の西側で検出した長方形の土坑である。土坑の規模は、長辺1.3m、短辺70㎝、深さ80㎝を測る。土坑の埋土は黒色の砂質土のみで、土坑の中央には直径15㎝、深さ30㎝の小穴が掘られている。この種の土坑としてはやや浅いが、陥穴11と同様に遺構の上部が削平されていると考えられる。

陥穴18

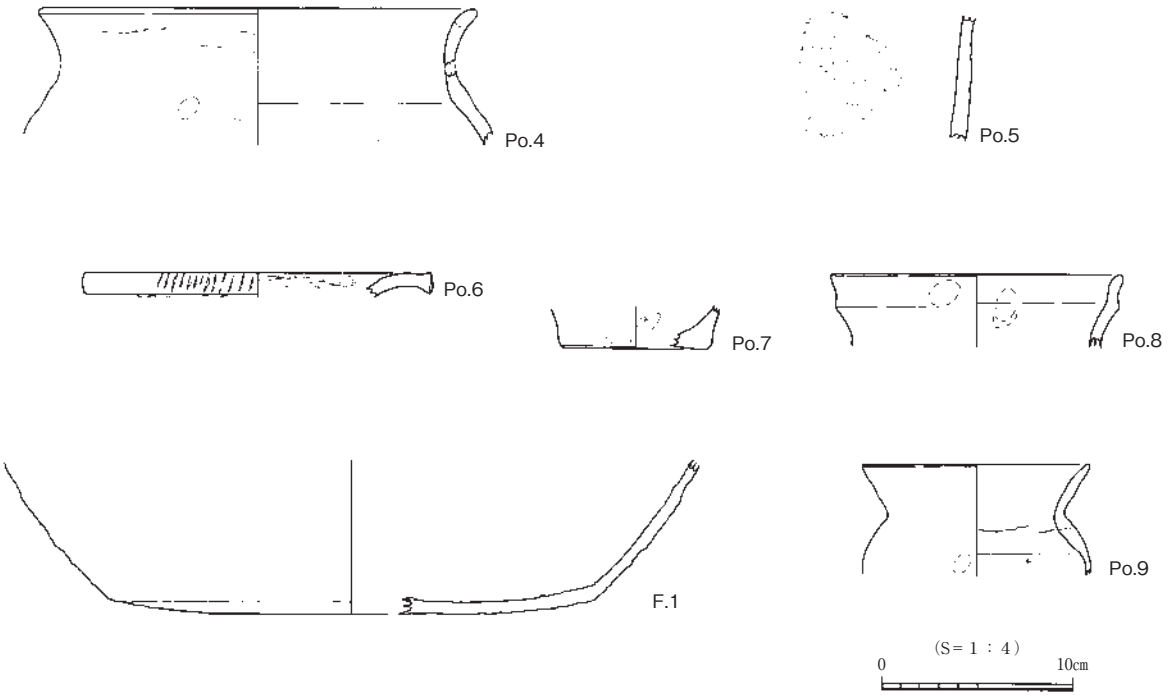
トレンチ２の中央で検出した大型の楕円形土坑である。トレンチ２の断面に陥穴状の落ち込みが見られたことから、トレンチを拡張して検出した。土坑の規模は、長径1.5m、短径1.1m、深さ1.5mを測る。土坑の埋土は黒色の砂質土が主体で、土坑の中央には直径20㎝、深さ40㎝の小穴が掘られている。



第27図　陥穴10～15　平・断面図



第28図　陷穴16～19　平・断面図



第29図　Ｂ区・トレンチ出土遺物図

陥穴19

トレンチ２の北側で検出した大型の楕円形土坑である。土坑の規模は、検出面で長径1.5m、短径1.2m、深さ1.7mを測るが、土坑の底面は長径80cm、短径40cmとなり、急激に細くなっている。土坑の埋土は４層に分かれており、上層はロームに近い粘質土が堆積している。土坑の中央には、直径15cm、深さ50cmの小穴が掘られている。

第４節　遺構に伴わない遺物

遺構に伴わない遺物は、全て包含層から出土したもので、土師器甕（Po.8）と鉄鍋（F.1）以外は谷部に設定したトレンチから出土している。Po.4は、口縁部が緩やかな「く」字形に外反する深鉢で、外面には粗い横方向へのナデ調整の痕跡が残る。Po.5は、外面に粗い条痕調整の痕が残る深鉢の体部片である。どちらも、縄紋時代晩期頃のものか。Po.6は、口縁端部に右上がりの刺突を施す壺の口縁部片で、弥生時代中期中葉頃のものと推測される。Po.7は、弥生土器の底部片である。Po.8は、やや退化した複合口縁の土師器甕の破片で、内外面ともナデ調整される。Po.9は、土師器の直口壺で、体部内面には横方向へケズリ調整する。F.1は、鋳鉄製の鍋の底部片である。底部の直径は、反転復元で25cm程度と推測される。

第５章　金廻家ノ上ノ内遺跡Ｃ区の調査

第１節　調査区の概要と層位

金廻家ノ上ノ内遺跡のＣ区は、越敷山から北へ伸びる丘陵の先端部、標高83～88mに位置している。調査区の北側は、佐野川用水の水路となっているため、74号墳の北側はすぐに切り立った崖状の地形となっている。また、73号墳から北側へ下る斜面部も、山道の建設によって大幅に削平されており、すぐに崖状の地形となる。このため、調査時に発生した排土は、全て斜面下の崖に落とし、排出した土砂を重機とクローラーダンプを用いて、調査区外に搬出した。

Ｃ区の現況は、調査前は森林であり、樹木の伐開後に２基の古墳の存在を確認した。

調査区内における古墳の位置関係は、74号墳が調査区の北側に位置しており、すぐ南東部に73号墳、更に南側の調査区外に72号墳が存在すると考えられる。古墳築造の前後関係については、周溝の切り合いがないことと、74号墳からの遺物の出土が見られなかったため不明だが、二つの古墳が切り合わないように、短期間に築造されていると理解することも可能であろう。

Ｃ区の堆積は、表土である灰褐色砂質土が全面に10～20㎝程の厚さで堆積しており、更に下層の暗灰褐色砂質土を除去すると、すぐに地山となる。陥穴や石棺墓２は、この地山の直上で検出している。越敷山73・74号墳は、黒色系の盛土によって墳丘が構築されており、墓壙の掘形もこの盛土の作業面で検出することができた。

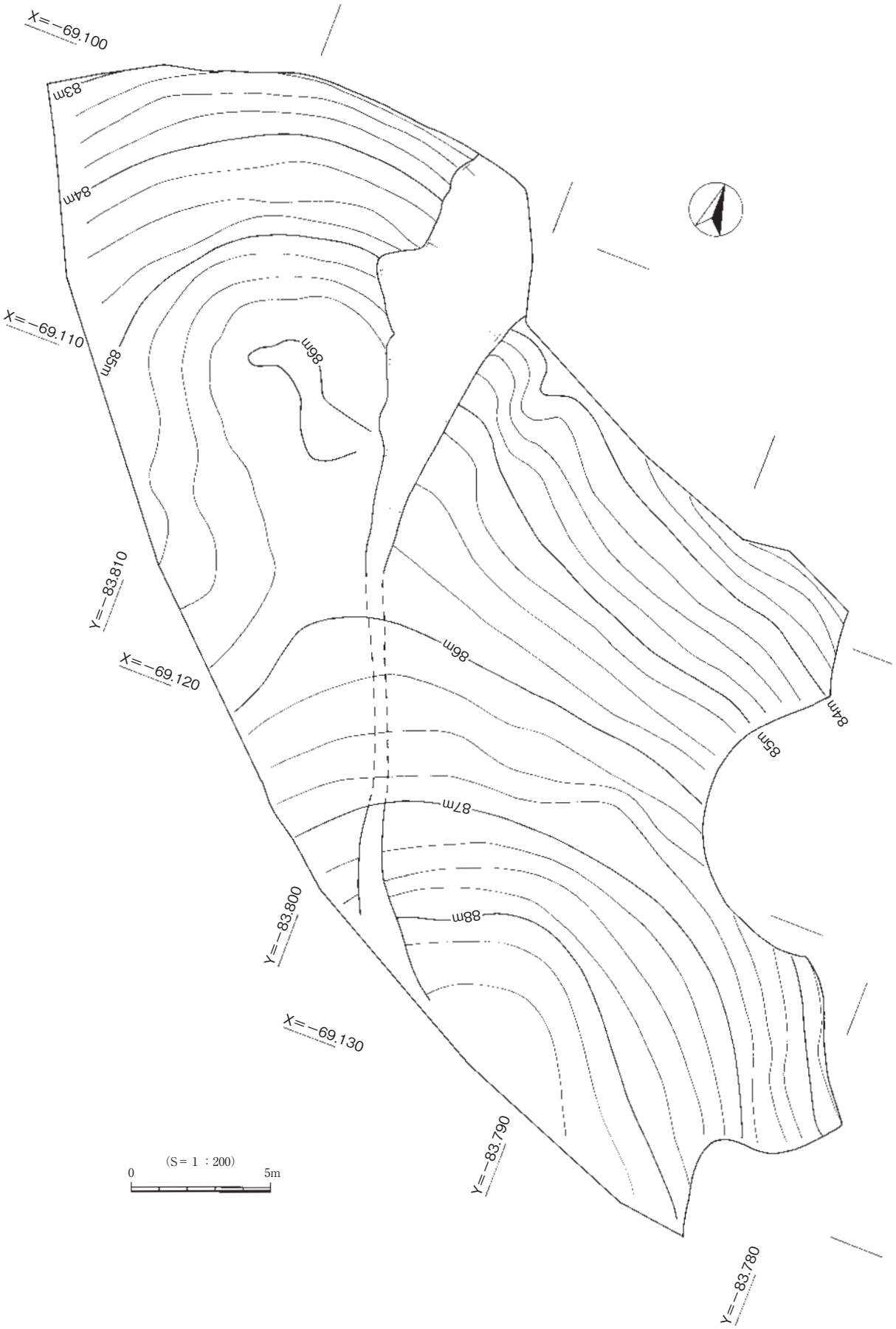
Ｃ区で検出した遺構は、越敷山73号墳の埋葬施設２基と、74号墳の埋葬施設１基、石棺墓１基と性格明の土坑１基、陥穴７基である。

越敷山73号墳は、直径10m、高さ80㎝程の円墳で、南側に周溝が巡ると考えられる。埋葬施設は、石棺墓が２基あり、このうちの１基から、人骨の頭部片と鉄製の鉾が出土した。また、周溝に相当する部分から土師器の壺などが出土している。

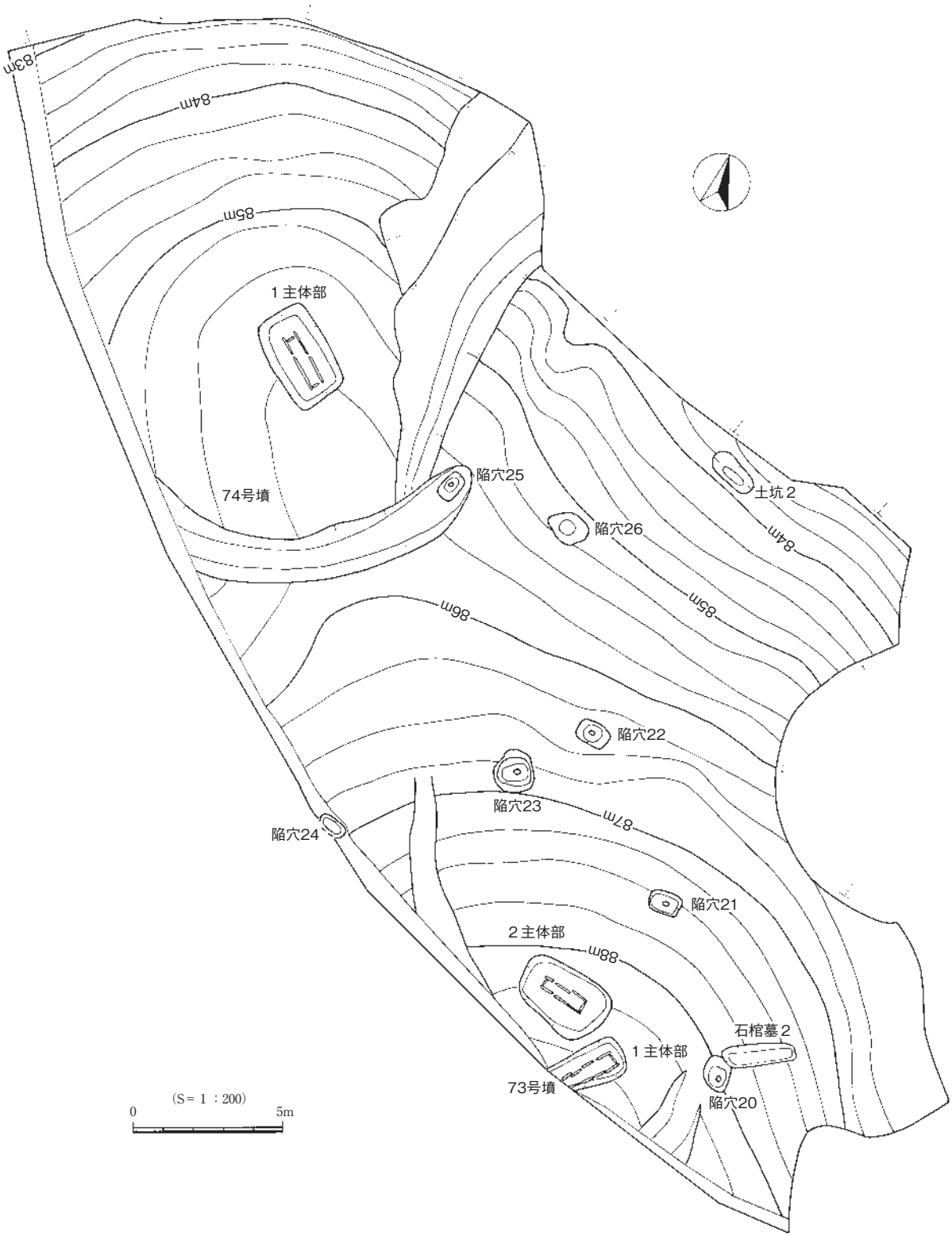
越敷山74号墳は、直径10m、高さ60㎝程の円墳で、南側に周溝が巡っている。埋葬施設は、墳頂部から石棺墓１基を検出したが、既に盗掘に遭っていたため､主体部内からの副葬品の出土は無かった。

越敷山73号墳の北東部で検出した石棺墓２は、両小口部にのみ平石を用いる埋葬施設で、木棺墓と石棺墓の折衷的な要素を持った主体部と考えられる。

陥穴については、掘形が楕円形のものと方形のものが混在しているが、深さについては、ほぼ1.2m前後で共通している。平面的な分布状況を見ると、５mほどの間隔を空けて陥穴20→21→22→26へと一直線に配置されているようにも見えるが、それぞれの陥穴の規模や掘形に共通点が見いだせないことから、同時代に機能した陥穴とするには無理があろう。



第30図　金廻家ノ上ノ内遺跡Ｃ区　調査前測量図



第31図　金廻家ノ上ノ内遺跡Ｃ区　遺構図

第２節　古墳の調査

越敷山73号墳（第32～38図）

越敷山73号墳は、Ｃ区の南端に位置する円墳である。墳丘の南側、２分の１程度は調査区外に残るため、道路開通後も墳丘の一部が道路法面に残存することとなる。

墳丘・周溝　越敷山73号墳の墳丘は、調査前の測量で、直径20m、高さ1.5mの円墳と推測された。また、墳丘の北側から中央に向かって山道と見られる溝が掘り込まれており、調査前から攪乱されているものと考えられた。墳丘の盛土は、表土を除去するとすぐに黒色の砂質土となり、さらに淡黒色の砂質土が堆積し、地山となる。埋葬施設の掘形は、この淡黒色砂質土を掘り込んで造られていることから、墳丘の盛土が出来た段階で墓壙が構築されていると考えられる。

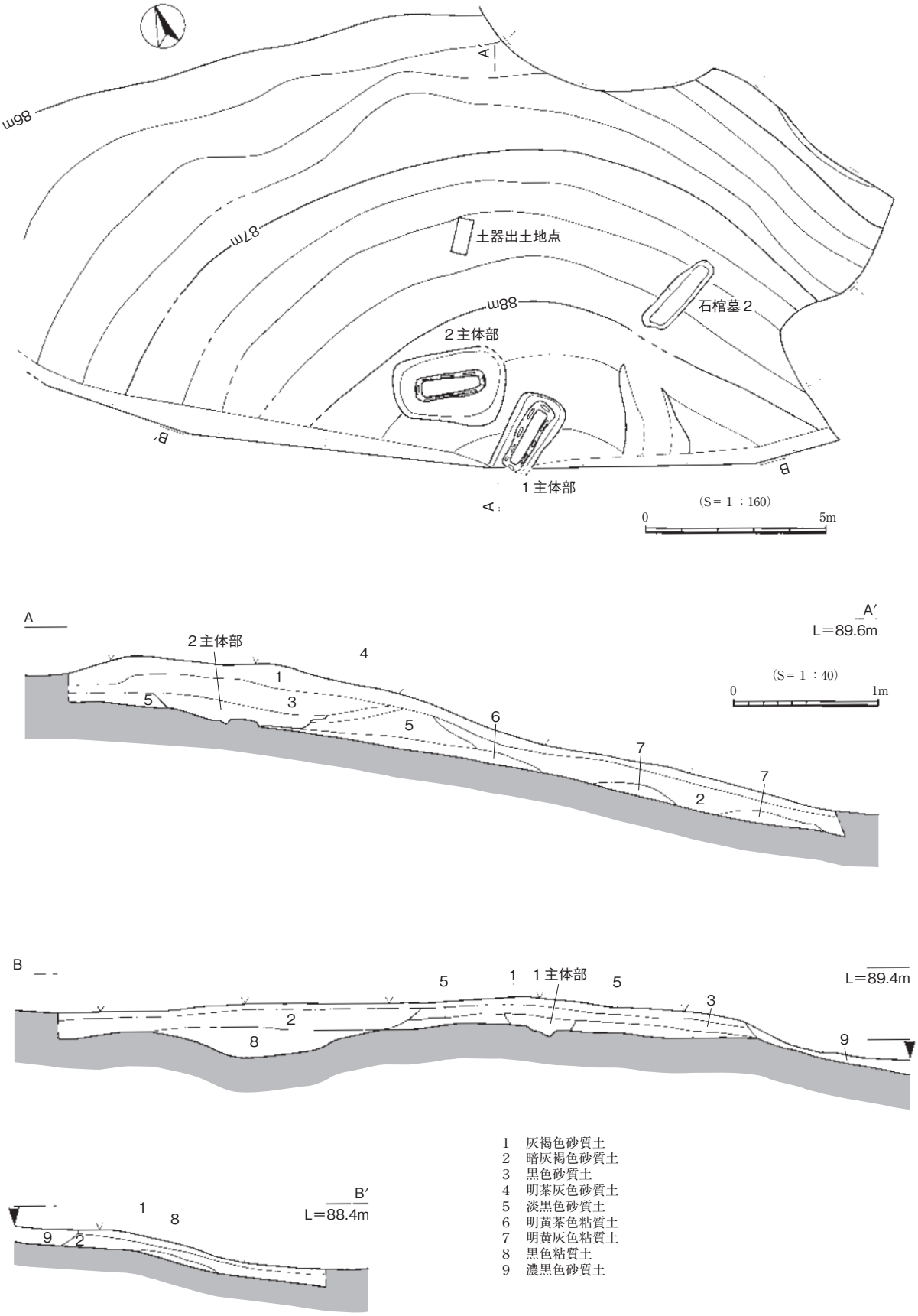
周溝は、墳丘の東側で幅１m、深さ20cmを測るが、北側が途切れていて全周しない。周溝の延長を、墳丘の北側で検出した土器出土地点にまで伸ばすと、概ね直径10m、高さ80cm程の円墳と推測される。また、東側の周溝内からは、土師器甕の口縁部片が出土している。

埋葬施設　越敷山73号墳の埋葬施設は、墳丘上で石棺墓を２基と、墳丘の北東部に位置する地点で、石棺墓を１基検出した。このうち、墳丘外で見つかった石棺墓は、小口部にのみ平石を用いていることから、木棺墓と石棺墓の要素を組み合わせた、折衷的な埋葬施設であったと考えられる。周辺での類例は、平成26年度に調査を行った越敷山79号墳や、米子市・日下39号墳の第２主体部などで確認されている。

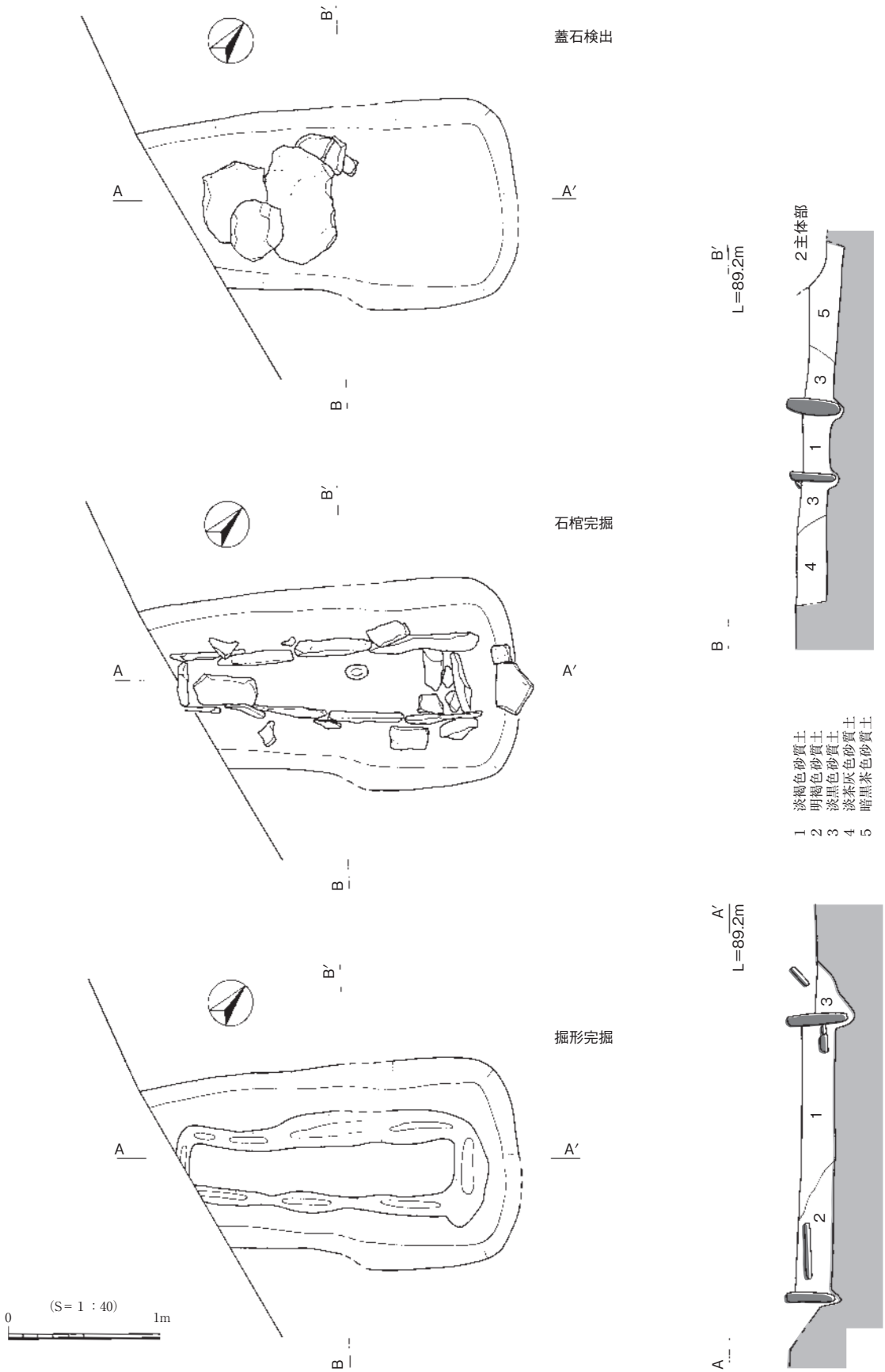
１主体部　73号墳の墳丘の、ほぼ中央に位置する石棺墓である。表土を除去するとすぐに南側の蓋石が現れたが、北側は蓋石が取り除かれていたため、既に調査前に盗掘されていることが判明した。石棺内の埋土は、褐色系の砂質土が堆積しており、盗掘後に再堆積したものと考えられる。石棺の長側板は、長さ40～70cmの平石を４枚用いて構築されており、両小口部には幅30cm～40cm程の平石が用いられている。石棺の規模は、内法で長辺1.8m、短辺30～45cm、深さ25cmを測る。石棺の主軸は、Ｅ－36°－Ｎである。棺内は、北東部に平石を二つ「V」字形に置いていることから、枕石と考えられる。墓壙の掘形は、南側が調査区外に伸びるため不明だが、長さは2.5m以上、幅は1.1～1.4m、深さは20cm以上と考えられる。墓壙底面の石棺材を固定する掘形は、「ロ」字形を呈する。この主体部からの出土遺物は、見られなかった。

２主体部　１主体部の北西部で検出した石棺である。石棺の蓋石は、一辺が50～90cm程の平石を三枚用いて蓋としており、更に合わせ口の上部に平石を置いて閉塞されている。石棺内の埋土は、しまりのない灰色系の砂質土が堆積しているため、雨水の影響で棺内に流入したものと考えられる。

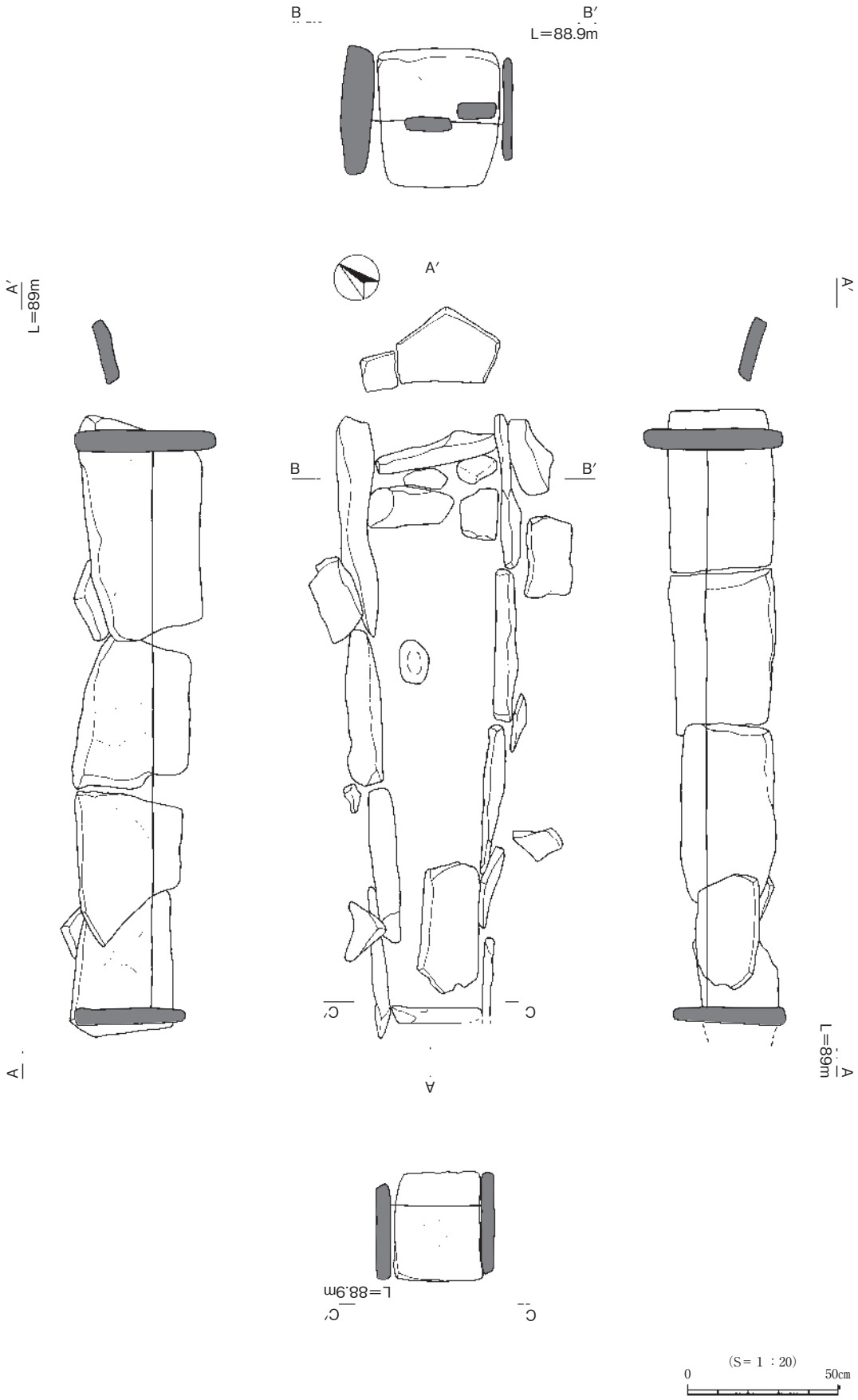
石棺の規模は、内法が長辺1.4m、短辺32～40cm、深さ35cmを測る。石棺の軸線は、Ｓ－17°－Ｎである。棺内の東側には、３つの平石を「V」字形に立てかけて枕石としている。墓壙の掘形は、長さ３m、幅２m、深さ40cmを測り、底面の中央に「ロ」字形の掘り込みを巡らせて、石棺材を固定させる溝が巡っている。ここから出土した遺物は、枕石の直上から人骨の頭部片が２点と、石棺外の北側、



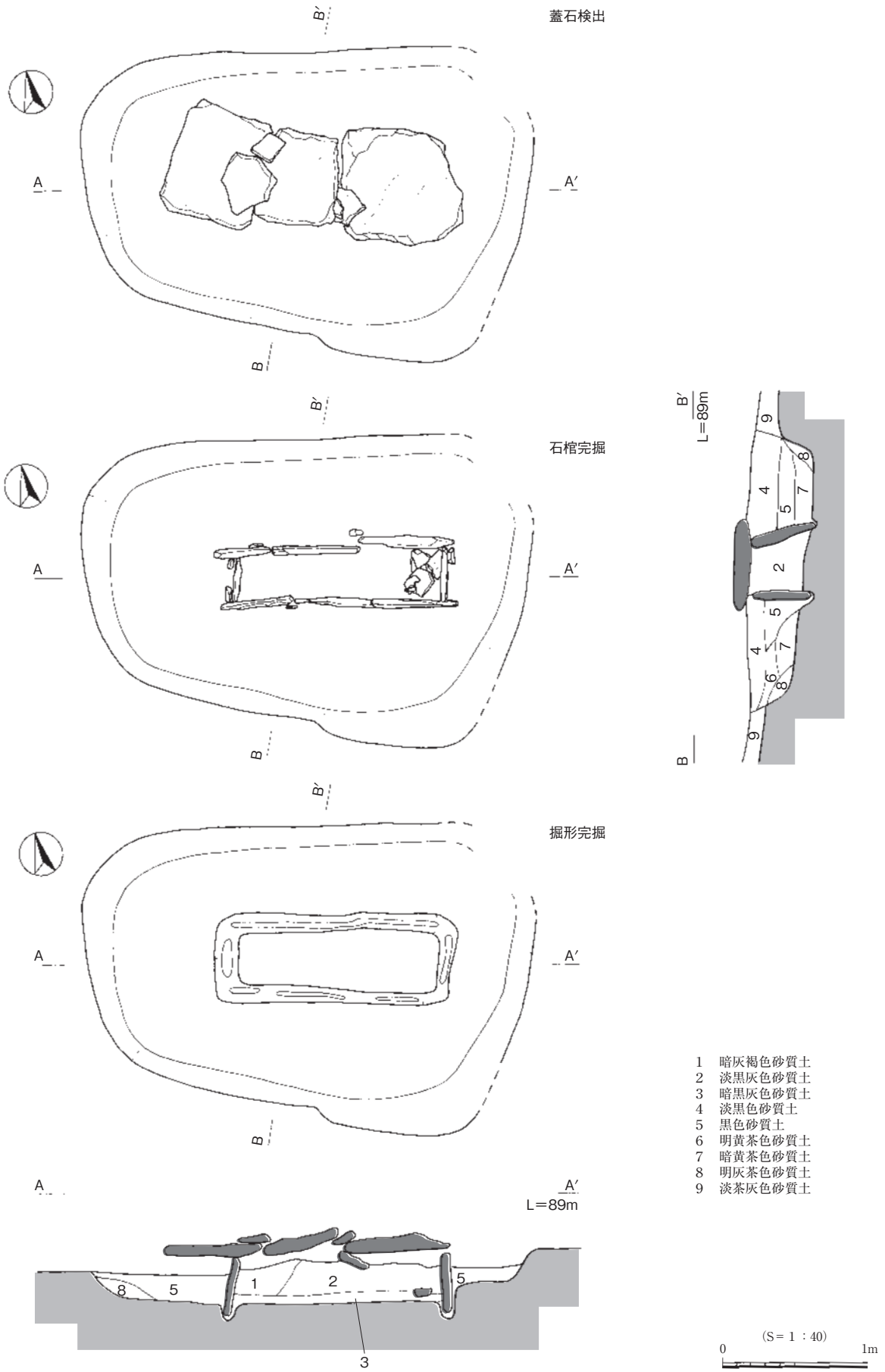
第32図　越敷山73号墳　平・断面図



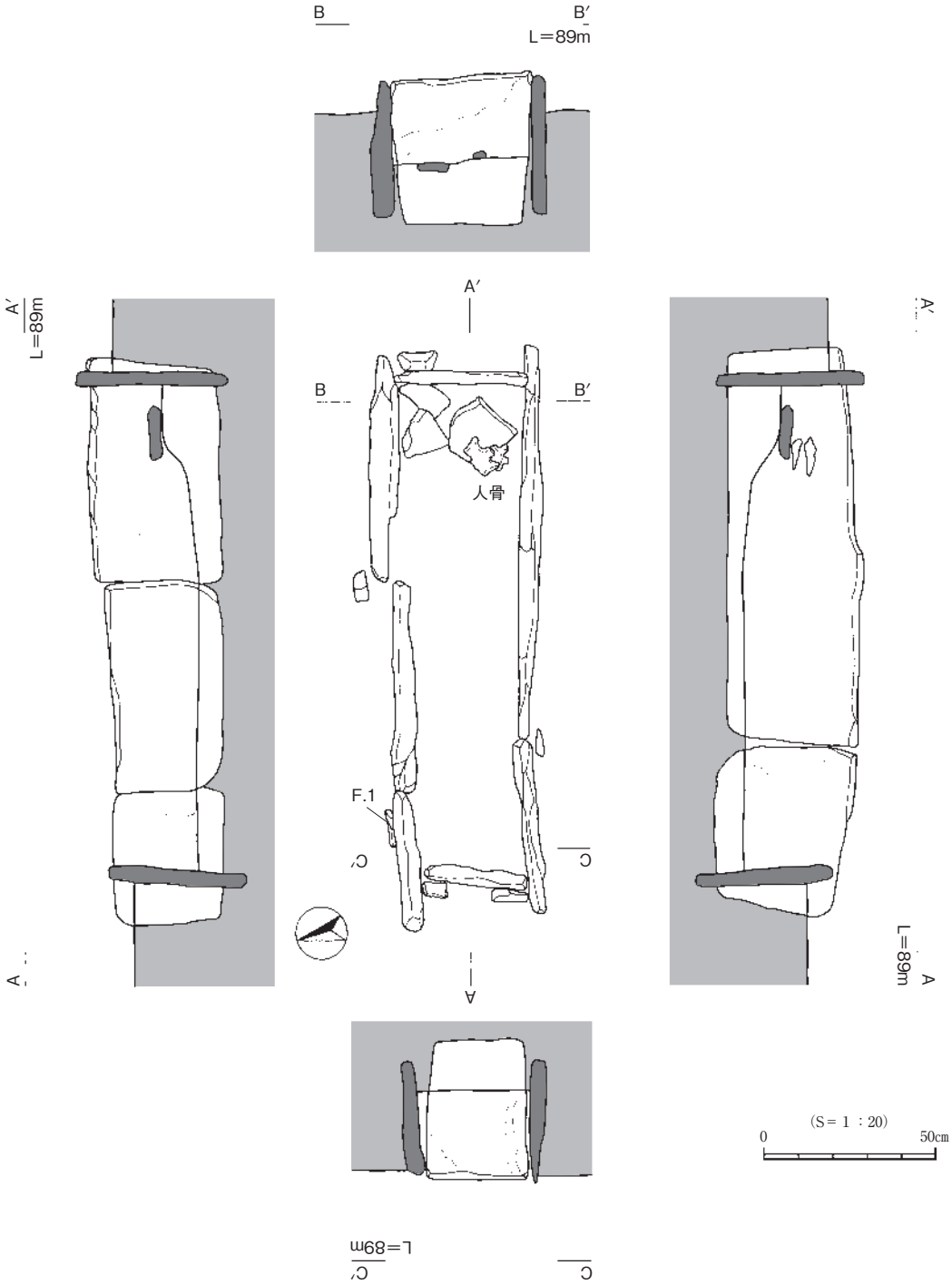
第33図　越敷山73号墳１主体部　遺構図①



第34図　越敷山73号墳１主体部　遺構図②



第35図　越敷山73号墳２主体部　遺構図①



第36図　越敷山73号墳２主体部　遺構図②

長側板の近くから鉄製の鉾が、鉾先を西に向けた状態で出土した。また、石棺の周辺で石突も探したが、見つからなかった。

１主体部との前後関係については、主体部の切り合いが見られなかったため不明であるが、２主体部の方が、墳丘の北側に墓壙か偏っているため、先行する埋葬施設（１主体部）を避けて造られた可能性があると考えられる。

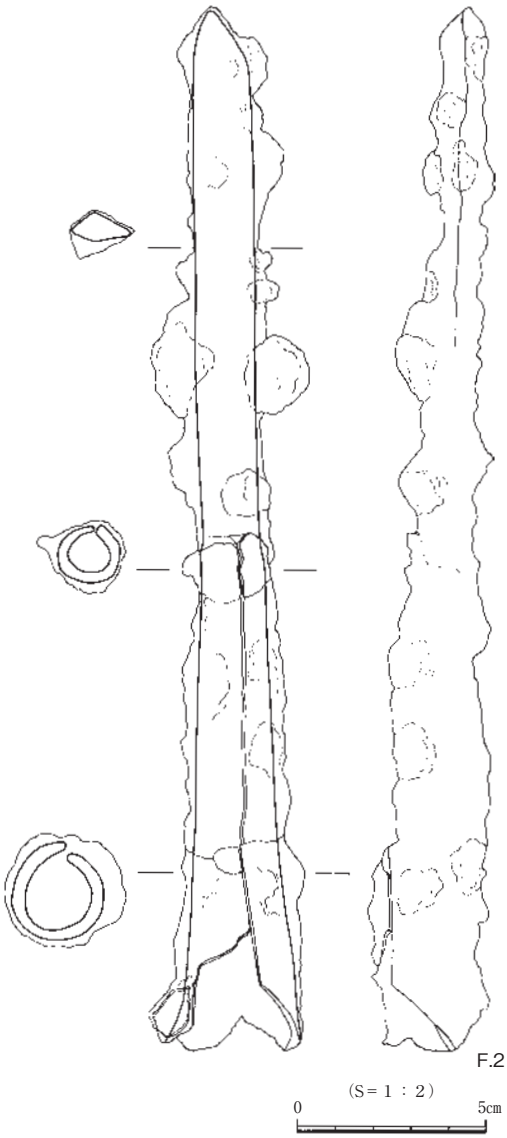
石棺墓２

石棺墓２は、越敷山73号墳の東部に位置する。73号墳の周溝の延長線よりも外側に配置されていることから、73号墳に対して従属的に配置された埋葬施設と考えられる。石棺については、両小口部にのみ平石を置き、長側部には石材が用いられていない。このため、石棺墓と木棺墓の折衷的な埋葬施設と考えられる。また、蓋については石蓋を置いた痕跡が見られないことと、棺内の埋土がほぼ淡茶褐色砂質土のみであることから、木蓋も使用されていないと考えられる。枕石については、西側の小口板に沿って、小型の平石が一個置かれていることから、これが枕石であろう。このため、この主体部は73号墳の方向に頭を向けて葬られていると考えられる。埋葬施設の軸線は、E－18°－Nである。墓壙の掘形は、長辺2.5m、短辺60～75cm、深さ60cmである。また、棺床には小口板を埋め込む穴は掘られていなかった。この埋葬施設から出土した遺物は、土師器の壺が１点、底部穿孔されたものが出土している。

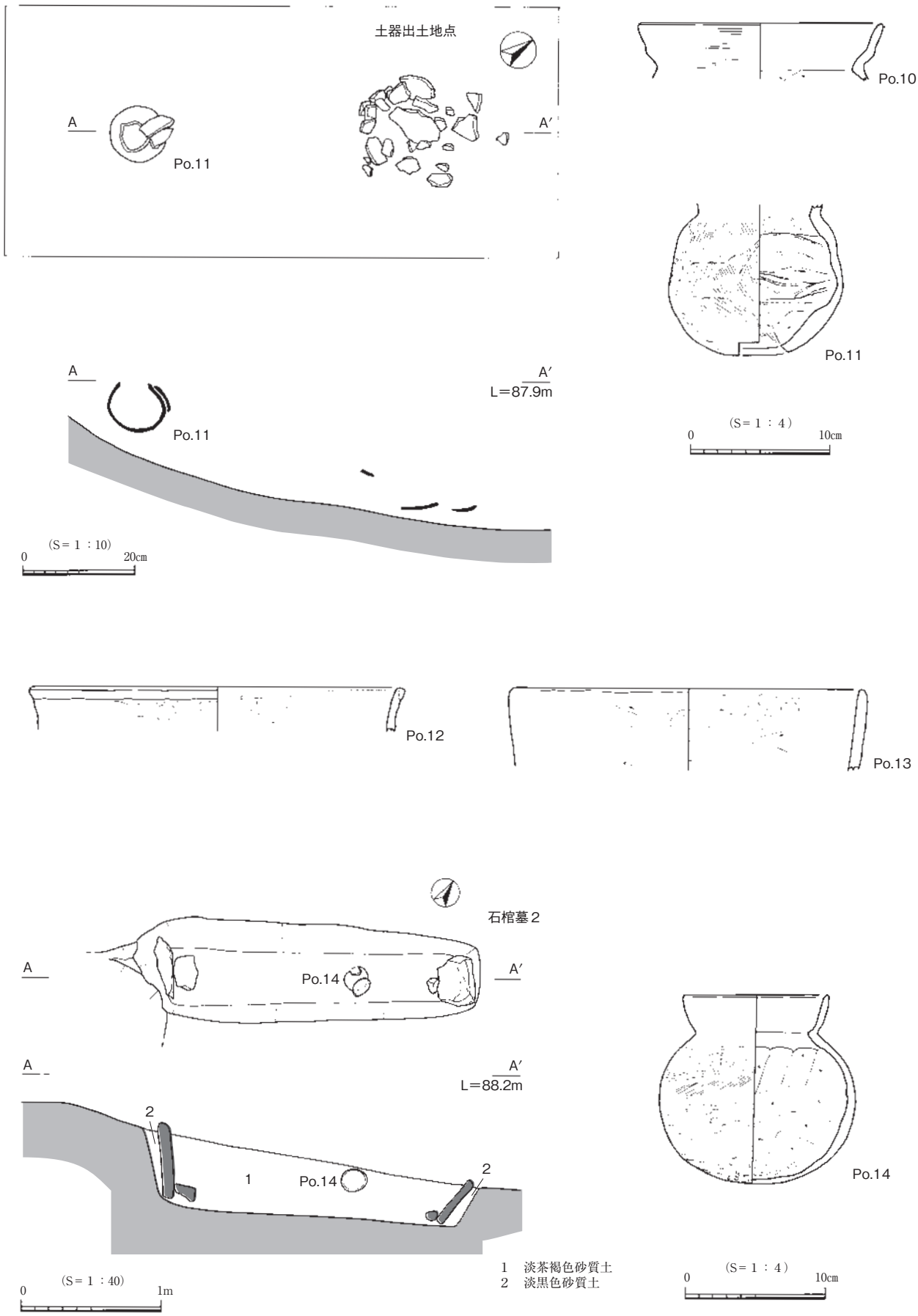
出土遺物　越敷山73号墳から出土した遺物は、２主体部から出土した鉄製鉾のほかにも、石棺墓２から出土した土師器壺、墳丘北側の周溝に相当する位置から出土した土師器壺などがある。

F.1は、長さ27.6cmの鉄製鉾である。身部は鎬造りであるが、袋部との境に明瞭な関は見られない。袋部は断面形が円形を呈する。

Po.10は、73号墳の東側周溝内から出土した、土師器甕の口縁部片である。内外面ともナデ調整されており、口縁は複合口縁状に短く屈曲している。Po.11は、73号墳の墳丘北側から出土した土師器の壺である。外面はハケ調整後にナデ内面は粗くヘラケズリされている。底部には、焼成後に３cm程の穿孔が行われており、口縁部も打ち欠かれている。Po.12は、73号墳の２主体部の埋土中から出土した、口縁端部が短く屈曲する深鉢の口縁部片である。Po.13は、73号墳の墳丘北側の表土掘削中に出土した、内面をナデ、外面を条痕調整する深鉢の口縁部片である。Po.14は、石棺墓２の棺内上層から出土した土師器の壺である。色調は淡橙褐色を呈し、口径は10cm程度で、器高は13.7cmである。器壁の調整は、外面をハケ調整し、内面はヘラケズリされる。口縁と底部の一部が破損しているため、底部穿孔が行われているかどうかはわからなかった。



第37図　越敷山73号墳２主体部　遺物図



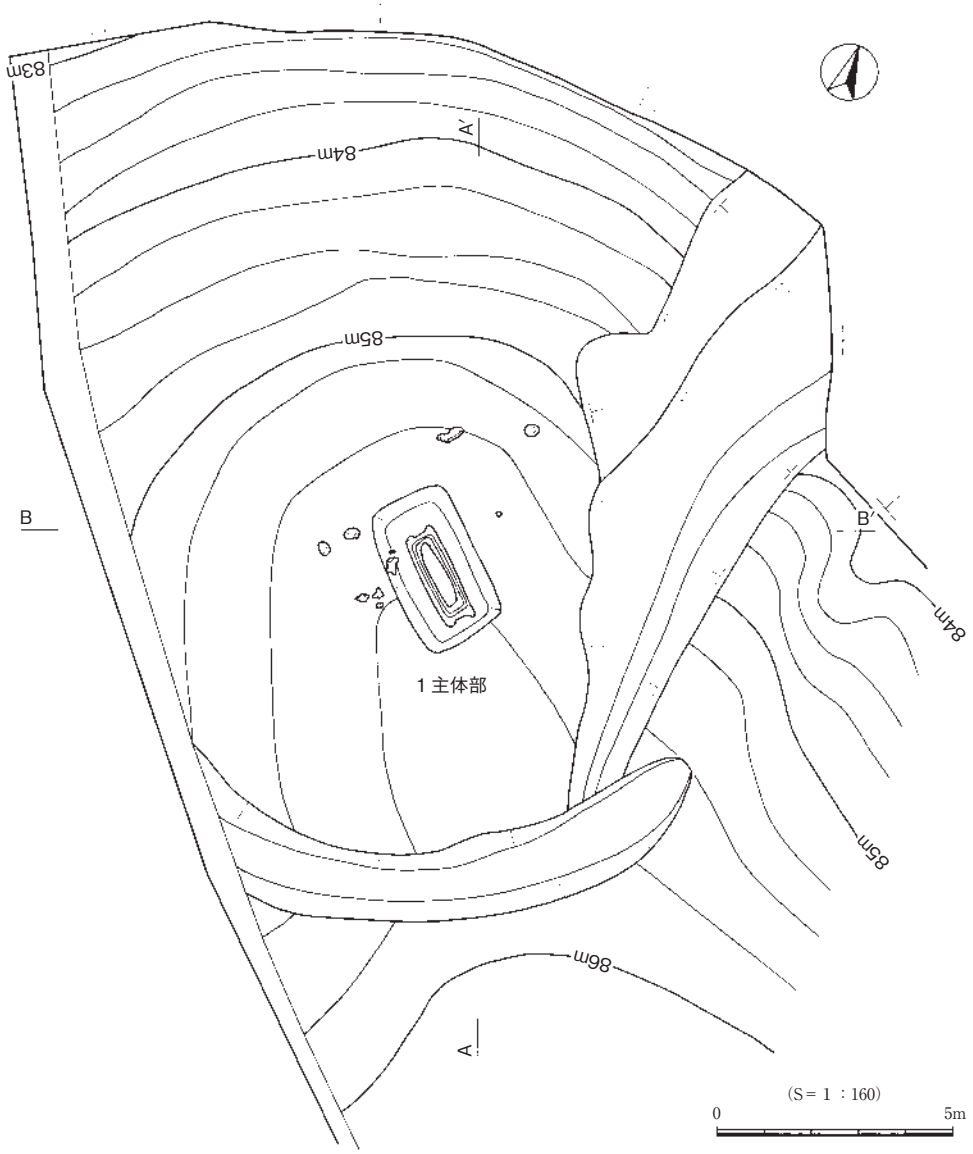
第38図　越敷山73号墳、石棺墓２　遺構・遺物図

越敷山74号墳（第39～43図）

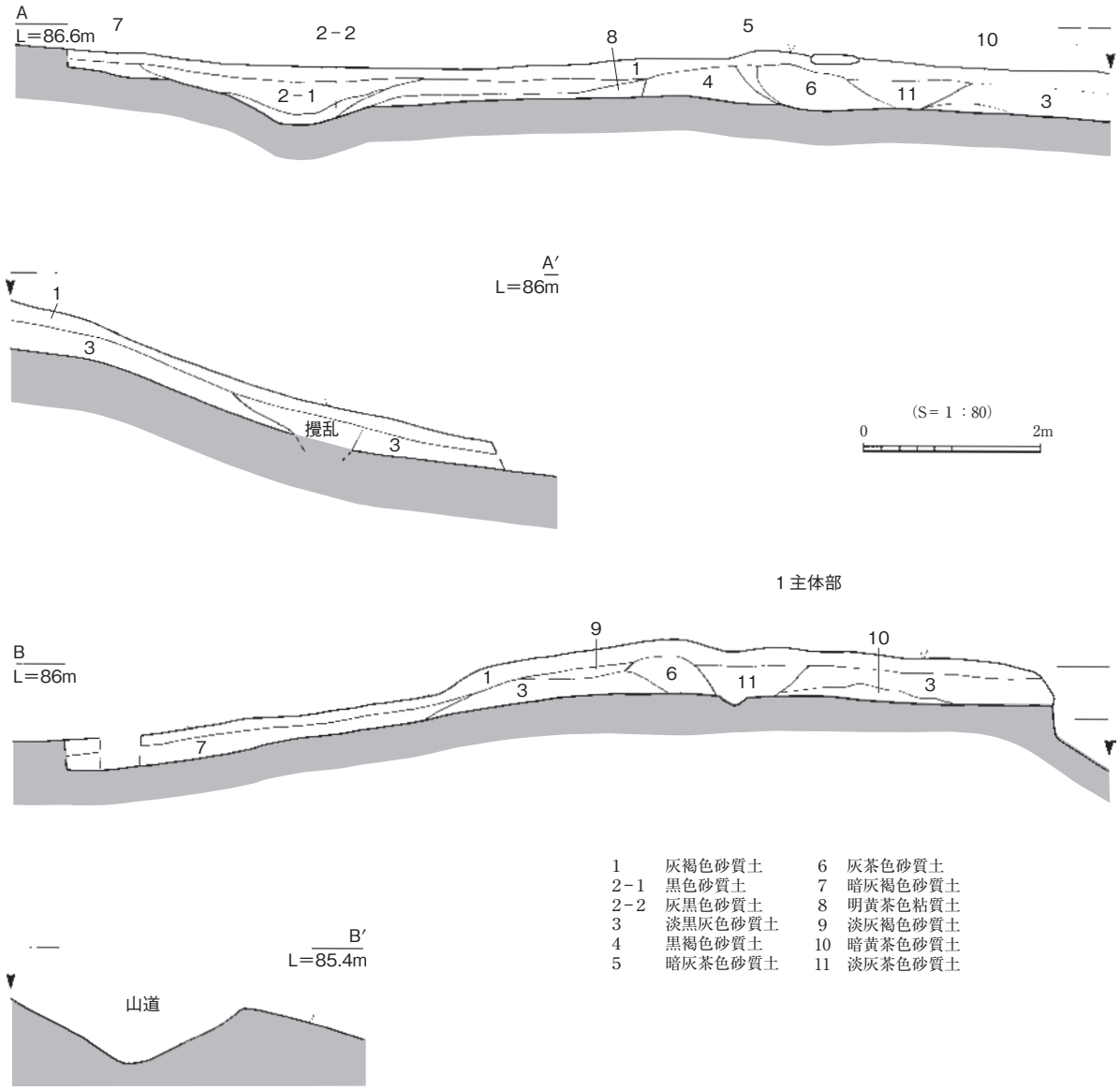
越敷山74号墳は、Ｃ区の北西部丘陵の先端に位置しており、調査前の標高は86mである。古墳のすぐ北側は崖状の地形で、佐野川用水が西へ向かって流れている。

墳丘・周溝　越敷山74号墳の墳丘は、調査前には直径15m、高さ１mほどの円墳と見られており、南東部には数cm程度の窪みが巡ることから、周溝の存在が推測された。墳丘の東側は、調査前から丘陵を登るための山道が造られているため、墳丘の一部が削り取られている状況であった。

古墳の墳丘上では、表土を20cmほど除去すると、すぐに石棺の蓋石と見られる礫群と石棺の掘形を検出した。このため、古墳の墳丘はかなり削平されていると考えられる。墳丘の盛土は、40cmほど盛られており、古墳の中心部には石棺の掘形が掘られている。周溝は、保存状態の良い南側で、幅３m、深さ50cmほどの規模を測るが、古墳の北側は斜面に向かってなだらかに下っているため、墳丘の規模がはっきりしないが、直径10m、高さ60cm程の円墳と推測される。



第39図　越敷山74号墳　平面図

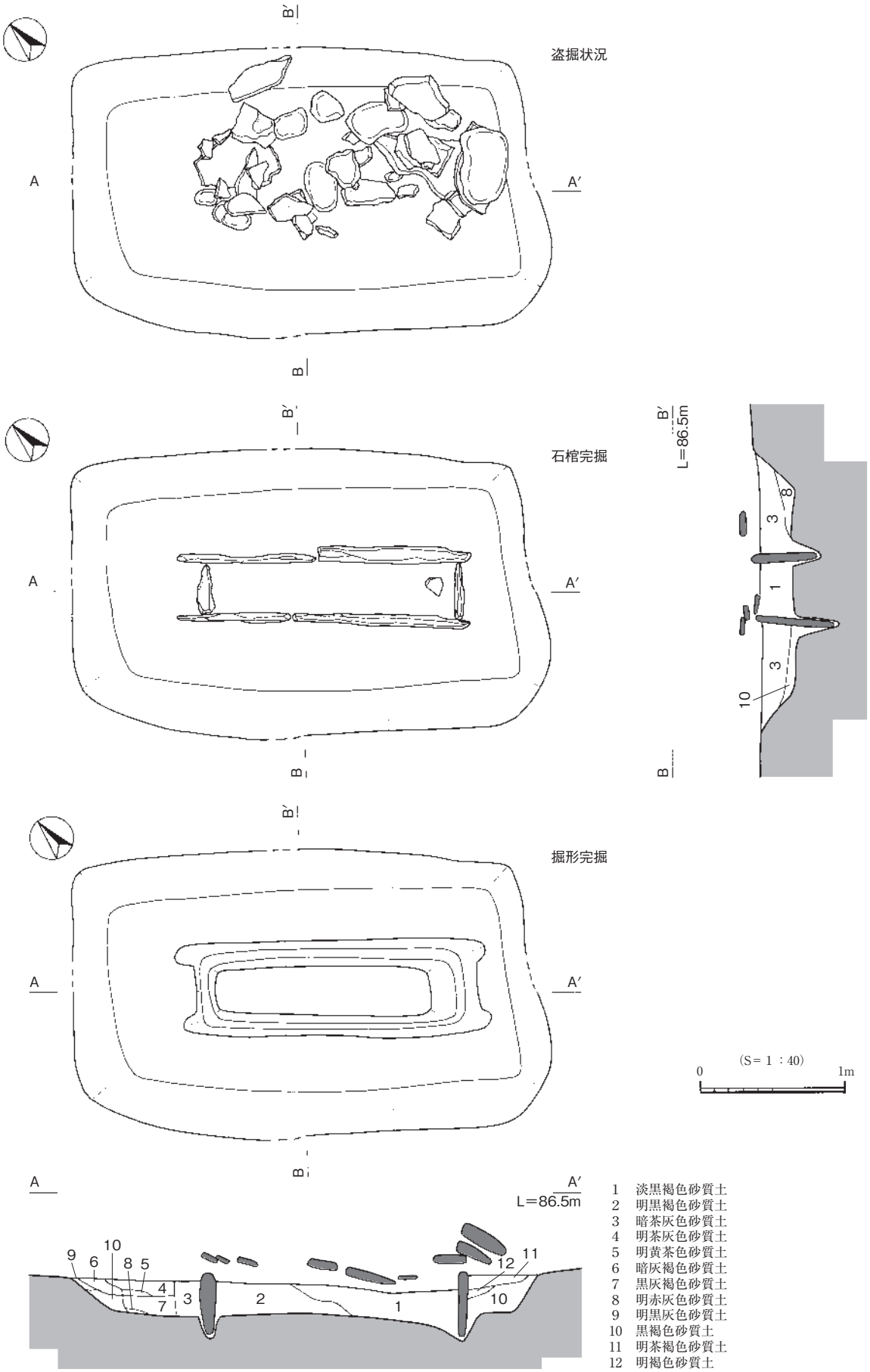


第40図　越敷山74号墳　断面図

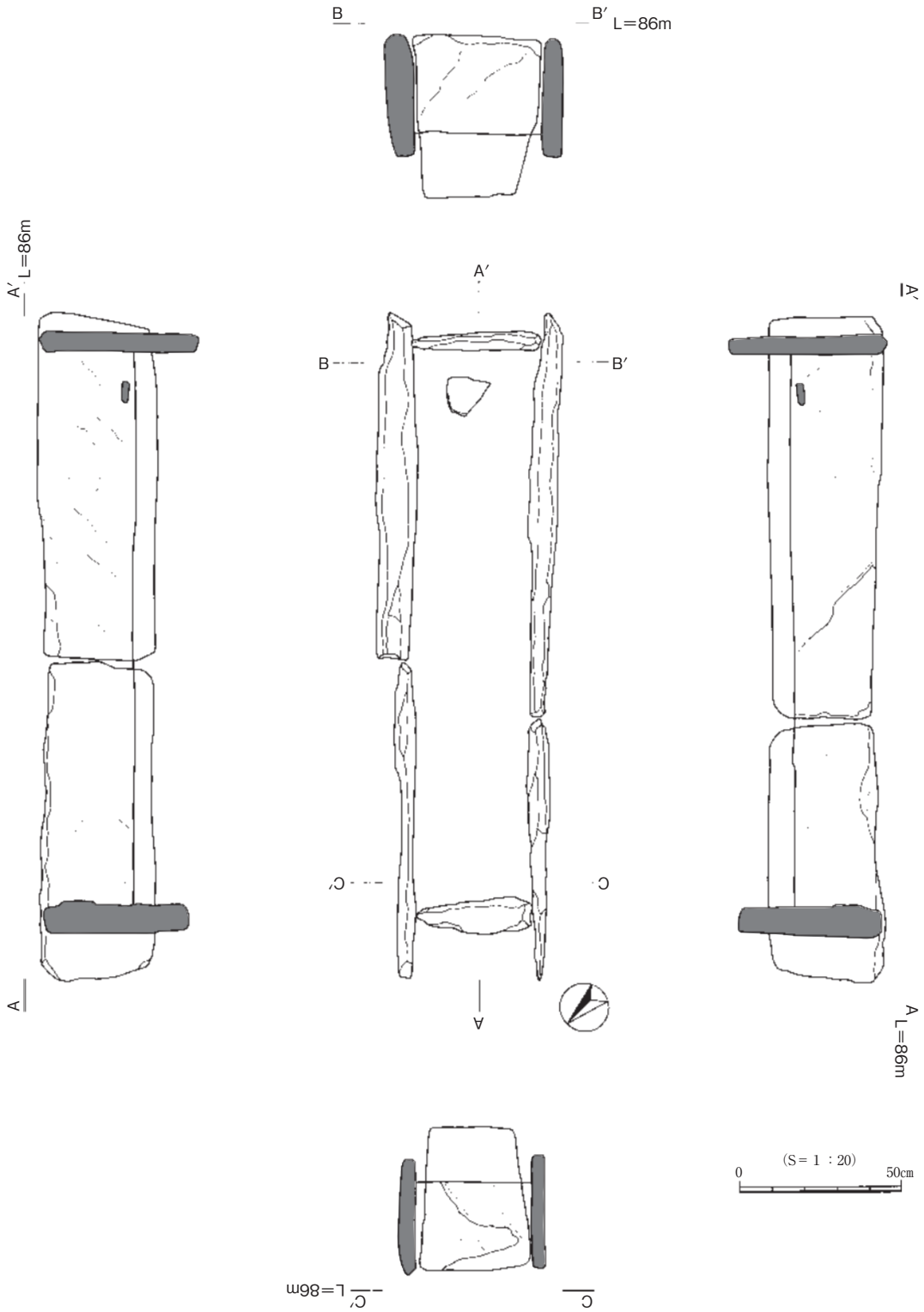
埋葬施設

１主体部　表土を除去すると、すぐに石棺の蓋石と見られる礫群が露出した。使用されている石は、平石のほかにも角が丸い平らな河原石が用いられており、これまでに越敷山古墳群で見つかった石棺と比較すると、やや異質な印象を受ける。蓋石の出土状況は、明らかに割れた石などが石棺の棺内に向かって詰め込まれたような状況を呈していることから、盗掘を受けた後に石棺の石材が棺内に投げ込まれた状態になっていると推察した。

石棺の石材は、長さ1.6～2.3mの長方形の石材を４個使用して長側板とし、両小口部には幅70～80cmの平石が、深く差し込まれて固定されている。石棺の東南部の底面には石が１個置かれていることから、枕石があったと考えられる。なお、枕石は通常２個使用されることが多いと考えられるが、盗掘時に動かされたものと考えた。主軸の方位は、W－48°－Nである。

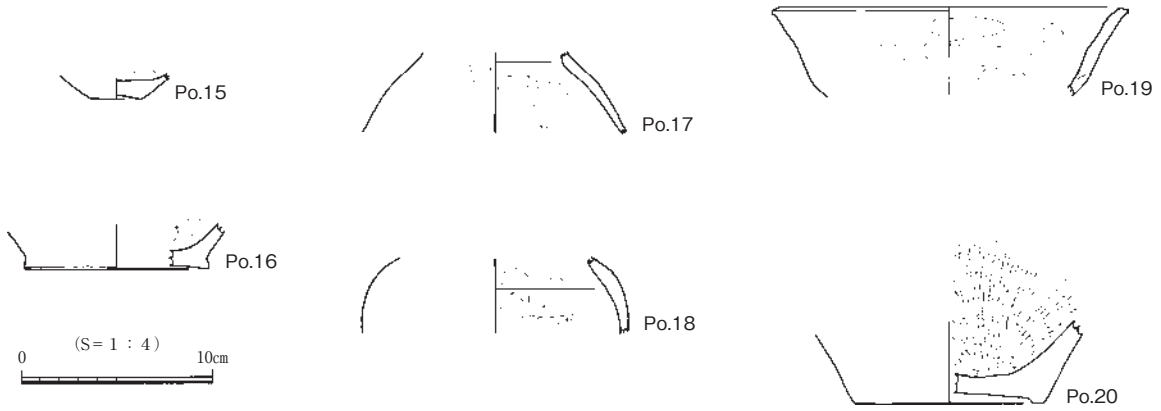


第41図　越敷山74号墳１主体部　遺構図①



第42図　越敷山74号墳１主体部　遺構図②

出土遺物　越敷山74号墳から出土した遺物は、主体部内の攪乱土（Po. 15・16）や、周溝内（Po. 17・18）、墳丘上の表土（Po. 19・20）から出土した土器や陶器の破片がある。Po. 15は、弥生土器の底部か、もしくは土師器高坏の坏底部片か。Po. 16は、明褐色を呈する弥生土器の底部片である。Po. 17は、内外面ともナデ調整する土師器壺の肩部と見られるが、全体的に薄手のため、長頸壺の口縁部の可能性もある。Po. 18は、外面をナデ、内面をヘラケズリ調整する土師器壺の肩部である。Po. 19は、内外面とも粗いナデの痕跡を残す、口径18cm程の浅鉢である。Po. 20は、全面に淡橙褐色の鉄釉を掛



第43図　越敷山74号墳　出土遺物図

ける陶器の擂鉢で、内面には擂目が密に施され、外面はヘラケズリする。高台は浅く削り出し、トビカンナの痕が残る。近世の須佐焼の擂鉢と考えられる。

第３節　古墳以外の調査（第44・45図）

陥穴20

石棺墓２によって、掘形の一部が切られている楕円形の土坑である。土坑の規模は、検出面で長径1.1m、短径0.8m、深さ1.3mを測る。土坑の底面には、直径20cm、深さ20cmの小穴が掘られている。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

陥穴21

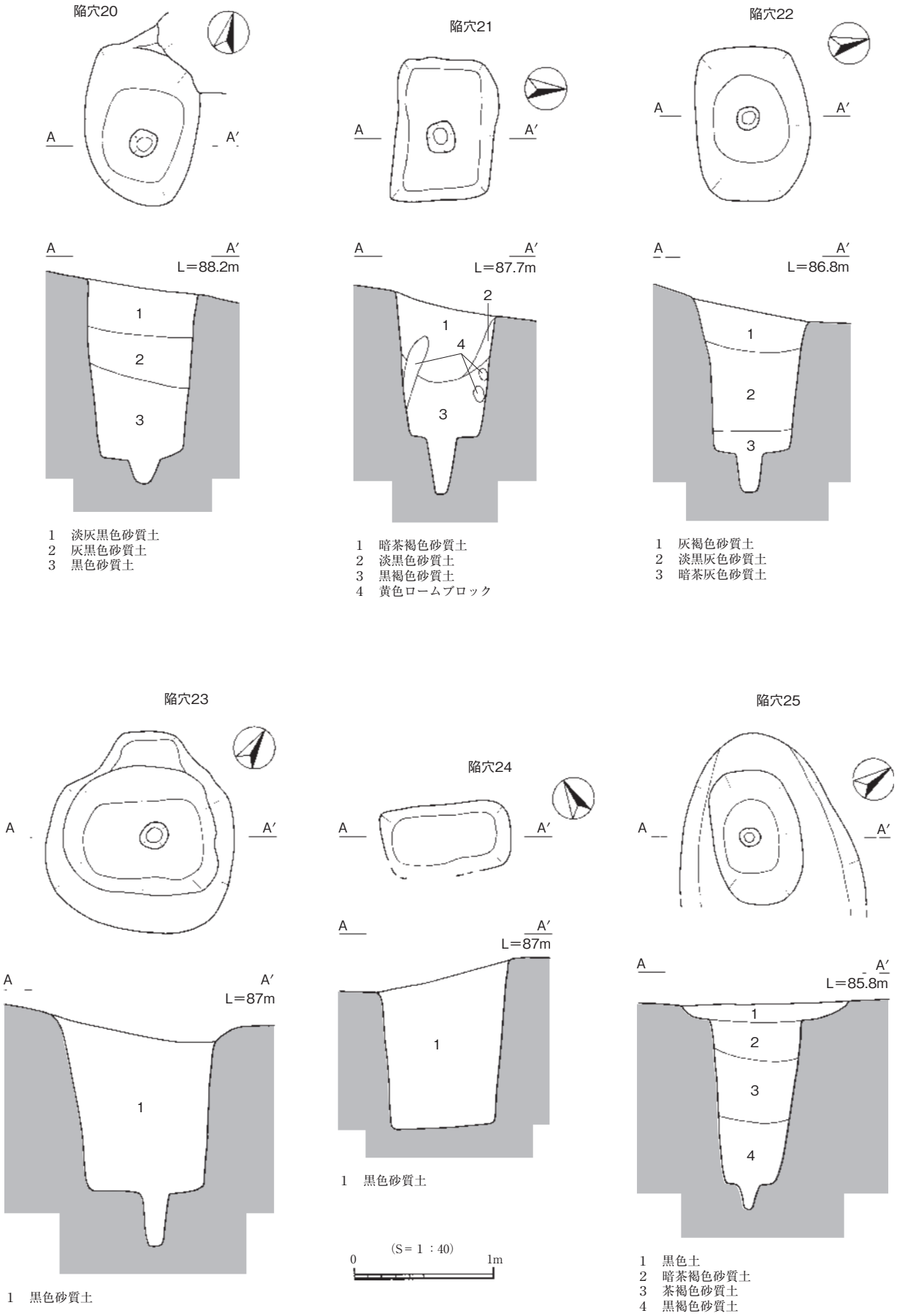
越敷山73号墳の北に位置する長方形の土坑である。土坑の規模は、長辺１m、短辺0.7mで、深さは1.1mを測る。土坑の底面中央には、直径20cm、深さ50cmの小穴が掘られている。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

陥穴22

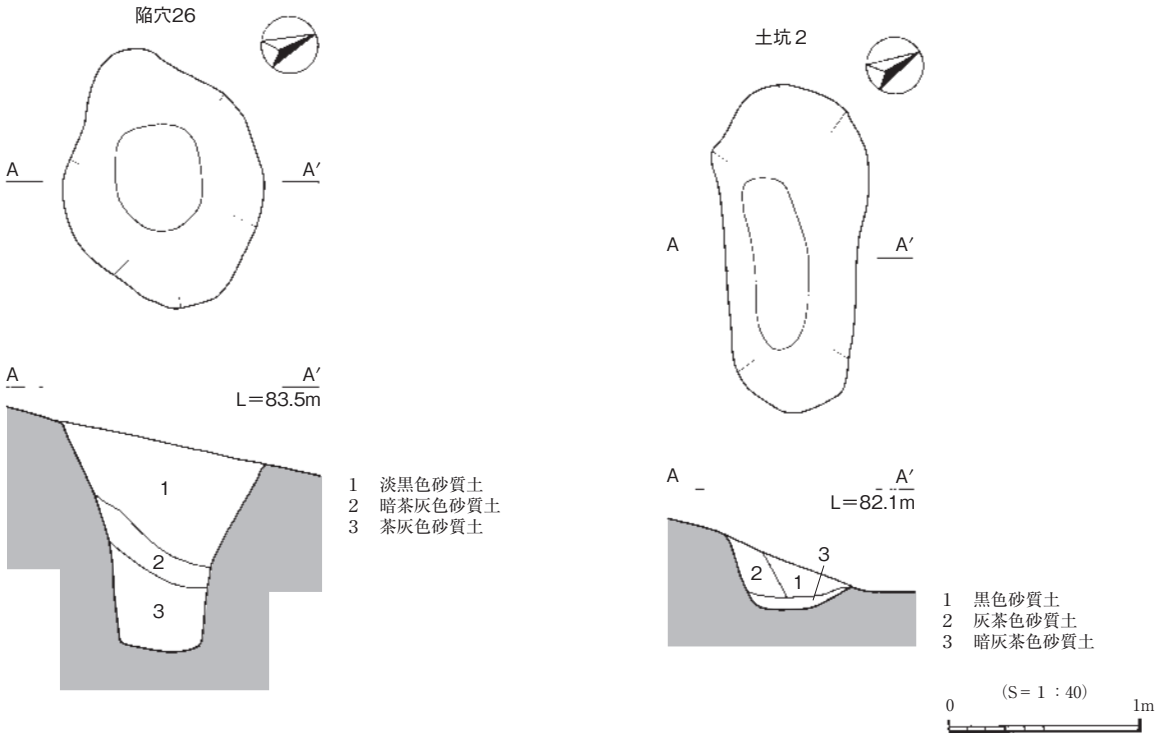
越敷山73号墳の北、標高86.5m付近に位置する隅丸方形の土坑である。土坑の規模は、長辺1.1m、短辺0.8m、深さ1.1mを測る。土坑の底面中央には直径15cm、深さ25cmの小穴が掘られている。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

陥穴23

越敷山73号墳の北、標高87m付近に位置する隅丸方形の土坑である。土坑の規模は、長辺1.4m、短辺1.2m程度、深さ1.2mを測る。土坑の底面中央には直径20cm、深さ40cmの小穴が掘られている。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。



第44図　陷穴20～25　遺構図



第45図　陷穴26・土坑２　遺構図

陥穴24

越敷山73号墳の北西部、標高87m付近で検出した長方形の土坑である。土坑の規模は、長辺0.9m、深さは1.2mである。短辺は掘形が調査区外に伸びるため不明だが、0.6m程度と推測される。土坑の底面には小穴は見られなかったが、形態的な特徴から陥穴と考えられる。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

陥穴25

越敷山74号墳の周溝内で検出した楕円形の土坑である。長径１m、短径0.6mで、深さは周溝の底面から1.2m程度残存している。土坑の底面には直径15㎝、深さ20㎝の小穴が掘られている。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

陥穴26

越敷山74号墳の東、標高85m付近で検出した菱型に近い円形土坑である。規模は、長径1.4m、短径1.1mで、深さは1.2mである。土坑の底面には、小穴は見られなかったが、形態的な特徴から陥穴と考えられる。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

土坑２

Ｃ区の北東部の斜面、標高84m付近で検出した長楕円形の土坑である。遺構の上面の掘形は、大半が流出していると考えられるが、検出面での土坑の規模は、長径1.7m、短径0.7mを測り、深さは50㎝程度が残存している。土坑内の埋土は３層に分かれており、底面には暗灰茶色の砂質土が堆積している。土坑の底面は、長径90㎝、短径30㎝の範囲がフラットになっており、土壙墓の可能性が考えられるが、副葬品や枕石が確認できなかったことから、性格不明の土坑とした。

第６章　金廻家ノ上遺跡の調査

第１節　調査区の概要と層位

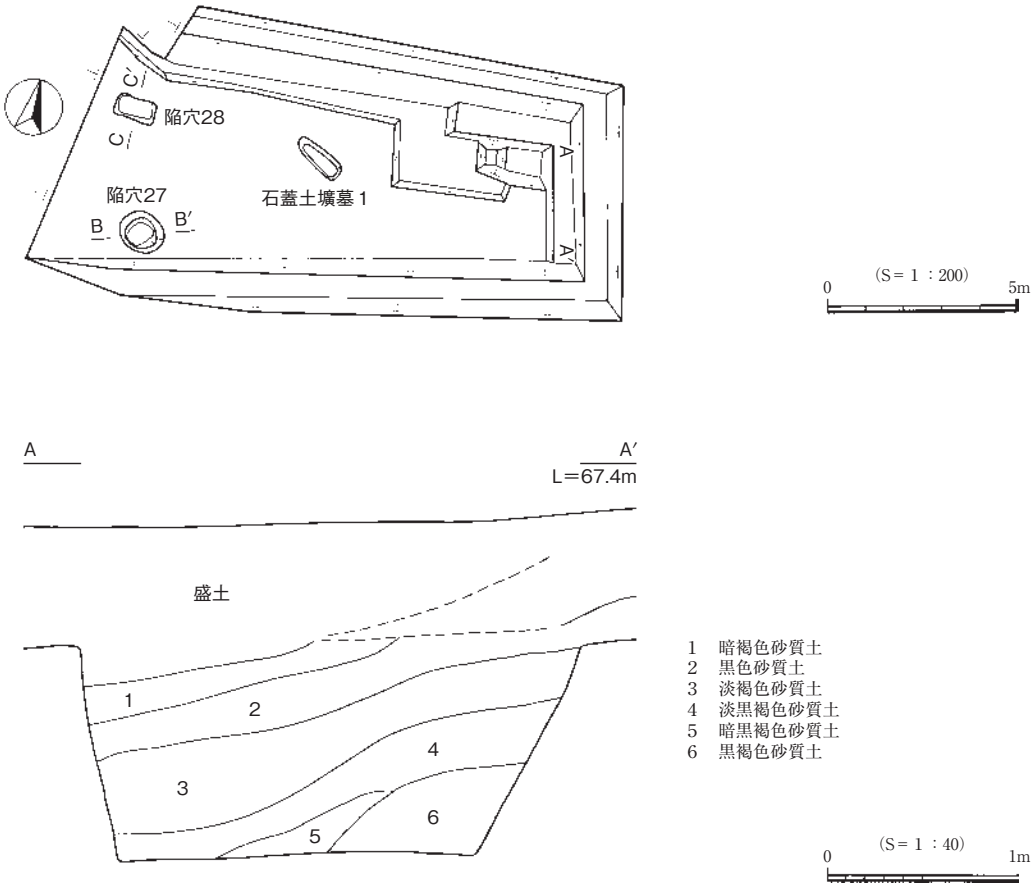
金廻家ノ上遺跡は、金廻家ノ上ノ内遺跡の北側、佐野川用水の北に位置しており、現地は緩やかな平坦地が広がっていた。平成23年に実施された試掘調査では、弥生時代の土器がほぼ完形のまま出土したことから、この地点には何らかの遺構が存在するものと考えられていた。

調査区の堆積は、上層に造成盛土が0.5～１mほど乗せられており、佐野川用水の開削と、管理道路の設置に伴い置かれたものと考えられる。この造成盛土の下には旧表土（１層）が残存しており、その下層の２層上面が第１遺構面、３層上面が第２遺構面、４層上面が第３遺構面となる。

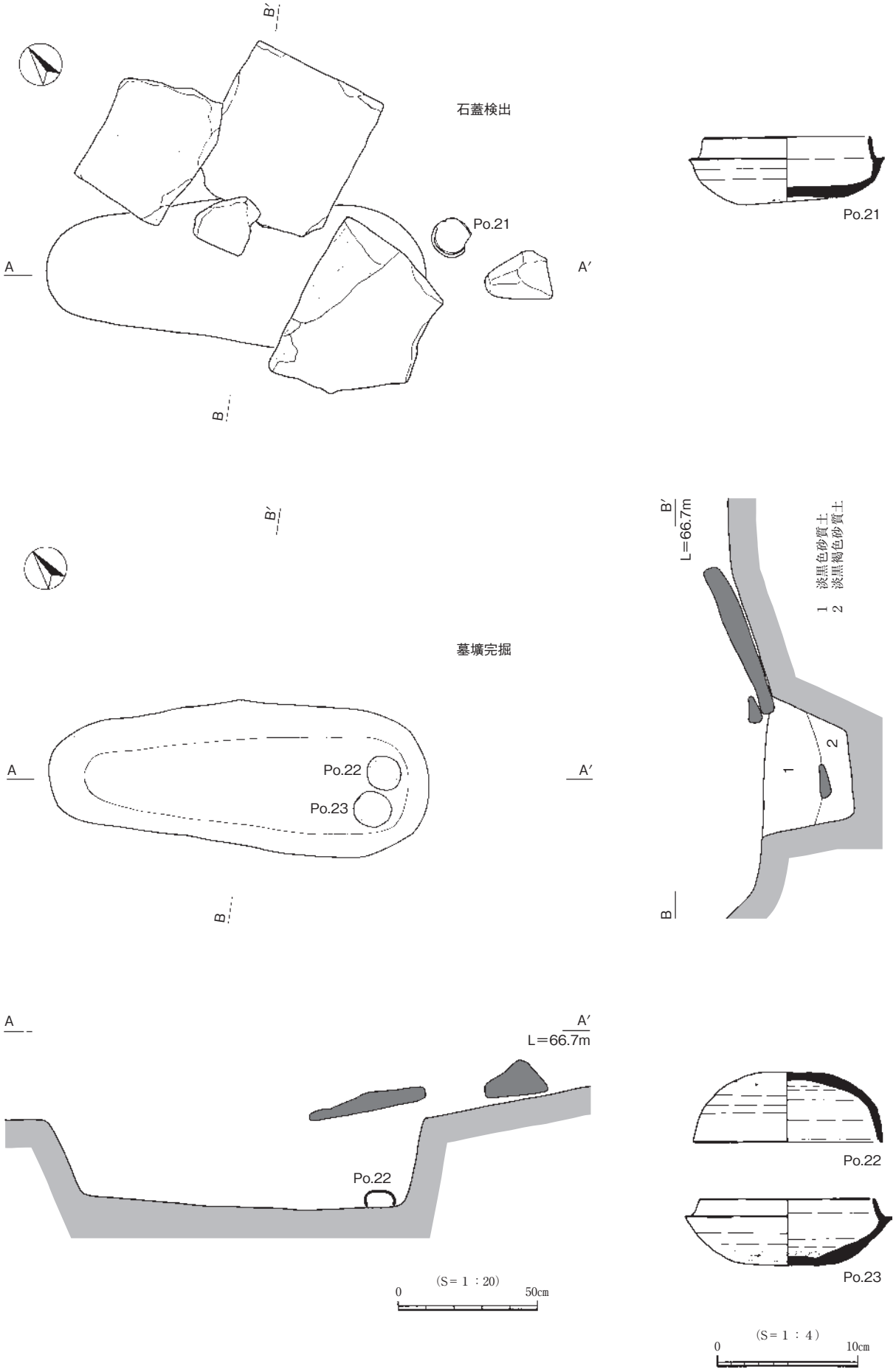
第１遺構面は、調査区の西側から東側に向かって傾斜しており、調査区の西側半分は表土直下で地山となっているため２層は残っていなかった。この地山面で陥穴を２基、東側に残存している２層上面で石蓋土壙墓１基を検出した。

第２遺構面では、３層の上面で土器集中１基を検出した。伯耆町教育委員会が実施した試掘調査で出土した弥生土器と比べると、破片が広範囲に散乱していることから、土坑内に完形で置かれたような状況は確認できなかった。

第３遺構面では、明瞭な遺構は確認することができなかったが、第３遺構面を被覆する３層中から縄紋時代後～晩期のものと見られる土器片と磨製石斧、凹石が出土した。



第46図　金廻家ノ上遺跡第１遺構面　平・断面図



第47図　石蓋土壙墓１　遺構・遺物図

第２節　古墳の調査

古墳の調査では、１層を除去した２層の上面で、四角形に整形された石材が三個置かれている状況を確認したため、石棺墓か石蓋土壙墓が存在するものと考えられた。このため、石材の周辺を精査したところ、土壙墓の掘形と須恵器の坏身１点を検出した。

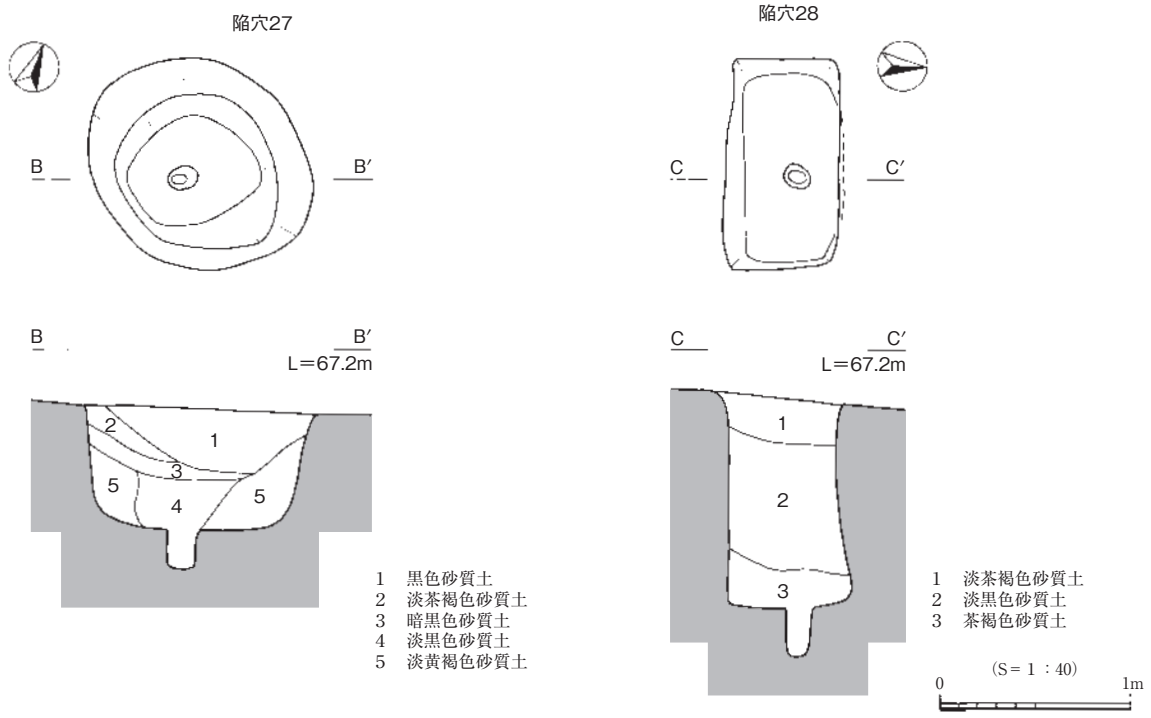
石蓋土壙墓１（第47図）

石蓋土壙墓１は、墓壙の検出面上に石材３個と須恵器の坏身１点があり、このうち二つの石材は墓壙の上面から東側へひっくり返したような状況で出土している。このことから、この主体部は既に盗掘を受けているものと判断されたが、墓壙の底面には須恵器転用枕と見られる、須恵器の坏身と蓋が口縁部を下にした状態で置かれていた。このような状況から、盗掘者は、蓋石をひっくり返しただけで、内部を攪乱せずに放置したものと考えられる。

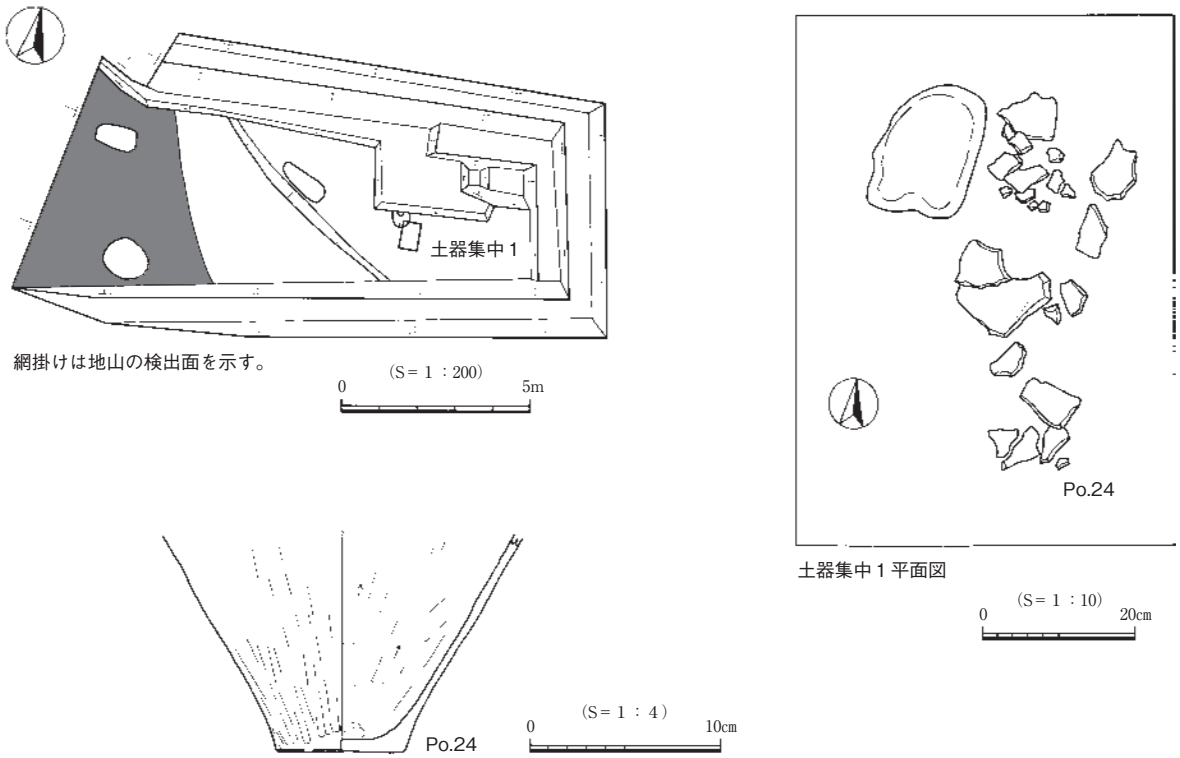
蓋石は、中央のものが70cm×55cmの方形を呈し、厚さは18cmほどである。頭部、足部側に用いられたものは台形状を呈しており、墓壙をぴったり閉塞できるように形が整えられている。

墓壙の主軸は、W－50°－Nである。墓壙の規模は、検出面で長辺135cm、頭部と推測される須恵器枕側は50cm、足部で40cmを測る。墓壙底面の規模は、長さ115cm、頭部側で35cmである。

出土遺物　石蓋土壙墓１から出土した遺物は、須恵器の坏身・坏蓋３点のみである。Po.21は口径11.8cmの坏身で、墓壙検出面の東側に口縁部を上に向けた状態で出土した。Po.22は東側の枕として用いられており、口径は歪みがあるためはっきりしないが、13cm前後と推測される。この２点は口縁部の歪み、胎土、焼成とも似通っており、セットとして焼かれたものと考えられる。Po.23は西側の枕として使用されており、口径は12.4cm、器高は4.8cmである。上記２点の須恵器と比べると、焼成不良であるが、底面には不鮮明なヘラ記号状の沈線が残る。



第48図　陷穴27・28　遺構図



第49図　金廻家ノ上遺跡第２遺構面　遺構・遺物図

第３節　古墳以外の調査

古墳以外の遺構は、調査区西側の地山面で陥穴を２基と、第２遺構面で土器片が集中して出土する地点を確認した。

陥穴27（第48図）

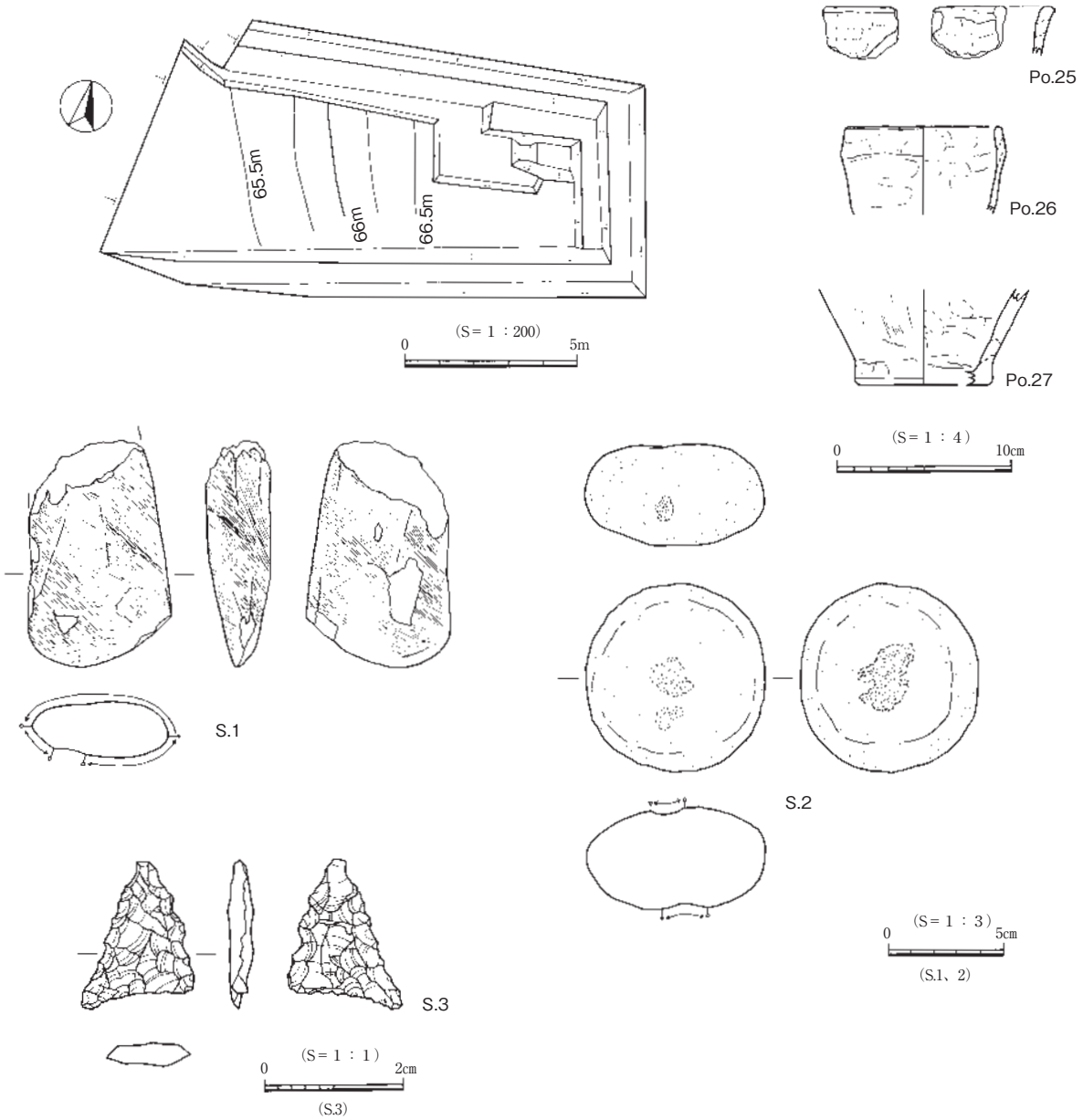
検出面の長径1.3m、短径1.1mの円形土坑である。土坑の内部は黒色の砂質土が堆積しており、土坑の底面には直径16cm、深さ20cmの小穴が掘られている。形態的な特徴から陥穴と考えられる。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

陥穴28（第48図）

検出面の規模が、長辺1.1m、短辺0.6mの長方形土坑である。遺構内の埋土は三層に分かれており、底面には直径12cm、深さ25cmの小穴が掘られている。形態的な特徴から陥穴と考えられる。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

土器集中１（第49図）

第２遺構面の掘り下げ中に確認した、土器片が集中する地点である。土器は、標高66.5m付近でフラットに分布しており、北西側に長さ28cm、幅13cmの丸い大石が置かれている。この石には、使用痕は見られず、石皿として使用されたものではないと判断される。ここから出土した土器（Po.24）は、やや薄手の弥生土器の甕か壺の破片と見られるが、口縁部が出土していないため断定できなかった。



第50図　金廻家ノ上遺跡第３遺構面　遺構・遺物図

出土遺物　Po. 24は、弥生土器の底部である。外面には黒斑が残り、内面をケズリ、外面をミガキ調整する。

第４節　遺構に伴わない遺物

遺構に伴わない遺物は、２層と３層の包含層中から土器と石器が出土した。Po. 25は、口縁部が外反する鉢型の土器で、縄紋時代後・晩期のものと見られる。Po. 26は小形の浅鉢で、内外面をナデ調整するPo. 27は深鉢の底部で、内面は粗くナデ調整されているが、外面を丁寧にナデ調整する。S. 1は玄武岩製の磨製石斧である。S. 2は、両面に使用痕の残るデイサイト製の凹石。S. 3は、黒曜石製の石鏃である。

第７章　総括

第１節　越敷山古墳群（金廻地区）の調査成果

１．はじめに

越敷山古墳群は、越敷山の山頂から伸びる尾根上に形成された古墳群であり、これまでの分布調査によって120基以上の古墳が確認されている。これらの古墳のうち、発掘調査が行われているのは、わずか20基程度に過ぎず、この古墳群の全体像を掴むには、まだまだ資料不足の感は否めない。
しかしながら、日野川に面した一等地とも言える金廻地区においてまとまった調査が行われた結果、当該地区の古墳の概要を明らかにすることができた。

今回実施した越敷山古墳群（金廻地区）の発掘調査では、古墳４基、石棺７基、石蓋土壙墓２基を確認した。平成23年度に鳥取県教育文化財団によって行われた調査では、古墳10基が確認され、墳丘の構築技法や埋葬施設、副葬品など、多岐にわたる成果が報告されている。

ここでは、県財団の調査成果に依拠しながら、越敷山古墳群（金廻地区）の状況について整理してみたい。

２．古墳群の形成過程と時期について

県財団の調査成果では、金廻地区における古墳の築造順は、121号墳から始まり、51号墳→49号墳が造られた後、北から南へと順に、77号墳→123号墳→122号墳→98号墳→76号墳→75号墳へという変遷が示されている。

今回調査した124号墳と125号墳は、123号墳よりも南側に位置することから、南から北へと順に築造されたのならば、77号墳→125号墳→124号墳→123号墳となるが、123号墳の方が墳丘の規模が大きいことから、先に123号墳が造られてから、124号墳→125号墳の順に築造されたものと考えられる。越敷山73号墳と74号墳については、古墳同士の切り合いが無いため前後関係を明らかにすることができないが、両古墳とも時期を大きく違えるものではいだろう。また、金廻家ノ上ノ内遺跡Ａ区に位置する古墳とＣ区の古墳との前後関係については、Ｃ区の石棺墓２から出土した土師器の壺から、古墳時代中期から大きく外れる時期の古墳ではないと考えられるため、Ａ区・Ｃ区の古墳とも、ほぼ同時期に形成されたものと考えられる。

金廻家ノ上遺跡で検出した石蓋土壙墓については、須恵器の坏が枕として用いられていることから、古墳時代後期前半までの時期に収まるものである。以上の成果から、越敷山古墳群（金廻地区）の時期は、古墳時代中期前半から後期前半まで継続し、横穴式石室を持つ越敷山55号墳（未調査）が最後に築造された古墳と考えられる。

３．墳丘規模

墳丘の規模については、金廻家ノ上ノ内遺跡Ｃ区に位置する73号墳が直径10m、高さ80㎝の円墳、74号墳が直径10m、高さ60㎝の円墳であった。両古墳とも、越敷山古墳群において平均的なサイズと考えられるが、丘陵の頂部に位置していることから、墳丘を構築するのに十分なスペースが確保でき

たものと考えられる。一方、丘陵の尾根部で検出した124号墳は、一辺５mほどの方墳、125号墳は南北４m、東西６mの長方形墳であり、規模の面で劣っている。このような差が生じた原因については、時期的な問題や集団内での優劣関係のほかにも、丘陵の尾根部に位置する古墳は、先行する古墳の存在によって、平坦地を確保することが難しくなるため、どうしても小型化せざるを得ない事情があったためであろう。

４．墳丘の構築方法

墳丘の構築については、Ａ区の124・125号墳では、南側の斜面に周溝を掘削し、地山を削り出して墳丘を構築しているが、明確な盛土は見られなかった。124・125号墳は、痩せ尾根上に位置しているため盛土の多くが流出しているが、地形的に多量の盛土を確保することが難しかったと推測されるため、当初からそれほど高い盛土はなされなかったと考えられる。また、越敷山73・74号墳では、盗掘などよって墳丘が流出しているが、盛土を切って墓壙が構築されていることから、当初から明確なマウンドがあったと考えられる。

５．埋葬施設

埋葬施設は、組み合わせ式の箱式石棺墓と石蓋土壙墓があり、小口部にのみ石材を用いる折衷型の石棺墓などバリーションがある。石棺の構造は、73・74号墳の主体部が「H」字形で、124号墳の埋葬施設と金廻家ノ上ノ内遺跡Ｂ区のトレンチで確認した石棺墓１が「ロ」字形であった。県財団の調査では、ほとんどの石棺が「H」字形であり、122号墳のみが「ロ」字形であった。折衷型と考えた石棺墓は、73号墳の東側で検出した石棺墓２であり、これは両小口部にのみ石材を用いていた。こうした埋葬施設の類例は、平成26年度に調査を行った越敷山79号墳や、米子市・日下25号墳の第３主体部で見つかっている。

また、石蓋土壙墓は125号墳と金廻家ノ上遺跡で確認したが、両者とも木棺の痕跡は認められなかった。県財団が調査した98号墳でも１基のみ石蓋土壙墓が検出されているが、こちらの主体部には明確な掘形が見られる点に特徴がある。

６．埋葬状況

埋葬状況については、石枕の置かれた位置から、ほとんどの埋葬施設で頭位方向が東を向いていると推測されるが、74号墳では南東方向を向いていた。また、73号墳の１主体部は北東方向を、２主体部は南東方向を向いている。また、73号墳の東側で検出された石棺墓２は両端部に石が置かれているが、西側の方がより大きな石が用いられていることから、73号墳を意識した埋葬施設と考えられる。なお、調査地の東側には大山（標高1,729m）が存在することから、この大山の方向を意識して頭が向けられたとも考えられるが、全ての埋葬施設がぴったりと大山の方向に頭位を揃えるわけではないため、明確な根拠を示しえない。今のところは、単なる偶然か、地形的な要因が大きいと推測する。

また、県財団の調査では、51号墳の石棺内から５体の人骨が出土していることから、石棺墓においても追葬が行われていたことは確実であり、一つの石棺内で先行する人骨と頭位を違えて新たに埋葬していることから、頭位方向については、必ずしも遵守しなければない規制ではなかったのではないだろうか。

７．副葬品

副葬品は、73号墳２主体部から鉄製の鉾が１点出土した。鉄製鉾は、長さ27.6cmあり、身部は鎬式で、関は見られない。袋部は円筒形を呈し、端部は山形の抉りを持つタイプである。鉄製鉾の出土状況は、石棺の外側板に接するように置かれており、石棺の蓋を閉める前に置かれたと考えられる。

鉄製鉾の副葬については、中心主体部から離れた位置に置かれた事例が多いことから、聖域を守護するための目的を持っていたという指摘がなされている。また、県財団が調査した越敷山51号墳から出土した鉄製鉾は、石棺内に副葬されていたことから、柄から取り外された状態で通常の武器と同等に副葬されたことが判明している。今回の資料は、柄の痕跡が見られず、石突も見つからなかったことから、51号墳と同様に柄から取り外された状態で棺外に副葬されたと考えられる。

古墳に供献された土器については、周溝内に置かれるものがほとんどであったが、石棺墓２では、棺内の埋土中に底部穿孔された壺が置かれていた。また、使用される器種は小型壺が中心であったが、124号墳ではミニチュアの壺が出土している。

第２節　金廻家ノ上ノ内遺跡・金廻家ノ上遺跡の調査成果

金廻家ノ上ノ内遺跡と金廻家ノ上遺跡では、縄紋時代から古墳時代までの遺構や遺物を確認したことから、長期間にわたって、この地に人為的な営みがあったことが判明した。それらの遺跡の性格は、時代によって、狩猟の場や集落として、そして墓域へと変化している。最後に、各時代の調査成果について概観してまとめとする。

縄紋時代

縄紋時代の遺構としては、陥穴が28基検出された。県財団の調査でも18基の陥穴が検出されていることから、この周辺に、合わせて46基の陥穴が存在したことになる。陥穴の規模は、丘陵部で見つかったものが大型であり、Ｂ区の谷部で検出したものは長方形を呈していることが判明した。これらの陥穴は、ある程度まとまった間隔で配置されているようであり、地形的な問題とともに、当時の植生や獣道のルートなどを考慮して作られていると想像される。今のところ、こうした陥穴がどの程度同時期に併存したものか、判断する術がないが、配置のパターンと掘形の類似から、複数の陥穴が同時期に利用されていた可能性は高いと判断される。また、表土からの出土ではあるが、縄紋時代後・晩期のものと見られる土器片がいくつか出土している点についても注意が必要であろう。通常、陥穴が設けられる場所は、集落からある程度の距離をもった狩猟の場で行われると考えられるのだが、土器の出土は、近隣に集落とまでは言えないものの、何らかの生活痕跡があったことを示すものと考えられる。この岸本バイパスのルート上では、坂長伯楽塚遺跡から縄紋時代早期の土器がまとまって出土しているほか、坂長越城ノ原遺跡でも谷部から縄紋時代後・晩期の土器が出土している。これらの遺跡の性格については坂長伯楽塚遺跡では、石鏃の出土量の多さから狩猟を行うためのキャンプサイトではないかと推測したが、越城ノ原遺跡では全く石鏃が出土しておらず、前者とは性格を異にする遺跡と考えられる。

弥生時代

弥生時代の調査では、県財団の調査によって丘陵上の越敷山49号墳と77号墳の下層から弥生時代後期の竪穴建物が２棟見つかっていることから、この時期の集落が存在したものと考えられる。

米子市文化財団が実施した調査区内では、明確な遺構は見つからなかったが、伯耆町教育委員会が実施した金廻家ノ上遺跡の試掘調査において、弥生時代中期の壺と甕が１個体ずつ完形品で出土しており、丘陵の下位においても何らかの遺構が存在した可能性がある。今回の調査でも、金廻家ノ上遺跡から弥生土器の破片集中を確認したが、遺跡の性格を明らかにすることは出来なかった。金廻家ノ上遺跡は、地形的には丘陵の先端部に位置しており、堆積土は黒色砂質土が中心であったことから、丘陵の斜面部においても集落や墓地として利用可能な平坦地が存在したと考えられる。

古墳時代

古墳時代中期には、越敷山古墳群（金廻地区）が形成され、20基の古墳が分布している。今回実施した岸本バイパス関連の調査では、県財団の調査と合わせて、このうちの14基の古墳が調査された。古墳の形成時期は、古墳時代中期前葉から始まり、後期前半と見られる金廻家ノ上遺跡の土壙墓まで継続し、横穴式石室を持つ越敷山55号墳（未調査）が金廻地区で築造された最後の古墳と推測される。

金廻地区の古墳の形は、円墳と方墳で構成されており、最大規模の51号墳で直径25m、最少クラスでは125号墳の４m程度まで幅がある。埋葬施設は、組み合わせ式の箱式石棺と石蓋土壙墓が見られるが、中には石棺と木棺を合わせた折衷型の埋葬施設も存在する。石枕はほとんどの埋葬施設で採用されており、時期的に下る埋葬施設では、須恵器を転用した枕も見られた。副葬品については、最大規模を測る51号墳から玉類や櫛、鉄製品が出土しているほか、73号墳と123号墳からも鉄製品が出土しているが、それ以外の埋葬施設では副葬品が見られず、同一の古墳群の中でも明確な差があったと推測される。

近　世

調査地周辺では、近世末期に佐野川用水が開削され、現地の地形は大幅に改変されたと考えられる。特に、調査地から金廻芦谷平遺跡まで続く水路は、南側へ大きく「コ」字形に流路を屈曲させており、一定の傾斜角度を確保しながら丘陵の裾を這うように水路が掘削されていった状況がわかる。佐野川用水見学の見どころの一つでもあったこの屈曲も、岸本バイパス開通後には新たな水路に付け替えられるため、通水している状況を見ることはできなくなった。

参考文献

小原貴樹ほか　1992年『日下古墳群発掘調査報告書』米子市教育委員会

高田貫太　1998年「古墳副葬鉄鉾の性格」『考古学研究　第45巻１号』考古学研究会

長田康平　2012年『伯耆町内遺跡発掘調査報告書』伯耆町文化財調査報告書第10集、伯耆町教育委員会

玉木秀幸　2013年『金廻家ノ上ノ内遺跡・越敷山古墳群（金廻地区）』鳥取県教育文化財団調査報告書119、財団法人鳥取県教育文化財団

表１　金廻家ノ上ノ内遺跡・金廻家ノ上遺跡・越敷山古墳群　出土土器・土製品観察表（残存・復元値は（　）で表示）

遺物番号	地区遺構	層位	種別器種	法量（cm）			色調	調整		備考
				口径	底径	器高		内面	外面	
Po.1	124号墳・周溝	下層	ミニチュア壺	2.1		2.4	褐色	ナデ	ナデ	手づくね
Po.2	124号墳・周溝	下層	土師器・壺	(9.2)		12.0	橙褐色	ケズリ	ハケ、ナデ	底部穿孔
Po.3	Ａ区	表土	縄紋土器・浅鉢	(18.6)		(4.4)	灰茶色	ナデ	ケズリ後ナデ	
Po.4	T-2	黒色土	縄紋土器・深鉢	(23.0)		(7.2)	淡黒茶色	ナデ	ナデ	
Po.5	T-1	黒色土	縄紋土器・深鉢			(6.6)	明灰褐色	ナデ	条痕	
Po.6	T-1	黒色土	弥生土器・壺	(18.4)		(1.3)	灰茶色	ナデ	ナデ、刺突紋	
Po.7	T-1	黒色土	弥生土器・底部		(7.8)	(2.3)	明灰褐色	ケズリ	ナデか	
Po.8	Ｂ区	表土	土師器・甕	(15.2)		(3.8)	灰褐色	ナデ	ナデ	
Po.9	T-1	黒色土	土師器・壺	(12.0)		(5.9)	明灰褐色	ケズリ、ナデ	ナデ	
Po.10	73号墳・東周溝	埋土中	土師器・甕	(17.3)		(4.1)	灰褐色	ナデ	ナデ	
Po.11	73号墳・北周溝	埋土中	土師器・壺			(10.9)	淡黒茶色	ケズリ	ハケ、ナデ	底部穿孔
Po.12	73号墳・２主体部	棺内	縄紋土器・深鉢	(26.6)		(3.2)	暗褐色	ナデ	ナデ	
Po.13	73号墳・北側	表土	縄紋土器・深鉢	(25.0)		(5.9)	淡褐色	ナデ	条痕	
Po.14	土壙墓１	埋土中	土師器・壺	(10.4)		13.7	淡橙褐色	ケズリ、ナデ	ハケ、ナデ	
Po.15	74号墳・１主体部	攪乱土	弥生土器・底部		(2.5)	(1.2)	灰褐色	ケズリ、ナデ	ナデ	
Po.16	74号墳・１主体部	攪乱土	弥生土器・底部		(9.6)	(2.4)	明褐色	ケズリ	ナデ	
Po.17	74号墳・周溝	埋土中	土師器・壺			(4.3)	淡褐色	ナデ	ナデ	口縁部か
Po.18	74号墳・周溝	埋土中	土師器・壺			(4.0)	淡褐色	ケズリ	ナデ	
Po.19	74号墳・南側	表土	縄紋土器・浅鉢	(18.1)		(4.7)	灰褐色	ナデ	ナデ	
Po.20	74号墳・墳丘	表土	陶器・擂鉢		(9.9)	(4.4)	橙褐色	摺目密	回転ヘラケズリ・底部にトビカンナ痕	須佐焼か
Po.21	石蓋土壙墓２	棺外	須恵器・坏身	11.8		4.8	淡青灰色	ナデ	底部回転ヘラケズリ	
Po.22	石蓋土壙墓２	土器枕	須恵器・坏蓋	(13.4)		5.0	淡灰色	ナデ	天井部回転ヘラケズリ	
Po.23	石蓋土壙墓２	土器枕	須恵器・坏身	12.4		4.8	淡茶灰色	ナデ	底部回転ヘラケズリ	
Po.24	土器集中１	４層	弥生土器・底部		(6.5)	(11.6)	淡灰褐色	ケズリ	ヘラミガキ	
Po.25	金廻家ノ上遺跡	３層	縄紋土器・深鉢			(2.9)	茶褐色	ナデ	条痕か	
Po.26	金廻家ノ上遺跡	３層	土師器・小型鉢	(8.8)		(5.1)	淡褐色	ナデ	ナデ	
Po.27	金廻家ノ上遺跡	２層	弥生土器・底部		(7.4)	(5.5)	淡灰褐色	ナデ	ケズリ後ナデか	

表２　金廻家ノ上ノ内遺跡・越敷山古墳群　出土鉄製品観察表（残存・復元値は（　）で表示）

遺物番号	地区遺構	層位	種別	法　　量（cm）			備　　考
				最大長	最大幅	最大厚	
F.1	Ｂ区	表土	鉄鍋	(26.0)	(18.0)	(0.5)	
F.2	73号墳２主体部	棺外	鉄鉾	27.6	4.0	3.1	

表３　金廻家ノ上遺跡　出土石製品観察表（残存・復元値は（　）で表示）

遺物番号	地区遺構	層位	種別	法　　量（cm）			重　量（g）	石　材
				最大長	最大幅	最大厚		
S.1	金廻家ノ上遺跡	３層	石斧	(9.8)	6.3	2.5	224.4	玄武岩
S.2	金廻家ノ上遺跡	３層	凹石	8.2	7.8	4.4	318.3	デイサイト
S.3	金廻家ノ上遺跡	２層	石鏃	2.2	1.7	0.4	0.8	黒曜石

写 真 図 版

１．調査地遠景（北より）

２．Ａ区調査前（北より）

写真図版２

１．77号墳墳丘検出（東より）

２．77号墳墳丘除去後
（東より）

３．123号墳周溝検出
（南より）

１．123号墳周溝断面
（西より）

２．123号墳周溝完掘
（南より）

３．123号墳周溝完掘
（西より）

写真図版４

１．124号墳周溝検出
（南より）

２．124号墳周溝断面
（東より）

３．124号墳周溝完掘
（南より）

１．124号墳周溝完掘
（西より）

２．124号墳周溝内
Po. 1・2出土状況
（南より）

３．124号墳周溝内
Po. 1出土状況
（南より）

写真図版６

１．124号墳１主体部検出
（南東より）

２．124号墳１主体部蓋石検出
（南より）

３．124号墳１主体部蓋石検出
（南より）

１．124号墳１主体部断面
（北より）

２．124号墳１主体部完掘
（南より）

３．124号墳１主体部完掘
（南より）

写真図版８

１．124号墳１主体部石棺掘形
（南より）

２．124号墳２主体部蓋石検出
（南より）

３．124号墳２主体部上層断面
（東より）

１．124号墳２主体部
上面の蓋石（南より）

２．124号墳２主体部
下面の蓋石（南より）

３．124号墳２主体部
蓋石除去後（南より）

写真図版10

1．124号墳２主体部棺内断面
（北より）

2．124号墳２主体部完掘
（南より）

3．124号墳２主体部完掘
（南より）

１．124号墳２主体部
　　石棺掘形（南より）

２．125号墳周溝検出
　　（南より）

３．125号墳１主体部、
　　集石１検出（南より）

写真図版12

1．125号墳１主体部、
集石１検出（北西より）

2．125号墳１主体部
下面の蓋石（南より）

3．125号墳１主体部
掘形検出（南より）

1．125号墳１主体部断面
（北より）

2．125号墳１主体部完掘
（南より）

3．125号墳完掘（南より）

写真図版14

1．125号墳完掘（西より）

2．陥穴１検出（南より）

3．陥穴１断面（北西より）

１．陥穴１完掘（東より）

２．陥穴２検出（北より）

３．陥穴２断面（南より）

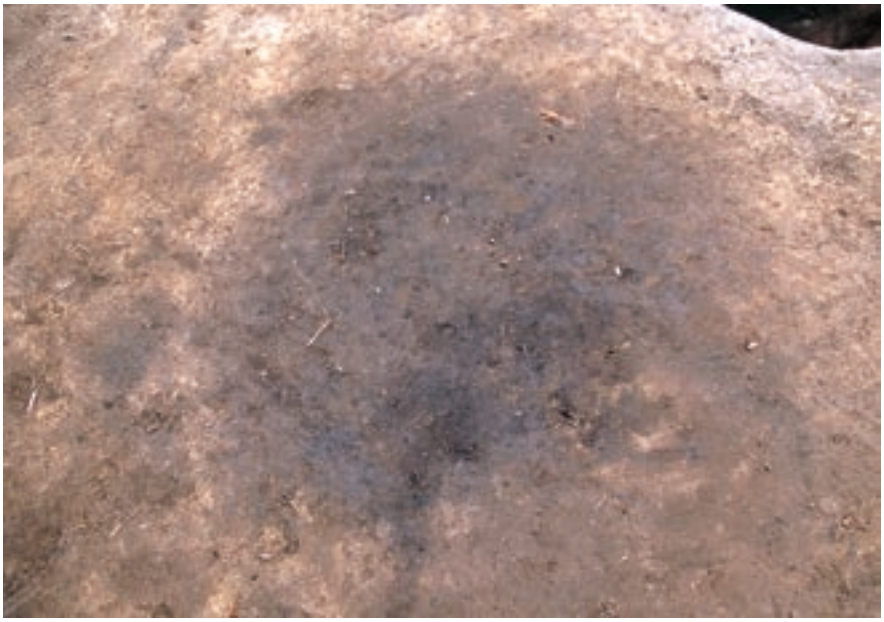
写真図版16

1．陥穴２完掘（東より）

2．陥穴３検出（北より）

3．陥穴３断面（西より）

1．陥穴３完掘（北西より）



2．陥穴４検出（西より）

3．陥穴４断面（西より）

写真図版18

1．陥穴４完掘（西より）

2．陥穴５検出（西より）

3．陥穴５断面（東より）

1．陥穴５完掘（西より）

2．陥穴６・集石２検出
（北より）

3．陥穴６断面（西より）

1．陥穴６完掘（西より）

2．陥穴７検出（西より）

3．陥穴７断面（東より）

１．陥穴７完掘（南より）

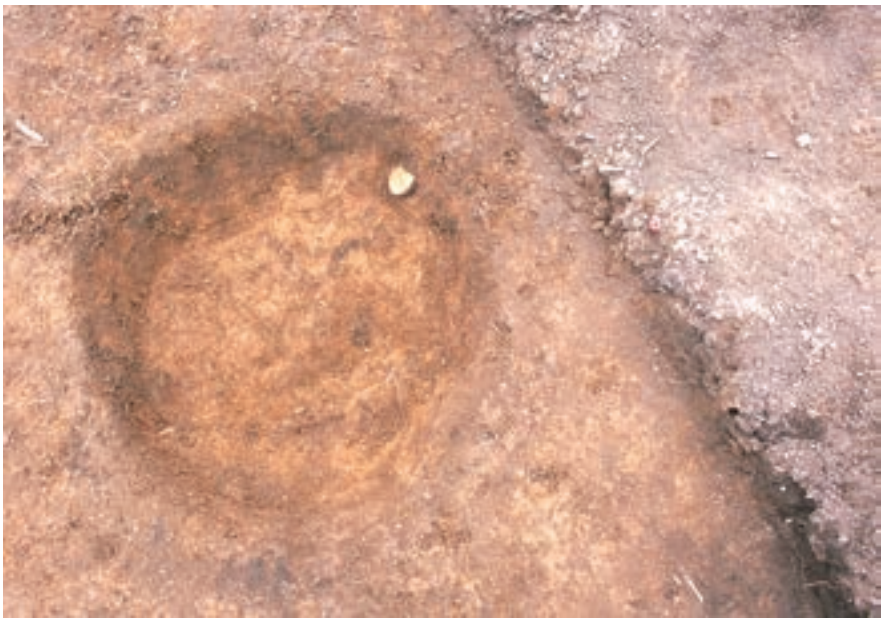
２．陥穴８断面（東より）

３．陥穴８完掘（北より）

写真図版22

1．陥穴９検出（西より）

2．陥穴９完掘（北より）



3．土坑１完掘（北より）

1．石棺墓１検出（西より）

2．石棺墓１検出（北より）

3．石棺墓１断面（北より）

1．石棺墓１完掘（北より）

2．石棺墓１完掘（北より）

3．石棺墓１掘形（北より）

1．溝１検出（北より）

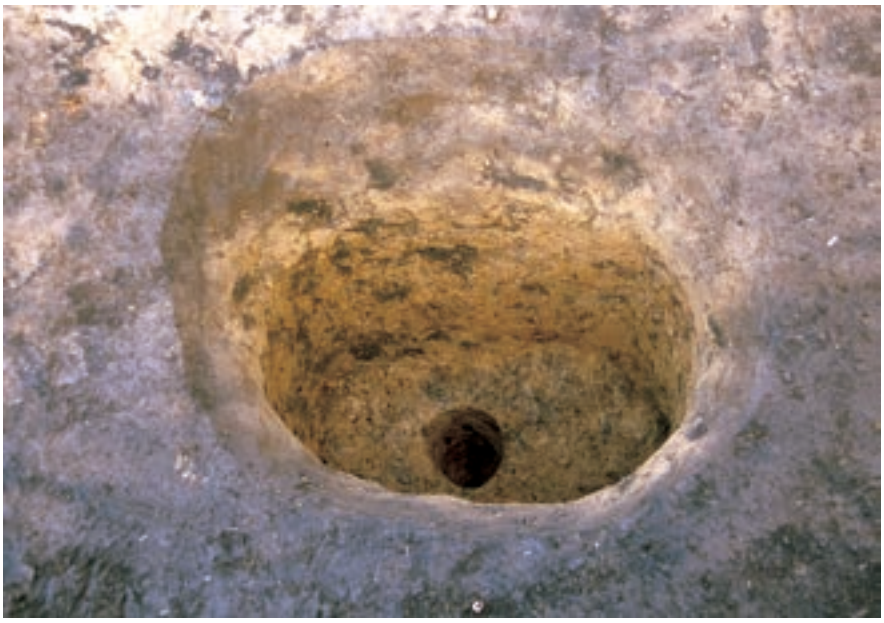
2．溝１完掘（北東より）

3．陥穴10完掘（東より）

写真図版26

1．陥穴11完掘（北より）

2．陥穴12完掘（東より）



3．陥穴13完掘（東より）

1．陥穴14完掘（西より）

2．Ｂ区調査完了後
（西より）

3．陥穴15断面（南より）

写真図版28

1．陥穴16完掘（北より）

2．陥穴17断面（南西より）

3．陥穴17完掘（南西より）

1．陥穴18断面（東より）

2．陥穴18完掘（西より）

3．陥穴19・20完掘
（南より）

写真図版30

1．陥穴19完掘（西より）

2．陥穴20完掘（西より）

3．T−３完掘（西より）

1．73号墳墳丘断面
（北東より）

2．73号墳周溝完掘
（東より）

3．73号墳土器出土状況
（北西より）

１．73号墳主体部検出（西より）

1．73号墳１主体部検出
（北より）

2．73号墳１主体部蓋石
（東より）

3．73号墳１主体部断面
（南東より）

１．73号墳１主体部完掘（南西より）

1．73号墳１主体部完掘
（東より）

2．73号墳１主体部石枕
（北西より）

3．73号墳１主体部石棺掘形
（南西より）

1．73号墳２主体部
蓋石検出（北東より）

2．73号墳２主体部
蓋石除去後（南西より）

3．73号墳２主体部
断面（北東より）

1．73号墳２主体部
人骨出土状況（西より）

2．73号墳２主体部
人骨出土状況(北西より)

3．73号墳２主体部
人骨出土状況(南東より)

1．73号墳２主体部
石枕（西より）

2．73号墳２主体部
完掘（西より）

3．73号墳２主体部
石棺掘形埋土（西より）

1．73号墳２主体部
鉄鉾出土状況（北より）

2．73号墳２主体部石棺掘形
（西より）

3．73号墳墳丘盛土除去後
（北東より）

写真図版40

1．74号墳調査前（南東より）

2．74号墳周溝検出（南より）

3．74号墳周溝断面（東より）

1．74号墳周溝完掘（東より）

2．74号墳周溝完掘（南より）

3．74号墳１主体部検出
（南西より）

写真図版42

1．74号墳１主体部
検出（南西より）

2．74号墳１主体部
検出（南西より）

3．74号墳１主体部
蓋石除去後（南西より）

1．74号墳１主体部完掘
（南より）

2．74号墳１主体部完掘
（北東より）

3．74号墳１主体部完掘
（北西より）

写真図版44

1．74号墳１主体部掘形検出
（南東より）

2．74号墳１主体部掘形完掘
（南西より）

3．74号墳盛土除去後
（南より）

1．石棺墓２断面（南より）

2．石棺墓２完掘
（南東より）

3．石棺墓２西小口部
（南東より）

1．石棺墓２東小口部
（南より）

2．石棺墓２西小口部掘形
（南より）

3．石棺墓２完掘（北東より）

1．土坑２断面（南東より）

2．陥穴20断面（南より）

3．陥穴20完掘（西より）

写真図版48

1．陥穴21検出（東より）

2．陥穴21断面（東より）

3．陥穴21完掘（南より）

1．陥穴22断面（西より）

2．陥穴22完掘（北より）

3．陥穴23断面（西より）

写真図版50

1．陥穴23完掘（西より）

2．陥穴24完掘（北東より）

3．陥穴25断面（北より）

1．陥穴25完掘（北より）

2．陥穴26断面（東より）

3．陥穴26完掘（北より）

1．金廻家ノ上遺跡調査前
（東より）

2．石蓋土壙墓１検出
（西より）

3．石蓋土壙墓１検出
（南より）

1．石蓋土壙墓１断面
（南東より）

2．石蓋土壙墓１完掘
（北東より）

3．石蓋土壙墓１完掘
（北西より）

写真図版54

1．土器集中１検出（西より）

2．第２遺構面完掘（西より）

3．陥穴27検出（西より）

1．陥穴27断面（北より）

2．陥穴27完掘（南より）

3．陥穴28断面（東より）

写真図版56

1．陥穴28完掘（西より）

2．第３遺構面検出（西より）

3．調査区断面（西より）

１．124号墳周溝内出土土器（Po. 1）　（高さ2.4㎝）

２．124号墳周溝内出土土器（Po. 2）
（S＝１／２）

３．同、底部穿孔（穴の直径2.5㎝）

1．金廻家ノ上ノ内遺跡Ａ・Ｂ区、トレンチ出土土器　（S＝１／２）

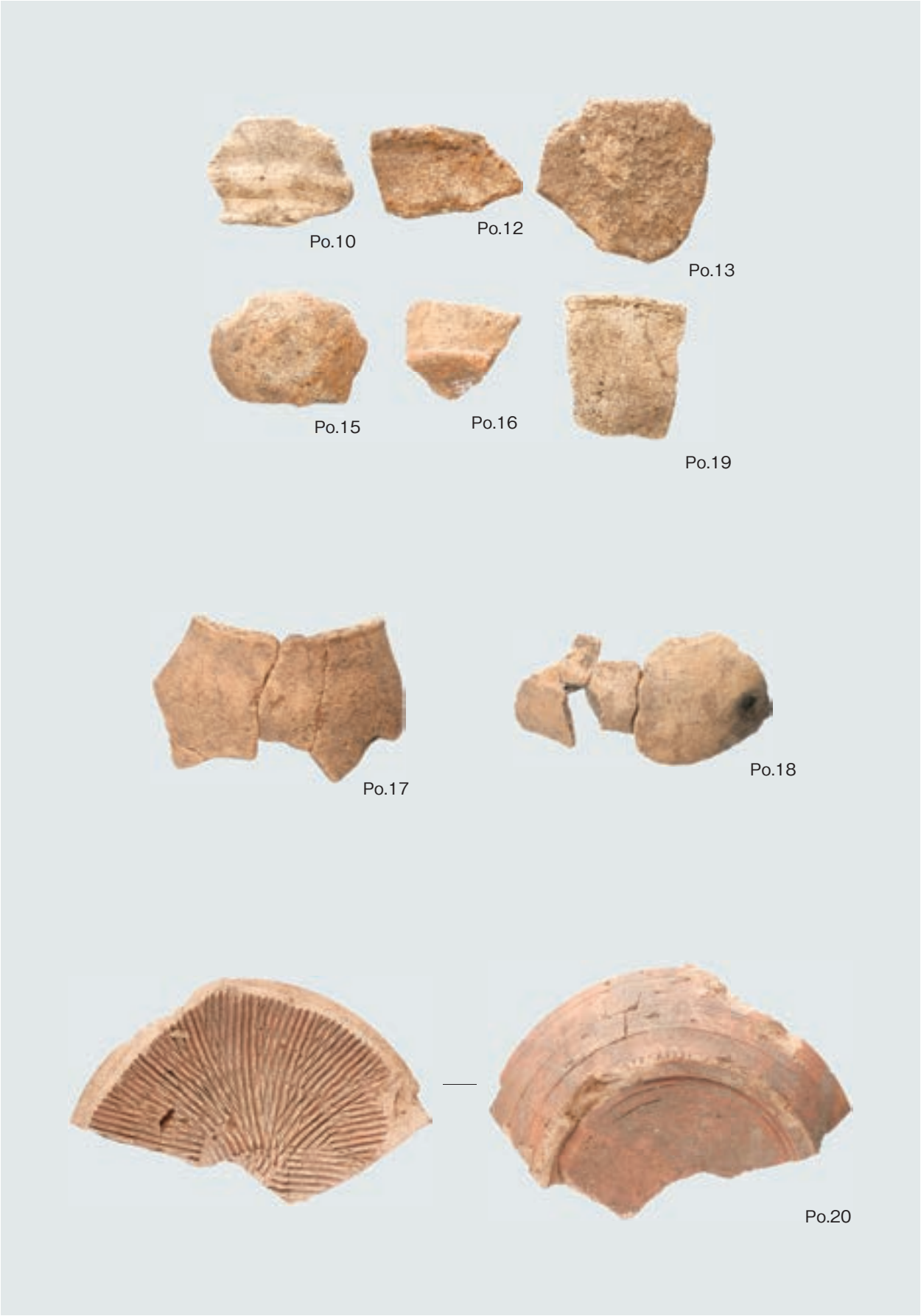
２．金廻家ノ上ノ内遺跡Ｂ区出土鉄鍋（F. 1）　（高さ8.1㎝）

1．73号墳北側出土土器（Po. 11）（S＝１／２）

2．同、底部穿孔（穴の直径2.8㎝）

3．石棺墓２出土土器（Po. 14）　（S＝１／２）

4．73号墳２主体部出土鉄鉾（F. 2）（S＝１／２）



1．金廻家ノ上ノ内遺跡Ｃ区包含層出土土器　（S＝１／２）

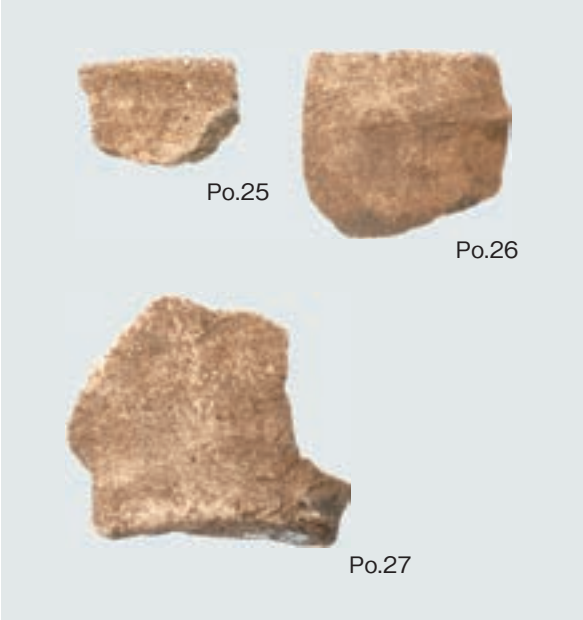
1．石蓋土壙墓１出土須恵器(Po. 21)(S＝１／２)

2．石蓋土壙墓１須恵器枕（Po. 22）（S＝１／２）

3．石蓋土壙墓１須恵器枕（Po. 23）（S＝１／２）

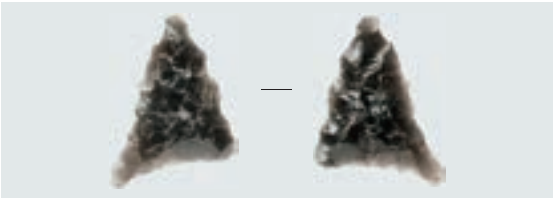
6．包含層出土石斧（S. 1）　　（S＝１／２）

4．土器集中１出土土器（Po. 24）(S＝１／２)



5．包含層出土土器　　（S＝１／２）

7．包含層出土凹石（S. 2）　　（S＝１／２）



8．包含層出土石鏃（S. 3）　　（S＝１／１）

報　告　書　抄　録

ふ り が な	かなまわりいえのうえのうちいせき･かなまわりいえのうえいせき･こしきさんこふんぐん(かなまわりちく)
書　　名	金廻家ノ上ノ内遺跡・金廻家ノ上遺跡・越敷山古墳群（金廻地区）
副　書　名	一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	一般財団法人　米子市文化財団　埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	13
編 著 者 名	佐伯純也
編 集 機 関	一般財団法人　米子市文化財団　埋蔵文化財調査室
所　在　地	〒683-0011　鳥取県米子市福市281番地　TEL・FAX　0859-26-0455 eメールアドレス　yonagomaibun@clear.ocn.ne.jp
発行年月日	西暦2017年３月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
金廻家ノ上ノ内遺跡・金廻家ノ上遺跡・越敷山古墳群（金廻地区）	西伯郡伯耆町金廻字家ノ上、家ノ上ノ内	31390	1-384 1-387 1-382 1-383 1-138 1-139	35° 22′ 23″	133° 24′ 43″	平成25年４月１日～平成27年３月31日	4,168㎡	道路建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
金廻家ノ上ノ内遺跡・金廻家ノ上遺跡・越敷山古墳群（金廻地区）	集落 古墳	縄紋時代 弥生時代 古墳時代 近世以降	陥穴、土器集中、古墳、石棺墓、石蓋土壙墓、土坑	縄紋土器、弥生土器、土師器、須恵器、石器、鉄製品、人骨	鉾(鉄製)が出土

要　　約

金廻家ノ上ノ内遺跡では、縄紋時代のものと見られる陥穴26基と時期不明の土坑２基を検出した。金廻家ノ上遺跡では、古墳時代中期の土壙墓１基と弥生時代の土器集中１基、縄紋時代のものと見られる陥穴２基を検出した。越敷山古墳群の調査では、73・74号墳と124・125号墳を調査し、石棺墓７基のほか、石蓋土壙墓１基を確認した。出土した遺物は、縄紋土器、弥生土器、土師器、須恵器、石器のほか、古墳に伴う土器と鉾（鉄製）、人骨である。

一般財団法人米子市文化財団埋蔵文化財発掘調査報告書13

鳥取県西伯郡伯耆町

金廻家ノ上ノ内遺跡・金廻家ノ上遺跡・
越敷山古墳群（金廻地区）

２０１７年３月

編集・発行　一般財団法人　米子市文化財団

〒683-0011　鳥取県米子市福市281番地

ＴＥＬ　０８５９－２６－０４５５

印　　刷　　勝 美 印 刷 株 式 会 社